TEMPUS
中等教育
可認物便郵種三第日 廿一月五年六十三治明
(行發日五廿回一月每行發日五十二月五年六十三治明)

發賣廣告!!

近世文學界の大傑作！

佛國文豪デュマ原作
長田秋濤譯

文學叢書

椿姫

全壹冊
紙數四百八拾頁

正價 並製金八拾五錢 郵稅金貳錢
特製金壹圓 郵稅金拾四錢 （三色版及コロタイプ數葉入）

現時法曹界の一問題！

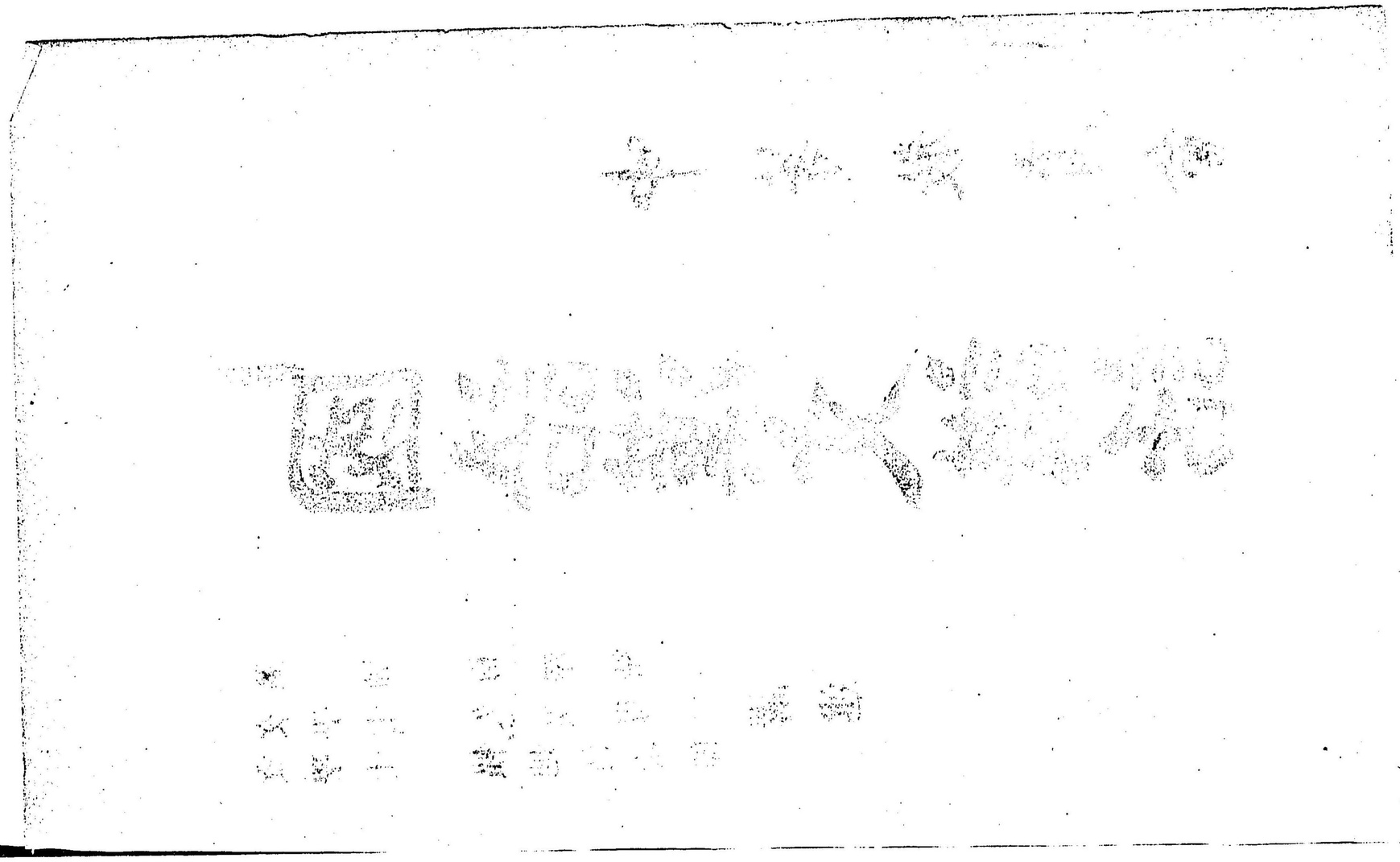
發行所 東京牛込 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區 博文館

13-489

國語漢文講話

文學士 橫地清次郎 講述
文學士 久保得二
講師 梅澤精一

中等教育會



第二期『中等教育』を發行するに臨みて

ワシントンの旗おげ（三色版）

講話

五月の植物（植物、木版入）　理學博士　松村任三
經濟と經濟生活の發達（經濟）　ドクトル、オブ　フイロソヒイ　鹽澤昌貞
電離の説（化學）　理學博士　大幸勇吉
ストックホルム大學教授アルンニウス氏肖像（寫眞版）
源賴朝の話（歷史）　講師　池田晃淵
源賴朝の眞蹟（二頁大石版）

譚叢

英作文研究の心得（英語）　講師　永持德一
ゴールドスミス（肖像入）　文學士　中西芙蓉
カーチギーの傳　應城生
カーチギー壽歷史（一頁大木版）
大學長苦學談　長田秋濤
課題平和に就いて　梅澤和軒
ロセッチ（木版肖像入）　塙村羊
寫生帖（君影草木版入）　和田鼎

雜録

ポエニ戰爭（歷史）　文學士
華族と田夫と（衛生生理）　講師　糸左近
地理學の必要（地理）　理學士　くれがし
旅行の友
文章修練の首途（作文）　農學士　志賀重昂
對稱經濟短話
俳句の話（芭蕉肖像入）　講師　五十嵐力　伊藤秋南
漢學研究法（國語漢文）　文學士　久保得二　森玄つか

編輯だより

會長辻新次　●第一號五月廿五日發行　毎月一回發行　卒業滿一ヶ年

補習科講義錄

自修讀本

會員募集

●本會は第三回全國聯合教育會の決議に基き小學校卒業生をして生活上更に切要なる學科を自宅講習せしめ善良有爲の國民たるに足るの材能を得しめんが爲め今般自修讀本を刊行して通信教授を開始す希くは事に國民教育に從ふの士幷に家長父兄諸氏は本會の意を諒とし幸に子弟を勸誘して此際速に入會せしめられんことを

●入會金貳十錢●會費一ヶ月十五錢（二ヶ月分以上前納の事）○六ヶ月九十錢○一ヶ年一圓八十錢●見本貳十錢●會則貳錢

●講習修了の上は講習證書を授與す　**五月中入會金を免除す**

講師

修身	女子高等師範教授	槇山榮次	英語
國語	東京高等女學教諭	前田捨松	國民心得
地理	東京高等師範訓導	兒崎爲槌	農業大意
歷史	東京高等師範教授	峰岸米造	工業大意
算術	東京高等師範訓導	富永岩太郎	商業大意
理科	東京高等女學教諭	渥美銳太郎	雜錄
	東京高等師範教諭	東海林運三郎	
	學習院教授	川島庄一郎	
	東京府師範教諭	佐藤禮介	
	東京府職工學校長	今景彥	
	大倉商業學校教諭	大田原一定	
	帝國教育會	讀本編輯委員	

●東京市神田區一ッ橋通町廿一番地　**帝國教育會講義錄發行部**

第二期『中等教育』を發行するに臨みて

本會が始めて『中等教育』を發行してから一年餘、日に月に發達して今日の盛運を見るに至つたのは、偏に會員諸君が常に本會に厚き同情を寄せられた結果と感謝の至りに堪へぬ。

かねても申した通り我が『中等教育』は、現今中等教育を資ける爲めに發行さるゝ書類が、無趣味雜駁で眞に學生の爲めになるのが少ないのを遺憾とし、此の缺陷を補はうとして現はれたもの、其の主眼は中學

の教科たる諸學術の講話及び雜錄譚叢等によつて中學程度の學生に趣味と實益とを併せ得しめむとするにある。而して其の特色は專門大家の確實多趣味なる講話により穩健確實なる倫理知識を與へて品性を高め、高雅なる嗜好を養ひ、確實なる科學知識を與ふるにあること、是れ亦改めて言ふまでもない。

さて第二期の『中等教育』は是等の點に於いては、其の趣味特色、少しも第一期と違はぬ。唯だ此の趣意に

より、此の特色を發揮する爲めに第二期に於いて改善した所は第一期に於いては一人の講師が一科を受け持たれたのを第二期に於いては數人の講師が、各自得意の方面より一學科を講ぜられ、其等の講話が後に纏まつて完膚をなす仕組を取つた點にある。但し、第二期の本誌に各講師の講ぜらるゝ所が互に重複せぬはもとより、第一期の講話が第二期の講話と重複することなきは勿論である。

最後に斷つておきたいは第二期の『中等教育』は、華を

捨てゝ寧ろ實を取る考、詳しくいへば成るべく挿畫などの華美なる裝飾を省いて其の代はりに實質の精選改良に全力を注ぎたい考である。

明治三十六年五月

『中等教育』編者しるす

修身實際道徳

講師　松村介石

近頃所謂より、言語の荒々しくなるのは免し玉へ。さて當時の青年ほど不幸なる者はない。世に師表とすべき人物が寔に少ない。イヤ何主義で御座るの、何教で御座るの、又は愛で御座るの義で御座るの誰れの哲學だの、某の心得だのと臆面もなく世間に吹き立て居る人物にて、其の人格を質せば、イヤハヤ驚き入る人が多くある。金を出さぬからと云うて、途方もなき虚構言を書き立て、如何にも公憤に出でたる如く吹聽する者も無いではない。豪商の犬となりて、心にも無きことを公言し、事實を虚僞なりと人に告げ、識者の爪彈きするには頓着なく、只だ己が懐に骨折賃の入るのをのみ念して居る様な人も無いではない。彼方には諂ひ、此方には媚び、乞食の様な生涯を送つて居ながら、一々其れに道理を附けて居る人も無いではない。又此の人を借り倒し、彼の人に迷惑をかけ、命を取る

徳にして約を履まず而かも恬として恥ぢず、猶は且つ道徳を説いて居る人も無いではない。余輩もこんな事は言ひたくないけれども、ツイ言ひたくなるのである。夫れは世間が善くその人の人格を穿つて、公平な制裁を加へて居れば、何んにも云ふとはないのだけれども、只だ〳〵其の言語や、文章や、説法を聞いて、イヤ先生で御座るの、博士で御座るの、公平家で御座るの、感心な男で御座るの、何のと云うて騙されて居るから、チト不平で堪まらないのである、否、青年諸君の爲に、捨てゝ置くことが出来ないと思ふのである。夫れば青年諸君が其の人格を知らずして、其の人を崇拝して居れば、即ち騙されて居るのであるし、又其の僞物たることが分かつて来る時には諸君が啻に其の人を捨つるのみならず、其の反動として終には凡べての道徳説までをも捨つる様になるからである。「アヽ騙されて居た、然れば今日他に道徳仁義を説くものあるも、是れ亦我れを騙して居るのかも知れない、左れば道徳も宗教も皆よい加減に聴いて置くべきものである」と思ひ而して此の僞物が世間より先生とも君子とも嘖されて居るのを見れば、「我れも亦一つ道徳を唱へて世間を騙してやらう」と云ふ氣にならぬとも限らない。斯

かれば希臘の所謂る詭辯家を多く出すばかりになり、我が日本社會はいよ〳〵救ひ済ずるとが出来ぬ様になるからである。

余輩も動もすれば此の弊を我が社會に来たす處があると考へたから、過般「ソクラテス傳」を書いたのである、彼れソクラテスを見玉へ、當時道徳を説き倫理を講じ、口先きでは巧いことを云うては居れども、其の人格はドダイ取るに足らず、裏面に廻れば詐僞もする、不義もする、諂諛もする、貴顯の犬にもなる、豪商の猫にもなると云ふ連中の多くあるのを見て、奮然起つて實際道徳を行ひ、實踐躬行を以て、人の本心を醒まさんと欲し、其の兵士となるも、市吏となるも、教師となるも、只管此處に心を込め、遂に一代の弊風を矯正し、狂瀾を既倒に回したのである。余輩は今日此の人が入用であると思うたから、此の人を傳したのである。然し、諸君が「立志の礎」を讀む様に、又『修養錄』を讀む様には、此の書を讀まぬ様に見えるところより稽ふれば、修養問題も今日は餘程其の見當を誤られて居る様に見える。

イヤ膳方の養成で御座るの、死生一如の覺悟でござるの、抜本塞源の工夫で御座るのと、尋ねて来る者が多いが、夫れは大悟に至れば是非とも此處に目を着けねばな

らぬが、修養の初歩時代は專ら實際道德に忠勤を勵む樣にせねばならぬ、是れオクテスの所謂る道德の第一義である。諸君の親は諸君に對して喜んで居るか、悲しんで居るか、諸君の友は諸君に對して感心して居るか、爪彈きして居るか諸君の先生は諸君を譽めて居るか、諸君を貶して居るか、先づ此の問題を問はねばならぬ。父母朋友敎師等に對して、實踐道德の出來ない連中が、膽力の養成も、死生一如もないものだ。乍併強ち諸君のみを尤める譯ではない、滔々たる世上多くは皆之れである。大學の敎授を始め、僧侶の說敎を始め、家庭敎育の論客を始め、此の黨の人が多いのである。書物や演說や雜誌抔で喋々と陳べるのを見ると、如何にも心得多き人の樣であるが、さて其の家に行つて見ると、下女は歸服せぬ、兄弟は喧嘩して居る、父母とは衝突する、近所隣家とは苦情を交換して居る、而して友人などは之れを知つて笑うて居ると云ふ始末、夫れでは とても談にならぬ。それ故に敢て諸君に警告す、諸君眞に修養に志さむと欲せば、先づ此の第一義に忠勤を勵め、道は遠からず、個々人心の中に在り、人もし此處に成功せば、人格の土臺が出來たのである。此の故に己れが修養の人でなくばかは、これを聖人賢者の書に照らして見るに及ばず、先づ日常實際の上に照らして見るべきである。而して已に此の實際の上に於いて失敗して居らぬと見れば、更に進んで吾人が所謂る天道の修養に入るべきである。ア、今や口先きばかりの僞物が威張て居る故に諸君にして社會の制裁の薄弱なるに乘じ、彼等の後に從はむと欲する橫着者ならばイザ知らず、眞に修養を志すの人ならば、先づソクラテスに從うて、修養の第一義より始め玉へ、然らば又ソクラテスの如く、遂には神の聲が己が心に聞こゆる樣な聖人にまでもなれるであらう。用心し給へ、奸惡の世であ、自ら警し、自ら戒め、口計り達者に理想を吐き而して穢多の樣な人格の人となり給ふな。

中等教育

靈魂不朽の問題

人の運命は何ぞやとの問に對する我等の答は、人とは何ぞや、人の人たる生活は何ぞやてふ二問に對する我等の答如何によりて定まる者なり。人の運命なるものは其の生活と等しく其の性質如何によりて定まる者なり。人類なる者若し唯だ自然の存在者ならんには、自然の運命ば取りも直さず人類の運命ならざるべからず。人生の理想にして其の現世の經驗以上に及ばざる者ならんには、現世は人類の萬事ならざるべからず。されど現在は道德的存在者の爲めの準備のみ試練のみ、教育のみ、之れを琢磨して益完全に至らしむる爲めには永遠の未來あるを要す。而して人類の性質ば如何なるものかと云ふに人格者なり。意志の行動によりて其の全体(理性と感性)を發表する自已なる外ならざるなり。されば道德的理想は品性の理想にして、此の人格的理想は人格的運命を含む。

早稻田小篤『倫理學綱要』の一節

國語漢文

漢學研究法

文學士　久保得二

東亞文獻研究の必要とその興味

國語漢文

講話

昭和二五

昭和二五

昭和二五

ば、五戸の、村、十家の里に至るまで、私塾といふものがあつて、一廉の學者が、一握の白髯を垂れ、見臺に向かひ、一寸角程の大文字を讀み上げて、漢文を教授し、その風化の及ぶところ、大學朱熹章句子程子曰はくは五六歳垂髫の童兒の口により、さながら今の鐵道唱歌汽笛一聲と異なることなく、馬を追ふ農夫の兒までが、「月落烏啼」を唸り、甚だしきに至つては、勸學院の雀が『蒙求』を囀づつたといふこと、漢學の盛んなる殆んど譬ふるに物のない程で、島帝國の思想界を全く獨りで占領して居て、他の學術の輸入を許さなかつた程である。諸君もし之を詐と思ふならば、御祖父さんにでも聞いて御覽じ、拙者は決して法螺なんど吹き申さぬ。

物換はり星移る幾度の秋！昔を知る人に、今の有樣を見せたなら、誰れか一掬の涙なからむやといふべきまでの衰微、考へれば、情ない位。凡そ漢籍といへば、一個の骨董品と同樣で、大道店にまで列べ立てられ、紅塵黃埃の中に埋沒し、動もすればつぶしにして、反古と同一に視て、一貫目いくらといふ相場、聖經賢傳も、酒瓶に張り付けられるのならまだしもである。時に豆や黃粉の袋に成ることさへもある、かくて一般の學校に在りては、初等教育の上に於て、この文字を節減し、中等教育に

於て、漢文の講習を全廢しようなどと唱ふる教育家さへも出て來て漢學の價値は頗る下落して仕舞つた。諸君も、定めて漢學を以て、無益にして且つ困難なる學科であると考へられるであらう。

漢學が、かくの如く衰微したのは、如何なる譯であるか、歐西思潮の疏導は、極めて必要であるが上に新を好み舊を顧みざるが人情の常であるからといへば、それまでもあるが、また外にいくらも理由がある。從來漢學者の極めて間拔なのと、變通の才のないと、腰拔で役に立たぬなどもこの主要なるもので漢學者自身が、漢學その者を殺したようなものであるが、予が私見を以てすれば、漢學の組織的研究が、未だ甚だ振るはず、その範圍が極めて不明瞭であつて、一般の人が、その特質を十分に認知せずして、之れを眞正價値以下に卑視したのが、唯一の根本的最大原因であつたに相違ない。

漢學といふ二字は、何を意味するか。これがすでに、極めて不合理なる名稱である。むかし、日本では、支那の文明を摸倣したが、それは、主として唐制に基づいたもので、禮文度數は、いふに及はず、學問まで、すべて唐を師としたのである。唐の日本

に於ける、極めて緊密なる關係を持つて居るので、早い話が支那の事を今以て唐といふのを見ても分かる。されば、王朝時代、日本に於いて講習したる支那の經學はすべて唐と同じく漢の注疏であつた。『令義解』に、凡教授正業、周易鄭玄王弼注、尚書孔安國鄭玄注、三禮毛詩鄭玄注、左傳服虔杜預注、孝經孔安國鄭玄注、論語鄭玄何晏注とあるが、これは唐に於いても正學としたので、更にこれを詳解し、注の注を作つたのが十三經注疏である。これから、如上の諸注は、皆漢儒の作であるから、唐ではこれを漢學といひ、日本に於いても、同じく漢學といつたのである。世には漢唐訓詁の學と稱へるが、唐學は全く漢學から出たのだから、宋より以前の經學は、便宜上すべて漢學といつても差支ないのである。漢學の主とするところは、文字に就いて意義を求めるのであつて、甚だ面白くないところから、宋に於いては、學風を一變し、精神上から之れを解釋することゝなし、佛教の影響を蒙り、高遠なる形而上學的思索を凝らし、往々にして新見を出だしたのであるが、宋人は自ら之れを理學といひ、後世に成つては時に或は宋學といつたのである。これから、明は宋の續きであるが、今の清は漢唐の復古である。されば、支那の經學は、多端なりと雖も、之れを大

別すれば、漢學、宋學の二つに過ぎぬのである。注意せよ、漢學とは、元經學の一部であつて、支那學若しくは東亞文獻學といふ廣い意味は、根本的に無い筈のものである。

日本に於いて、漢文講習の盛んであつたのは、諸君も知らるゝ通り、王朝時代と徳川時代とである。王朝の學問は、前にも云つた通り唐學即ち漢學であつたが、徳川時代の學問は、漢學ばかりではなかつた。朱子學あり、陽明學あり、折衷學あり、その他樣々のものがあつて、眞正の漢學を講習するものは別に古學者と呼ばれて居た。しかし、王朝時代には、漢文講習を漢學と呼び習はして居た故に、世間の人は、この眞義を悟らず何んでも四角な文字を讀むことが漢學であるといふ、極めて簡單にして且つ無意味なる觀念を持つて居た故に、徳川時代の學者は、この流派に關せず、すべて漢學者と呼ばれその講習する學問を漢學と云つたのであるが、かく呼ばれた學者先生も、案外物を知らぬ手合であつた故に、それなりに、自分でも漢學者と名乘り、漢學を修むなどといひ、毫も怪しまなく成つたのである。漢學の二字はこゝに於いてその本義を離れ、極めて廣濶なる意義を有することゝなつた。それはまだ

〳〵善い事として、その後いつとなく、猶は一層廣いものとなり、經學はいふに及ばず、支那の史學、純文學、法律學、政治學、科學（曆法算術までもすべて漢學の二字に括められることになりかけて仕舞つた。

かつて、漢文といひ、漢詩といふのが面白くないといつた論者があるが、漢學といふことの極めて無意義にして且つ誤れることは、上に述べたような次第であるから、予は自ら新名稱を下し、之れを東亞文獻學と呼ばうと思ふ。支那文獻學ではない、東亞！東亞！何となれば、支那文字を用ゐるのは、支那ばかりでなく、日本朝鮮安南等であつて、支那文字を講習すれば、支那は固より、日本朝鮮安南までの事が分かるから、嚴格にいへば是非東亞文獻學と呼ばねばならぬのである。この篇の標題に、漢學研究と書いたのも、實は小生の本志ではないのだが、はじめから、東亞文獻學といつたところで、或は諸君に分からぬ事もあるかと存じ、故らに從來の慣習に從つたのである。序に帝國大學の漢學科もよろしく東亞文獻學科と改むべきである。諸君忘れても、漢學などいふ、不明瞭なる語を用ゐる玉ふな、小生も斷じて用ひぬかく申す小生甚だ口幅ッたきことながら、これでも東亞文獻學者の一人である。

むかしの漢學、今こゝに謂ふ東亞文獻學は、略ぼ同一の範圍を有するものとして何でも關はず、支那文字を以て書き留めた圖書の研究を主とし、迷宮の扉を開からうとするのである。かつて『孔子論』といふ本を書いた米國の學者ゼンキン氏曰はく苟くも少しく智慮あるものは、誰れか支那國民を以て人文史上驚くべき一大現象と爲さゐるものぞ。かの三角塔及びスフインクスを以て稱せらるゝ邦土と雖も恐らくは顏色なからむ。然れども、支那の秘密が雲霧に包まれてその眞相を示さざるは埃及に比して、一層甚だしきものありと。しかし世界に知られないのは支那ばかりではなく、日本朝鮮安南等東亞の諸國が、いづれもさうである。否、否、世界に知られないどころか、お互同士さへ碌々知らぬのである。試みに諸君に問はう諸君は安南王國の滅亡が何年に在るかを知つて居られるか、朝鮮名臣鄭夢周の事蹟を知つて居られるか、東洋のチルソンともいふべき朝鮮の水將李舜臣が何處で死んだか知つて居られるか。先づざつと、かくの如くであつて、東亞文獻學の講習は學者に取つて、極めて必要であるのみならず、就中我が邦後進の學者に對しては特別の關係と興味とがある。

しかし注意すべきは、東亞文獻學は、主として歷史的研究に在るといふことである。何となれば、東亞の諸國、日本を除いては、いづれも文化の進歩が中絶した故に、いくら之れを研究したからといつて、歐西日新の學問に從事することは全く勝手が違ふのである。すべて、學問の種類は數限りもないが、之れを大別すれば、二つ、即ち理論的と實際的。それから、その理論的の者も、亦二つに分けられる。即ち過去の事實を穿鑿して宇宙の大理法を辯證的に發見すると、事實以外に思索を凝らし、未知の假設的新定理を提供するのとであるから、前者は具體的なる歷史的研究で、おつて、後者は抽象的なる獨立的思索である。しかし、この兩者の價値を輕重するのは、極々幼稚なる見解から出たもので萬般の學問は、互に聯關して、其の用を全うすべきものである。若し予輩にして、今日の歐西の學問例せば哲學などを研究するならば、爲學の工夫學說の論理的接續の跡を明らかにし、自己の新說を出だすに便ずるのが至當であらう。しかし文獻學就中東亞文獻學を講習する以上には、東亞人文の開展の歷史を明らかにするのが唯一の目的である。

人ば各、獨特の所長があるから、それに適當した學問を擇ぶが可からう。しかし

成らうことなら、便宜といふ事にも、一寸注意しなければならぬ。歐西の文獻學は歐人自ら之れを修むべし。吾々は東亞の人間だから、東亞の文獻學を修めるのが極めて至當で、且つ便利な事ではあるまいか。今日東亞文獻學の價値を疑ふものがあつたならば、それこそ、物を知らぬ奴で丸るで話にもならない。狂人や馬鹿を相手にすれば、矢張同種類の狂人や馬鹿たるを免れない。知る者は默すと老子といふ瓢金な親父殿の申されたことがあるが、尤も千萬な事で、吾々は傍人の誚譏に關せず、一生を擧げて東亞文獻學の爲めに力を盡くさうと思ふのである。

さて東亞文獻學といふものゝ、如何なる分科を含むものか、元來支那といふ國は兎にも角にも、自己獨特の人文を以て、殆んど五千年の長歷史を搆成したものですべての物が、たとひ幼稚なりとはいへ先づ〳〵ざつと備つて居る。文學的のもの科學的のもの、法學的のもの、その他何でもござれであるがその內、支那の科學や、法學などはとても今日歐西の者と比較することも出來ないし、理論と實用とに於いて、丸で不十分であるから、餘程の物數奇でない限り、その歷史的研究を遣つて見たところで、さばかり面白からう筈がない。そこで、先づ東亞文獻學は、大抵文學的方

面のものに限るとしたものである。

今日我が國の帝國大學の文科に就いて見たところで、その分科は多いが、之れを大別すれば四つである、即ち純文學・哲學・史學・言語學、そこで東亞文獻學もこの四科に分けて、研究すべきである。尤もこの四者は、相互に離るべからざる關係があるが、世の中の事は、分業でなくては、うまく行かぬ故、いづれも多少は食ひ噛るにしても、その中心點なる一科を定め、主として力を此れに盡くす樣にしなければならない。

從來の漢學の理想は、治國平天下で、一躍して、政治家もしくは經世家に成らうとした故に、支那哲學の一部を噛りかけ、之れを其の儘實際に應用したのが、第一であつた。その次ぎか學者、即ち古經研究家、もしくは註釋家、その次ぎが文人と詩人、即ち支那文學の摸倣者であつた。それから、第二の者即ち學者たるものも、丸で歷史的研究といふをに注意しなかつたから、今日から見ればその書いたものも、左程世益にならない。凡そ、註釋は、之れを以て或る種の方便となさざる限り、原始的意義を發明するを以て極致としなければならない。されば、註釋解義は、宜しく一に歸

すべく、又かくの如くなすところの必要があるのである。然るに、從來の學者は、之れを假りて有り難くもない自己の臆說を出したに過ぎないから、屋上に屋を架したと同樣で、事が愈〻小六つかしくなるばかりである。註釋は註釋、自說は自說、彼等はその區別をさへ知らずに居たので、いやはや腹筋千萬。漢學我が邦に傳はつてすでに千有餘年、東亞文獻の研究に、どれ程の貢獻を成したか。邦人の手に成つた一部の支那歷史さへも無いでは無いか。こんな事では、とても駄目だ。宜しく、態度を明らかにし、何處迄も歷史的研究の精神を以て一貫しなければならぬ。新しい事でも言ひたければ、歐西の學者の眞似をして何でも考へ込むが宜しかるべし。知らるべき筈で知られなかつた東亞の事は、一にかゝる方針を以て研究し、着々としてその歩武を進め、學問自慢の赤髮の青眼玉をひん剝いてやるも、絕代の快事ではなからうか。

前にもいつた如く、東亞文獻學は、文學的方面に限るをとし文學、哲學、史學、言語學に分けるとするが、唯だ頭から支那の書籍に食い付いて見たところで、矢張り、迂腐たるを免れない。凡そ文學・哲學・史學・言語學には、一般普遍的の原理と研究の方法

とがあるので、これは是非とも歐西の新しい處から學ばなければならない。先づ支那文學の歷史的研究を遣るとすれば、文學の何者なるか、文學史の何者なるかに就いて、極めて明晰なる知識を持つて居ないかぎり、どれ程の事が出來よう。かくて、十分に之れを呑み込んだ後、支那の文學的作品を、それぞれ研究し、思想の變遷とその間に存する論理的接續の跡を審にし、更に形式上の審美的方面に向かはなければならぬのである。しかし、これには基礎的補助學問が必要となるので、話がちと飛び離れて、高尚に過ぎるかも知れないが言はずには居られないから、一寸述べて見よう——すべて文學は、內容と外形との調階を以て極致とするのだから、この兩者、いづれを閑却してもならぬ。それから、文學的作品の內容は、時代一般の思潮と個人の性癖とから出來て居る。そこで、時代一般の思潮を知らうとするには、社會學の知識が無くてはならず、個人の性癖を研究するには、心理學の原理を知らなくては駄目である。次ぎに文學の外形に就いて評量するには、修辭學を第一とし美學といふ高尚なる學問が入要となる。何處の國の文學にしろ、十分に之れを鑑賞するには、この基礎的學問として、上述の如く、少なくとも社會學、心理學、美學を、或

る程度まで研究しなければならぬ。支那文學でも、矢張り文學であるから、決して除外例とはならない。そこで、支那文學を研究するには、兎に角、上に言つた學問を習ひ、その上で、支那の詩文を十分に熟讀して、之れを評價解剖すべきである。かくの如きは、禿頭の諸老先生達に望むことが出來ないから、吾々若い者が、一肌ぬいで、研鑽に從事し、今まで幽遠に埋沒して居た徽光を世界に顯彰せしむべき筈ではなからうか。

次ぎに支那哲學、支那史學、支那言語學、いや支那と限つたのは惡かつた、廣くいへば、東亞哲學、東亞史學、東亞言語學といふべきであるが、これ等を研究するにも、それ準備が要ることは申すまでもない。一般哲學の知識がなくて、四書五經諸子などを捻くつたところで、東邦哲學を明らかにすることは出來ない。その他皆かくの如しである。何でも、理窟は歐西否世界一般に行はれて居る學理を十分に呑み込み、之れを東亞に應用せよといふのである。

かくの如く論じ來たれば、東亞文獻學は、なか〳〵生やさしいものではないが、赤幟ともの知らぬことを知らして遣ることになるのだから、極めて愉快に、且つ興味

あることである。

しかし赤髯の歐羅巴人は、日本人などゝ違つて、案外學問好であるから、多大の困難にも平氣で、ふるくから東亞文獻の研究に從事して居た。文獻通考といつて支那の制度を書いた本の一部が、和蘭語に譯され、元代馬致遠の作つた脚本「漢宮秋」の英語に譯されたのは、ずんでに百年前の事である。それから「侍經」の譯などは隨分久しいもので、少なくとも、次ぎの三種があるといふこと、なんと、少しは驚くべきことでは無からうか。

(一)獨譯——Rückert, F-Sohi-King (Altona. 1833)

(二)佛譯——La Charme. P, & Cramer. J.—Schi-king (Crefeld 1844)

(三)英譯——Legg. J— The She-king. (London. 1876.)

このレッグといふ人は、なか〳〵えらい人で、四書五經以下、先秦時代の典籍を大抵飜譯した。勿論東亞風俗の異なると、その研究の困難なるとに因つて、時々笑ふべき誤謬もあるが、實に大したものではないか、彼れは二三年前に死んだ。

近ごろでは、ジャイルといふ人があつて、これは簿波に領事をして居たが、今では

カンブリッヂ大學に教鞭を執つて居るとの事である。予が知るところの彼の著書は、次ぎの三種で、いづれも必要なものである。

(一)華英字典——Chinese-English Dictionary (Hongkong)

(二)支那人名字書——Chinese Biographical Dictionary (London 1898)

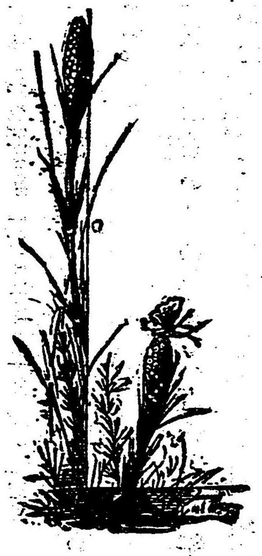
(三)支那文學史——History of Chinese Literature (London 1900)

この外、文學史學の研究に就いてなか〳〵見るべきものがある。但し哲學の方面は、まだ寂寞たるを免れない。

東亞言語學の研究は、なほ一層古いもので、千六百六十七年、和蘭の學者キルヘル(P. Kircher)が、羅甸語で書いた論文を初めとし、後二年ジョン・ウエブといふ人が、"An Historical Essay on the Probability that the language of the Empire of China is Primitive Language"といふ長々しい名の本を書き、千七百八十七年ダンエル・ウエブといふ人が、"Some Reasons for thinking that the Greek Language was boreomel from the Chinese"といふ論文を出だして以來比較言語學上の研究が、愈〻盛んになつたが、千八百八十年には、佛國の學者テリアン・ド・ラックペリー(Terrien de Lacouperie, M.R.A.S.)といふ人

が亜細亜協會雜誌に一論文を掲げ、支那の文化はバビロニヤから來たものであるといふ極めて新しい説を出した。

歐洲に於ける東亞文獻研究の盛んなことは、ざつとこの通り、吾々日本の學者は奮發しないで、何としよう。漢學などは、どうでも善い。ただ東亞文獻は、飽くまで研究すべしである。



國語漢文

支那文字の起原

文學士　久保得二

東亞文獻研究の必要と、その興味とは、前號に於いて略論したが、何でも先に立つのは讀書力の養成である。そこで斯學に志あるものは、自己の研究に必要なる準備的學科を講習すると同時に、一方に於いては常に支那の書籍に枕籍しなければならない。ラックペリーといふ學者はかつて、東亞文獻研究の困難を論じて下の如く言つたことがある。「支那で印刷した書物には、今日吾々歐羅巴人が使用するやうな句投（パンクチユエーション）の一種類もなく、どこで節が改まるのか、章が改まるのが薩張分からないので之れを讀みはじめには隨分骨が折れる。しかし日本で出版したものには多くの句投が付いて居るから出來るだけ之れを購求するが好い」。なる程尤も千萬なことである。が從來日本に於いて翻刻された書物は、かなり多い樣なもの、實は未だ程でもないのみならず、明清以後の者は、數へるばかりの少數である。ここで

吾々は是非とも支那出版の書籍、即ち謂はゆる唐本を讀まねばならぬので、同一の困難に遇ふことを免れない。無點の漢籍一寸讀み惡いもので、大學漢學科出身の學士でも中には碌々讀み切らぬ奴もあるといふこと。こんなことではとても駄目、何でも本といふものは、早く讀んで、要點を領會するのが大事である。さうでもしなければ一生かかつたとて、どれ程も讀むことが出來ない。

サアこれから讀書力の養成だが、先づ第一に字を知らなければ、拾ひ讀みしか出來ぬので、十分に玩味するなど、とても思ひも寄らぬことに相成る。然るに、支那文字の講習は一寸言つて見れば、なか〳〵六づかしい。單なる文字の數だけでも『康熙字典』に五萬ばかりあるし、ラックペリーの言に據れば、全體は其の倍で、殆んど八九萬あるとのこと。それから二字結合して、出來た熟語、若しくは成語といふものはその又何十倍といふ程であるから、實に驚くべきものである。小生は目下、極めて卑近なる漢字熟語字典を編纂しつゝあるが、その開卷第一「阿」の一字に就いて云つても、之れを頭に戴いた熟語といふものは下の如き多數である。

阿――阿衡、阿香車、阿諛、阿從、阿然、阿邱、阿帶、阿陽、阿保、阿房、阿房宮、阿姆、阿付、阿父、

阿二、阿嬌、阿魏、阿堵物、阿闍梨、阿修羅、阿修羅道、阿修羅王、阿彌陀、阿羅漢、阿伽、阿呍、阿吽、阿鼻、阿蒙

ざつと、こんな安排だから、八九萬の字に就いて言へば、大したもので、平均一字を頭にして十個の熟語があるとしても、八十萬となる。それのみか、もう一つの困難は文字が二つ結合したとき丸で前者に關係のない新意義を生ずることである。たとへば、鮒は魚、馬は四脚の動物。しかしこの二字が結合して、鮒馬となると、丸で違つた意義即ち、天子の婿君といふことになる。又倉は庫、即ち物を仕舞ふところ、庚は十干の一、もしくは年といふ義、この二字が結合して倉庚となると、鶯の異名、こんな類が澤山あるから愈〻六づかしく成るのである。

八萬の文字、八十萬の熟語、一生かゝつても覺え切れぬ程で、とても遣り切れないから殘念ながら、東亞文獻の研究は廢してもつと易しい事をしようといふ人もあるだらう。しかし待ち玉へ、これは極端の事を云つたので、實際に於いては、そんなでもないのである。漢字は八萬あるだらうが、實際に用ゐる字は極めて少ないので、その他は一生に一二度、何かの本で御目に懸かるか、或は全く見ずに仕舞ふのも

ある位、かくの如きはどこの國の語學でも同じことであるとされば、今日普通用ゐる漢字もしくは必讀の典籍に見えるものは、どの位かといふに、案外にも少ないもので、全總數の十分の一と見れば澤山である。ラックペリーは普通吾人が支那の書籍に於いて出遇ふところの文字は事實に於いて、大方八千字ばかりであらうといつたが、ジャイルスは、更に之れを値切つて、六千字知つて居れば立派な東亞が獻學者だといつた。成程さうかも知れない。氏の編纂に係る「華英字典」(Chinese English Dictionary)は、一萬二百字の漢字とそれから出來た熟語とを含んで居るに過ぎないが、實用上少しも不便を感ぜざるのみならず、それより猶ほ字數の少ない「五車韻府」といふものでも十分である。

六千の漢字それから出來る熟語を六萬としたところで、前に云つた樣なまるで意義の違ふものは、實は極めて稀な場合で、大抵は之れを組み立つる二字の意義が互に補ふものに過ぎないから、直ちに諒解されるのである。されば前に云つたのは、實の處甚だ申譯がないが、一寸諸君を脅かして見たばかりのことで、かへすがへすも之れを眞に受けては困る。

吾々もまだ少い時分しば〳〵經驗があるが、本を讀んで知らぬ字にぶつ着かると自分勝手に好い加減な發音さして、好い加減な意味を取り、その儘に濟まし、かくて生涯之れを知ることが無くて終はる。これが誠に惡い癖で、こんな事では、物の分からう筈がない。それが爲めに字書といふものが、ちやんと備はつて居るのだから少しく怪しいと思つた字があつたら、はじめは面倒臭いが、どし〳〵字書を引くべし。かくの如くすれば十分明瞭に意味を會得することが出來るので、又從つて恥を搔くことも無い。字書を檢する勞を辭せず、これが讀書力養成の第一要諦である。

文字の發音及び意義を正確にするにはその文字が如何にして組み立てられて居るかを十分詳密に吟味せねばならない。然るに方今世人の大多數は決して文字を正確に書くことが出來ぬのみならず、全く之れを知らないと云つても好い位である。その例を擧げると、

正確なる文字

術 (美術・藝術の術)

世人誤書の文字

術

國語漢文・支那文字の起原

越（越前・後の越）　　越
仇究芄　　仇究芄
豐（豐富・豐年・豐臣・太閤の豐）　　豐

術の字は、眞中に朮「ジユツ」といふ字が挾まつて居るから「ジユツ」といふ音が出るので若し求ならば「ジユツ」といふ音の出やう筈がない。越も同じで戊の字の音が「ユツ」だから從つて「エツ」といふので、斧鉞の鉞も同じである。仇究芄、いづれも、丸があるから「キユウ」といふので、若し丸ならば、仕方がない「グワン」とでもいふのか。豐の音は「レイ」禮・醴・澧いづれも「レイ」の發音なので、豐とは、全く別字である。豐太閤と書けば「レイタイコウ」と發音する外ない。

それから、また一種邦人特有の誤がある。それは組み立てる文字には幸にもないがその位置が、惡るいので、島もしくは島を嶋と書き、鳩を鳩と書くの類で、支那人は大層之れを笑つて居る。兪曲園の『東瀛詩選』の例言に「東國の字體、詭異に渉るものあり」といふたのは、即ち此の種類である。

東亞文獻研究の第一たる漢字の智識を正確にするのには、字畫を審かにし、疑似

の文字との混淆を避ける樣に注意しなければならない。しかし從來因襲的の誤謬といふものは、隨分甚だしいもので、先づ一寸した處で、「このだん、おんとどけ、まうしあげさふらふなり」といふのを、多くの人は、如何に書くかといふと、

此段御届申上候也

諸君も、或は、かくの如く書かれるかも知れないが、僅々八字の中、四字までは誤つて居る。

段は字引に無い字で、これに近いのは叚、その音は「か」そこで叚の付いて居る文字、蝦、霞等は、いづれも「か」と發音するのである。段、叚いづれにても「ダン」といふ音はない「ダン」の眞の字は段である。次ぎに御は眞中の處が誤つて居るので、缶と書かねばならない。届の字も、字書に無い字で、之れに似たのには、届といふのがある。その音は「テン」で、穴といふ意義である。「とどける」といふ眞の文字は、屆であつて音は「カイ」至るとか極めるとかいふ意義の字である。最後に、侯は、公侯伯子男の侯であつて、丸で違ふ、眞中に棒を一つ入れて候と書かねばならぬ。そこで、正しいのは、

此段御届申上候也

かくの如き誤を生ずるのは外でもない、小學校などに於いて、教師その人すでに正確に文字を知らず、その教授法に注意しない上に、普通用ゐる習字本などが學問の無い書家の手に成つて誤謬極めて多きに拘はらず、その儘に採用して居るからである。あつてその根柢はなか〳〵深い。憐れむべき我が同胞の小學生徒は似而非教科書を以て花の蛟くとき如何にも見事だから、自宅でも梅を植ゑよう、これは尤も千萬

な事であるが、隣家の梅の香は衛生に害があるから、自宅では別に梅を植ゑようと云つたら何樣であるか、書を以て言へば先づ此の如きものである。

予が見にして誤なくむば支那文字は、世界諸國の國語に比して、その文字の由來比較的に明瞭であつて整然たる體系を以て成立したものであるから、字畫を明らかにし意義を審にすることは、決して困難でない。こゝに於いて、話が少し專門になるが標題に掲げた如く支那文字の起源と、その構成方法とを略説する必要があるのである。

扨てこれから支那文字製作の起原を略述して今回は、それで濟まし次きには六書即ち六種の構成方法を詳論することに致さう。

＊　＊　＊　＊　＊

文字といふものは人文史上極めて重要なもので非文明的種族と文明的種族との別もその一は、たしかに此に在ることゝ思はれる。勿論未開の野蠻人例せば亞米利加の印度人などの中にさへ歌謡もあるし俚諺もあるのであつて國民文學の萌芽は極めて幼稚なる時代に於いて發生するのであるがそれが一個の文學とし

て成立しないのは、全く文字が無くて、體系的發達を爲さぬ故であらう。

東亞のツラン人種、即ち支那に住んで居る漢族は、兎に角立派な文明的種族であつた故に、案外早く今を去ること五千年前に於いて、文字を製造した。例のラックペリーは支那とカルデヤとの關係を論じ、支那の文字は矢張カルデヤから來たものだといつたが、これは、未決の疑問であつて、予輩は、姑く古說に從ひ、漢字を以て支那人の獨創に係るものとして議論を立てようと思ふのである。

漢字は、普通に大昊伏羲氏が考へ出したものといつて居る。これより先は、約束を爲たり何かする時に、繩を結んで瘤をこしらへ、それで或る意味を顯はしたのであるが、不便で仕方がない故、伏羲が智慧を搾つて、その大發明を爲したといふのである。しかし、これは唐の時代に司馬貞が書き足した史記の三皇本紀に見えて居るので外の古書にはあまり見えぬことであるから、折角ながら、どうも信用することが出來ない。

一之れに次いで黃帝の時に蒼頡といふ人が、始めて文字を造つたといふのは、殆んど信ずべきものであらう。蒼頡といふのは黃帝の史官であつて、目が四つあつた

といふこと——化物に近い奇妙な人間——それが鳥や獸の足跡を見て、何やら感ずるところがあつて始めて文字を造つた。しかし、これは全く象形文字の一體であつたらうと思はれる。元來文といふのは「あや」とか「かたち」とかいふので、象形を意味するので、その二つ若しくは三つが結合し意義が複雜に成つて出來たのを、字といふので、字とは「やしなふ」とか「ふえる」とかいふのである。そこで、漢字の根本は文即ち象形、その後字即ち諸種構成の方法を以て出來た文字が漸々に增加して、今日見る如く成つたのである。文字がすでに出來たので、之れを竹や布に書いたから書といふので、文、字、書の三字、各異つた意味を持つて居るから、決して混合しては ならぬ。

普通に倉頡は黃帝の史官だといふが、或る說に據れば黃帝よりも遙かに早い時代——即ち神話時代の君主で實に倉帝史皇氏といふ人だといつてある。その史皇氏名は頡、姓は侯岡、龍顏侈侈、四目靈光仰いでは天上の星を眺め、俯しては山川草木鳥獸の形を審かにし、掌の上にいろ〳〵書き試みて、とう〳〵文字を造くり出した。その精誠の感ずるところ、天爲めに粟を雨らし、鬼爲めに夜哭し、水に住む龍も

深淵に引つ込んで仕舞つたといふ大騷ぎ、かくて治を爲すを一百十歳、陽武に都して居たが死んで後には衛の利鄕亭に葬つたといふことである。倉頡の事はかくの如く二說あつて分からぬが、前者即ち黃帝の史官であつたといふ方が如何にも、尤もらしくて、取るに足るべきものと思はれる。

しかし、熟考へて見れば、伏羲といひ、黃帝といひ、古代に有力なる君長の名前には相違なからうが、何と云つても、單に口碑上の人物であつて、その年代などは、とんと分からぬ。バウルガーの支那史に、黃帝は西曆紀元前二千六百三十七年より二千五百七十七年まで、六十年間、帝位に居たとあるが、これは、支那の或る種の史籍に據つたので、悉く信用する譯にも行かない。それから又、文字製作は、人文開發の第一歩で、兎にも角にも、大事業であつて、とても一人の手で、一時に出來上がるものではない。だから、誰れが始めて文字を造つたなどいふことを斷定しようとするのは、或る意味に於いて、極めて愚かなことである。予の私見を以てすれば、人類には、その特性として幾分の美的情操が存在して居る上に、古代の人は、如何なるものを見ても、珍らしくて堪らぬところから、ある時、覺束なくも、鳥獸草木等、手近に在るもの

ヘ一二種を畫いて見たのが、文字の起源であるに相違ない。そこで、漢族は、埃及・アツカヂヤ等の諸國に見ると同じく、太古に於いて已に象形文字の若干を有したので、その後、智慧ある人が、段々之れを改良し、その數をも殖やし、やがて規律的發達をなし、表號的文字に進んだのであらう。されば倉頡などいふ人が、實際生存して居たにしても、その爲した仕事は、單に舊を改め新を加へたといふことであらう。

象形は原始的文字、寧ろ繪畫の出來損といふべき程の者で、それから、最も進歩したのは、聲音學の原理に隨つて出來たもの、例せば希臘・羅甸、乃至現今歐西諸國の國語、及び朝鮮の諺文の樣な者である。支那人も單純なる象形以外諸種の構成方法を考へ出し、偶聲音の事にも想及したが、遂に一層便宜なる文字が造り出せなかつた。それは、何でも昔々で押し通して、兎角新しいことを忌み嫌つたからである。

古代の人は、觀察力に乏しくて差別を判定することが出來ず、平生耳目に視聽する現實界の物體は、自ら限があつて、極めて少ないものである。しかし、人智の發達は、外界の觀察から、自我の靈體に立ち戻るものである。そこで、其の他の人文史的事實と聯關して考へて見に、支那文字の略備はつた時代は、周の初めであらうと思

れる。勿論堯舜時代に出來たと傳へらるゝ古代文獻もあるので、其の頃から、文字を使用して或る事を書き留めたには相違ないが、現存する文字構成方法が、すべて備はつたのはそれより後の事であらうと思はれる。

周の制度を調べて見ると、方師もしくは保氏といふ役人があつて、學校に於いて六藝を敎へたといふことである。しかし、この六藝は、禮樂射御書數ではなくて、文字構成方法に六種の別があるのを謂つたのである。當時の敎育は、八歳にして小學に入り、そこで文字を敎へ、之れに附屬して倫理的敎育を施し、その後だん〳〵に高尙に成るのである。

文字構成方法の六種、即ち六藝、後に普通六書といふは、次ぎの如きものである。

(一)象形　(二)指事(象事ともいふ)
(三)形聲(象聲ともいふ)　(四)會意(象意ともいふ)
(五)轉注　(六)假借

現存する八萬内外の漢字は、すべて、この六種から出來て居るのである。次號に於いては、時に圖を挿み、勉めて面白く說明して見よう。

國語漢文

枕草子評釋

講師　梅澤精一

(一)

此の草子の作者清少納言は、清原元輔の娘であります。清しは清原氏の清で、其れを取つて少納言の官名に附けたのです。菅三位、藤大納言など云ふのも皆んな伺し云ひ方で、つまりは、支那風に呼んだのです。

村上天皇の天曆五年に宮中の梨壺の間に、當時有名の歌人五人を召して「後撰集」と云ふ勅撰の歌集を撰ませられた、其の五人の一人に、清原元輔と云ふがありました、此れが即ち清少納言の父さんなのです。一寸清原氏の系圖しらべをして見れば、天武天皇――舍人親王(日本紀撰者)貞代王――有雄――通雄――此れが始めて清原の姓を賜はつた――海雄(筑前守)房則(豐前守)深養父(内匠允藏人新雜色)顯忠(下野守)元輔(肥後守)清少納言と云ふ具合であります。

中臣鎌足（一）

藤原清河少納言は、孝謙帝の皇后定子に仕へましたが、此の定子と申された御方は、中の關白道隆の御娘子でありましたが、御堂關白道長の勢力が强くなつて、其の姉妹彰子が天内せられるようになつてから、分は、不幸に沈淪、且つは後妃の御關係なども、不敬事件を惹き起すもとなので、涙で一世を送られたのです。しかも花も桜も極めて短かいのであります。政黨の中で國民の信用あるもの少數黨内閣と云ふものが、政權を掌るような具合に參りますが（まだすつかりは參りきらぬので落閣内閣が出來て勝手放題な事をしてゐますが）清少納言の時代は藤原氏が政權を獨でゐて、其の一族以外には滅さない、後には同族間でも骨肉相食むようには參りはしました。かう政黨の私派が分かれてまゐりますれば何んでも天子を抱いて天下に號令するものは勝を取るわけですから、自分の娘を中宮や皇后にして、其の孫を天皇にすると云ふ寸法なので、自然娘の教育にも注意したし、なるべく美人を生むようにと、道隆などは少し位は家柄はわるくとも美人を細君にしたかと思はれる。書れ最美しい娘を中宮皇后にして天子樣を我が家の私の御方のようにしたい

中臣鎌足（二）

からなのです。そこで平安時代には女は大いに得意であつた。紫式部清少納言赤染衛門、儀同三司母、伊勢、馬内侍、其の他の才媛が彬々として、あらはれたのも、一つは時世の然らしめたのであります。

此の皇子には二條帝の長徳元年中、長保元年、二年などの事が載いて。それは長徳二年十二月十五日皇后が御産れになつた後清少納言は雪降しきらしい。「新古今」に赤染衛門の作つた歌に

跡もなく雪ふる里は荒れにけり

と云ふのがあります。此れは昔元輔の住んでゐた家の傍に清少納言が住んでをつた頃、非常に雪が降つて隣の垣根が倒れたから、十數體つたのがわかります。また晩が、此れを見ても清少納言が家の造作は立派でなかつたのがわかります。また晩年四國に流浪したと云ふ說もありますが、確かな證據はないようです。只た皇后もなくならられ、少納言が里にゐた時分には、時の若い殿上人があまた同車して清少納言の家の前を通り破れに破れた有樣を見て冷笑つた事がありました。其の時鬼のような女が簾から顏を出して、駿馬の骨は買ひなどらん物をと云べば、答し

なの若殿原も驚いて逃げたと云ふ話。此儘は確かでないが彼の女の氣象としてはおありそうなので。

清少納言は品行はよくなかつたが男らしい任俠な所がある。扨て女は情熱に富んでゐるので、よく己れを知る人の爲めには一身を捧げるのを厭はぬ者をあるが、清少納言の皇后定子に於けるは君臣水魚の如くである。彼の女が零落しても他に住べないで夫命に甘んじてゐたらしいのは、幾分かおきちめのよい女任俠な點のあつたからであるまいか。それ君恩は水の東に流るゝ如きもの、得難き寵愛移り去り易き「龍愁」は宮女の常なるに彼の女が帝を始め皇后の寵を得たのは、一に其の才學にあるのでありまず。

しかし此の才學。女の才學おるものは兎角がとしい文字をふりまはしたがるもので、特才誇博機鋒甚鋭は其の缺點を世の非難を免れない所であります。言ひ換ふれば生意氣、お轉婆、と云ふことです。しかし生意氣でも、お轉婆でも無爲無能なものには優りませうが生意氣質でどちかと云へば米國風の婦人で外交官の細

君に適當な女であります。紫式部の雲の上の噂話女房然たる筆癖らしいのとはあべこべであります。良妻賢母の模型にはまらない女らしいが万に一人はあつてもよい春野を飾る花ですから。しかし、女は髪長くして思慮短しと云ふ格言に牛面の眞理があるならば、此れは紫式部よりも清少納言に當てはまる格言であります。彼の女は直截露骨で虚業心がつよく高慢ちきなだけ思慮が少ないかと思はれます。

けれども、其の作の「枕草子」は、李義山(字は商隱と云つて晩唐の人の隨筆「雜纂」よりも造語奇警で、構思は清傷で、筆がしたような嘲けるような道化たような筆つき狹い自然や宮中の描寫などの書きぶりは一段うまいようです。然し清少納言位なものは、外國には澤山おりまず。例へばスタイルでも、スウヰフトでもサッシテでも、サウスウオルスでもラスキンが「近世書家」のような深い觀察はおりません。讀者は正太夫の「覺え帳」「扣帳」「みだれ髪」などと比べなさるがよい短篇は。

春は曙。やう〳〵白くなりゆく山際すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜。月の頃は更なり、闇もなほ螢とびちがひたる、雨などの降るさへをかし。秋は夕暮。夕日花やかにして、山の端いと近くなりたるに、鳥のねどころへゆくとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などの列ねたるが、いとちひさく見ゆる。いとをかし。日入りはて、風の音、虫の音などいとあはれなり。冬は雪の降りたるは、云ふべきにもあらず、霜などのいと白く、又さらでも、いと寒き、火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつきづきし。晝になりてぬるくゆるびもてゆけば、すびつ、火桶の火も灰がちになりぬるはわろし。

（語釋）此の段は四季の景色を評したもので、開卷第一にある名文であります。

春は曙。夏は夜。秋は夕暮。（冬は朝）なぞ云つたのは、四季の中の一番よい景色をえりぬいたのであります。おかりては明くなりて。をかしは痴しき意（可笑）から轉じて面白と云ふ義になります。此處は其の面白い方です。前の細く棚引きたるの後に「をかし」とかくべきでありますが、さすれば重複する文の調子をわるくするから略したのです。いとは痛の義、至りて、最も極めてなど云ふ意味。

三つ四つ二つと二を後にしたのは一寸氣がきいてゐる。まいてはましての音便。さきたま（埼玉）をさいたま、さきはひ（幸）をさいはひと云ふ類。云ふべきにもあらずは云ふを要せぬ、勿論よいとの義。炭もてわたるは炭を持ちあるく事。すびつはすみびつにて炭室、ひをけは火桶にて木製の丸い火鉢。わろし前に宜しい方許り書いたから、此度は反對の方をあげたのです。冬は朝と云はないで雪の降りたる云々と續けたのは、文に變化あらせる爲めであります。

（大意）。四季の景色は、それ〳〵面白いが中にも春は曙で、だん〳〵白くあけゆく山際が、少し許り赤くなつて、紫色の雲の細く帶のように棚引いてゐるのは面白いものであります。夏は夜で、月の出てゐる頃は勿論、闇夜に螢の飛びかふのも、又

ははら〳〵と雨の降るのも面白い。秋は夕暮で、空はさながら金を溶したようなるに落日は山際近くなつた時分に、晩鴉ねぐらを、求めて三つ四つ二つ飛んでくのも哀れである。まして雁が眞一文字に列つてゐるのが天際遙かに小さく見えるのも面白い。日くれて後に、秋風の身にしむ、虫の音の切々たるなど、極めて哀である。冬は朝で、雪のふつたのは勿論、霜の白くおいた朝も面白いし、またさうでなくとも、冬の朝の嚴しく寒く、いそ〳〵して、火など急におこし、炭を持ちあるくなども冬には似合うたことである。が晝になつて、暖くなつて人は朝の寒さを忘れ炭もつがないので炭室や火桶の火も皆白い灰になつたのはわるいと云ふのであります。

ラスキンが『近世畫家』中に「大空」を叙した一節に、「彼の喃々者流の中何人かよく昨日白晝地平線上に蜒蜿たりし白高峰に連る峰巒の形狀と懸崖との一つについて語るを得るものぞ。誰れか細虹南より來たつて彼の白高峰の頂にかゝり綠雨の塵と消え去るを見しぞ。昨夜晨光熹微として暮雲を照らし去り、西風一陣颯として雲木葉の搖落するが如き時、誰が死雲の跳るを見しぞや」などありますが、ラスキンの見方と清少納言の見方とを比べて見れば、一は平安城中の箱庭の小天地の自然觀で此れは大千世界の美觀を見てゐる差がある、そしてラスキンの方がよほど繪畫的で、物を繪がいてをります。

（三）

御方々君達上人など御前に人多く侍へば、廂の柱によりかゝりて、女房と物語してゐたるに、物をなげ賜はせたる。あけて見れば「思ふべしやいなや、第一ならずばいかが」と問はせ給へり。御前にて物語などする序にも、すべて人には一に思はれずばさらに何にかせむ。唯だいみじうにくまれ、あしうせられてあらむ二三にては死ぬともあらじ、一にてをあらむなと云へば、一乘の法なりと人々わらふことの筋なめり。筆紙賜はりたれば「九品蓮臺の中にも下品と云ふとも」とかきてまゐらせたれば無下に

思ひくんじにけり、いとわろし。言ひそめつる事はさてこそあらめとの給はすれば、人に随ひてこそと申す。それがわろき、かし、第一の人に又一に思はれむとこそ思はめと仰せらるるもいとをかし。

（語釋）御方々とは中宮定子（後に皇后）の御妹の方々。君達は攝家の子息清華の人、此處にては中の宮御兄弟なと。上人は殿上人即ち雲の上人、女房は後宮に仕へてをる女。上臈、中臈、下臈の宮女、それ以下は女房と云はないのです。思ふべしや云々は中宮の賜はつた紙にある文句で、私は御前を第一の人に思ふが若し思はなかつたならば御前は私を第一の敬愛すべき人と思ふか如何との義。を は助辭つよめの辭。一乘の法は『法華經』の事、此の經は諸經の中で一番よい尊い御經と云はれ、當時流行の天台宗所依の經典なので、第一の人だと云ふ比喩。一乘の乘とは乘載の義で、人を載せて迷の海を渡し悟の岸に至らせる義です。小乘とは佛の教の中羅漢の悟（自ら悟る許りで人を濟度し得ないもの）を開示すべき

經。大乘とは自ら悟り人をも濟度するような教の書いてある御經。で一乘の法とは『法華經』方便品に十方佛土中唯有『一乘法、無二亦無三除佛方便說但說無上道と云ふ句から來たのです。九品蓮臺は極樂に生まれる人を上中下三等に分けて、其の各に更に上中下の三等をおいたので三三が九品と爲る、其の死んで蓮の臺に生まれる九種九等の人。下品は其の九品の中の下の下でもとの義。無下ひどくいらく。めりは見えあり即ちだらうと想像する助辭。云ひそめつる事は云々は一度云ひ出したことは其れを通すがよいとの意。人に從ひて云々は清少納言の中宮に御答した言です。人によります。（大意）。宮の御妹のかた〳〵や御兄弟の君達など人々宮の御前に多く伺候してゐらしいますから（清少納言は）扉の柱によりかゝつて、他の女房達と浮世話をしてをりました時分に、宮は何か物を投げて下すつたのでありますよ。何かと思ひまして開けて見ましたら、「私は御前を第一番に可愛がつてをるが若しさうでなかつたならば御前は私を一番可愛人と思ふかどうです」との御言葉なのであります。此れは私（清少納言）が宮の御前などで物語を致しました時分、折々すべ

て人には一番可愛がられなければ一層のこと憎まれたがましだ二番目や三番目などには死んでもならないなになり一番目になりませうと云ふたら他の女房たちが笑つて法華經だ一乘の法だと云うたことがある其の事をかく申されるのと見えます。

宮は御答せよとて筆と紙とを賜はりましたから「九品蓮臺の中では下の下でもよろしうムいます。えらい人様に思はれるのなら下品に思はれても苦しうムいませんと、かう御答致しましたら。宮はたいさう謙損するではないか、それがわるいよ云ひ出した事は、云ひ通はすがよいとの有難い御言葉でありました。で私はそれは人によりまするとと申しましたら、それはいけないよ、第一番にえらい人にまた第一番に可愛がられ思はれようと心懸くべきでないか」と申されましたが此れは極めて面白い御言葉でありまする。

昔から君と臣との中のよい事を水魚の如しなど申しますが、中宮定子と清少納言とのように心の合ふ君臣は、女流の方には多くはありますまい。

國語漢文

文學士　久保得二

支那文字の構成法

漢字の數は、時代の遞降に從ひ、次第に增加して行くものであるが、その構成方法は、ただ六種に過ぎぬので、その上、案外にも規律立つて居るから、その研究は、さんざんに面倒ではない。しかし、詳しく遣つて見ようと思へば、やがて、一科專門の學となるのであるが、普通一般に知るべき事は、一寸話しても、濟むのである。そもそも、漢字研究の典據となつて居るのは、漢の時許愼といふ人の作つた「說文解字」普通に略して單に「說文」といふ本が、第一であつて、それさへあれば、十分なのである。そこで今この「說文」を本として、六書の事を極めて手短に下に述べて見よう。

(一)象形——これが六書の第一であつて、極めて古い文字である。「說文」に定義を下して「象形なるものは、畫いて、其の物をなし、體に隨つて詰曲日月是れなり」とある。即ち視官に映じたる物體の形狀を、其のまゝすぐに模寫したので、いはば、一種原始的

の繪畫に過ぎぬ程の者である。そこで例を擧げると、㊀は日の古字であつて、太陽の形狀に象り、中央の一點は、その陽物たることを表するのである。又☽は月の古字であつて、太陰に象り、中央の二點は、その陰物たることを表するのである。その他、山の古字⿱山山は、連山の紛糾せるに象り、水の古字氵は、河水の流れ行くに象り、㊁は目の古字で、はじめに⿰目目となり、更に轉じて、今用ゐる目となり、⿰目目は車の古字であつた、はじめに車となり、それが更に轉じて今用ふる車となつたのである。何でも、字母となれる名詞は、大抵この部類に這入るのであつて、魚だの、木だの、馬だの、羽だの、心だの、龜だのいふのは、一見しても、すぐに、それと分かる。そこで、鄭樵は、象形を分かつて三となし、その第一を正生といひ、その中に、天物・山川・井邑・草木・人物・鳥獸・蟲物・鬼物・器用・服飾の十種を含ませ、その第二を側生といひ、その中に象貌・象數・象位・象氣・象聲・象屬の六種を含ませ、その第三を兼生といつた。これ等を詳說すると、あまり專門的に成るから、唯だ分科の名目を擧げるだけに止めて置かう。

(三)指事――「說文」に定義を下して、指事なるものは、視て識るべく、察して意を見る、上下是れなりとある。即ち現實界に於いて、數〻經驗することの出來るものであ

るけれども、何といつて、一定の決つた形の無いものであるから、便宜上、符號を借りて、その意義を表彰したものである。そこで、或る人は象事と呼んで、事を指示するものだといつたがどちらにしても、同じ事である。數量とか、位置とか、方向とかいふものは、甲乙二物の關係から成立するものであつて、すべて、この法に因つて構成されたのである。例せば、一二三の如き、その符號たることは、直ちに知れて居る。又一の上下に點を打つて、◉を上となし、◉を下となすが如き、⿱⺈八を以て左右となすが如き、中の中に於ける、凸凹の凸凹に於ける、いづれも、この部類に入るべきものである。

(三)形聲――「說文」に定義を下して、形聲なるものは、事を以て名となし、譬を取つて相成るとある。これだけでは、一寸分かり惡いかも、知れないが、そんなに六つかしい事でもない。要するに、名と譬とが、相待つて、出來るといふので、名とは取りも直さず、前に述べた象形指事から出來た文字を指すので、譬とは、聲といふのである。そこで、例に引いた江河に就いて說明すると、江といふ字の左扁〻は、元と水、即ち流水の形に象つて出來たので、右旁の工現時の音(Kung)は、水の聲であつて、大きな川

に水がまん〳〵と湛へ、その音の緩かなのをいつたので、つまり、くん〳〵といつて流れる川、即ち大川といふことを表示したのである。何も亦同じで、右旁の可現時の音（Ko）は、矢張水の聲であるが、前者に比しては、はるかに淒じく、石を衝いて激怒する早瀬の音を示したのである。次ぎに又、鳩だの、鴿だのいふのも、すべて、この方法で出來たので、右旁は元と鳥の形に象つて出來た文字、左扁の九令（九ー Chu、令 Ling）は其の聲を表はしたのです、つまり、チユー、チユーといつて鳴く鳥、リン、リンといつて鳴く鳥といふのである。その他、峰・蜂・鋒の如き、右旁の夆は、鋭いといふことを表示する音で、峰は先端が鋭く尖つて居る山、蜂は鋭い針を持つて居る蟲、鋒は鋭い金屬製の道具といふことを示して居るのである。何でも、普通に用ゐる漢字の殆んど十分の八九までは、この方法を以て作られたのである。そして、この方法を以て出來た新文字の音は、必ず之れを組み立てゝ居る既成の文字の一に因つて諧かられるのである。そこで、或は象聲といひ、或は諧聲といはれるのである。されば、その發音は、極めて容易で、俗に謂ふ百姓讀で十分なのである。しかし、百姓讀の往々にして誤を生ずるものは、他の方法に因つて作られた文字が幾らもあつ

て、それは多くの場合に、かくの如くならぬからであつて、つまり、百姓讀の正否如何を以て、形聲であるか無いかといふことを判定しても、善いのである。それから、形聲の結合に六種の別がある。

（一）右形左聲――鳩鴿
（二）右聲左形――江河
（三）上形下聲――草藻
（四）上聲下形――婆娑
（五）外形內聲――闇闇
（六）外聲內形――衡衡

これは全く形聲兩者の位置に就いて、分類したので、さばかり面倒な事でもないから、記憶して置く方が善からう。

（四）會意――『說文』に定義を下して、「會意なるものは、類を比し、誼を合し、以て見る、指撝是れなり」とある。これは、矢張二つの字が結合して出來るのであるが、前者と異にして、專ら意義の會同を主とし、從つて聲を諧へる事がないのである。そこで、例

を言へば、戈と止とを合して武となし、戈を止める、換言すれば、亂を平げるといふ義を取り、人と言とを合して信となし、人言は僞ならぬものといふ意を顯はし、又木が二つで林、木が三つで森、人二つを从即ち今の從となし、日月を合はせて明となし、口と鳥とを合はせて鳴となし、十二つを廿となし、十三つを卅となし、日と木とを合はせて東、即ち日出の時、太陽が東方の樹の間に懸かるといふ義に取り、日と莫とを合はせて暮、即ち黄昏に及べば、太陽が地上に存在しないといふ意を顯はしたる如き、皆之れに屬するもので、その外、孖(雙兒)來(木の下に二人)、坐(土の上に二人)、歪、仁、吹、囚、世、看、冒、富、貧等、大抵抽象的意義を有する名詞、形容詞、動詞は、この法を以て、出來たのが多いようである。

(五轉注)―「說文」に定義を下して、「轉注なるものは、類を建つる一首、同意相受く、孝老是れなり」とある。之れを詳說すれば、先づ一字を基礎とし、之れに他字を加へ、別種の意義に轉回させるので、會意と異なるのは、規律的連鎖をなし、新に出來た字は、之れを組み立てる既成文字と、はるかに違つて居るといふのである。例せば、少を基礎とし、之に匕を加へると老となるし、子を加へると孝となるし、至を加へると耄となるし、毛を加へると耄となるし、句を加へると耇となる。そこでこの方法を以てすれば、思想の表白、愈〻細微に亘り、個々の差別を明晰にすることが出來るのである。しかし之れを以て造られた文字は、比較的に多くない。

(六假借)―「說文」に定義を下して、「假借なるものは、本と其の字なく、聲に依り、事を批す、令長是れなり」とある。つまり、ある一字を數用することである。令は元と形容詞で、淑女の淑と同義でありしが、それを假りて、使令命令の令とすることがある。長は「長い」といふ形容詞であるが、長上の長とすることがある。これ等は、意義上から轉用したのであるが、又聲を假りることもある。女、汝、而、爾などは、古代の支那人が使用した第二人稱の代名詞と同じ音である爲めに假借され、焉は元と鳥の名であるけれども、假りて虛字となし、之は元と屮といふ字で、草の芽であるが、これも假りて助字として使つて居る。

六種の概說は、これだけで善いのであるが、一言すべきは、その分科は、單に之れを列擧したばかりでなく、或は偶然かも知れないが、文字製作の發達を示して居るから、愈〻以て面白いといふことである。象形指事は、單體であるけれども、形聲は複體

である。何でも、事物の順序は單から複に進化するのであるから、形聲は、前二者の後で出來たのである。次ぎに會意・轉注は、複體たる上に、意義を綜合變化したものであるから、更に進歩したものである。それから假借は、修辭學上に謂はせる換喩(Metonimy)に相當するので、すでに製字の範圍を超出したものだから、自然の勢、最も後れて出來たのに相違ない。

六書の字數に就いては、宋の鄭樵の「六書略」に、左の如き統計を示して居る。

(一)	象形	六〇八
(二)	指事	一〇七
(三)	形聲	二一八二〇
(四)	會意	七四〇
(五)	轉注	三七二
(六)	假借	五九八
	計	三四二三五

しかし、これは宋の時代の字數で、現存する漢字全體ではないが、それでも大體に於

いて、六書相互の多少は略〻分かるのである。元來六書に就いての細かい議論は、人に因て違つて居るので、その統計も、決して正確といふことは出來ない。何故といへば、轉注・假借に對する計算が、多きに過ぎて居るので、もつと、ずつと、差引かなくてはならぬ。そればかりか、更に窮極の根源に溯つて考へると、轉注といひ、假借といふのも、その多くは、形聲もしくは會意のいづれかに歸納すべき者である。そこで、今日現存せる漢字に就いていへば、その大多數は、形聲の一體であつて、殆んど十分の九を占め、會意、象形、之れに次ぎ、その他は、殆んど言ふに足らざる少數である。かくの如く、象形・會意・形聲が、漢字の主要なる部分を形成して居る中で、前二者は、文字の形狀と構造とに因つて、音は分からないが、容易に意義を推究することが出來るし、後の一つは、意義こそ一寸分からないが、字音だけは直ちに分かる。それだから、漢字を講習するのは、案外にやさしいので、少し氣を付けさへすれば、他の外國語などよりも、餘程世話のないことである。

支那の文字は、時代の遞降に從つて、漸々增加したので、先秦時代の常用文字は、殊の外少ない。四書五經、老莊なども、矢張その時代に出來たので、各字の意義の範圍

が、今のことは、大いに違つて居る。それ故に、古書を讀むには、この點に注意して、務めて、著者の本意を失はない樣にしなければならぬ。「不可」といふ語は、今でこそ、命令禁止の詞に用ゐるのであるが、むかしは「不可能」といふ意味に用ひたのであつて、「國之利器不可以示人」といふのは、「示してはならぬ」といふのではなく、「示したくても、とても出來ない」といふ意味である。これに就いて、一寸面白い話がある。支那の一寸した學者といふべき人が、日本に來て、公園の掲示「樹木不可折」と書いてあるを見て、これはをかしい、乃公に折れぬといふのか、それなら折つて見せよう」といふので、梅か、櫻か、何か知らぬが、花の咲いた木の枝を、容捨なく、ぽき〳〵と折り散らしたといふことである。それだから、文字の意義の範圍と、その變遷とを十分に呑み込んで居なくてはならぬので、若し然らざるときには、到底眞正の命意を領知することが出來ない。

左に記すものは、主要なる歷代字書の名と、この中に含有する文字の數とを表示した圖ので、大いに諸君の參考に成らうと思ふ。

(一)訓纂(漢—楊雄)　五三四〇

(二)說文(漢—許愼)　九三五三

(三)玉篇(梁—顧野王)　一六九一七

(四)廣韻(唐)　二六一九四

(五)集韻(宋)　二三五二五

(六)韻會(元)　一二六五二

(七)小補韻會　同上

(八)篇海類纂(明—宋景濂)　三八四〇〇

(九)字彙(明)　三三一七九

續字彙補　一二三七一

以上二書計　四五五五〇

(十)康熙字典(清)　三九七五三

補遺備考　七四六三

以上二書計　四七二一六

(十一)正字通　略同前

かくの如く、今日普通の字書に見えるのは、五萬内外であるが、之れに死字及び近頃使用する俗字を加へると、八萬ばかりに成るのである。要するに、極めて重要にして且つ普遍的なる少數の文字を除く外は、絶えず、生滅消長して行くので、決して永久に、本の儘で存在して居るものではない。

以上は、主として、文字の數に就いて述べたのだが、次ぎに文字の體形を考ふるにこれも亦代を逐うて、變化して行くものである。すべて、夏・殷・周三代の文字は、古文といひ、その古文にも、隨分多くの變體があるらしいが、今日では、あまり善く分からない。しかし、その中で、一番古るいのは、殷代古器物の銘であるが、丁度埃及アッカジャの古代文字と同じで、極めて原始的なる象形の一體である。その次ぎが、蝌蚪。蝌蚪とは、蛙の子、俗に謂ふ「おたまじやくし」。古文の一體を漆液で書くといふと、ぼと〳〵して、その形は太く圓く、先端が一寸細長く、丁度「おたまじやくし」の樣であるからといふので、やがて、此の名を付けたのである。この字體で書かれたもので、今殘つて居るのは、極めて少い。五嶽の一つなる衡嶽の中の岣嶁峰にある神禹の古碑が其の一であるが、この碑は果たし[illegible]四千年前のものであるか、どうか、分からな

い。それから、この字體は、春秋の末まで用ゐられたといふことであるが、これに就いても、議論があつて、まだ定說がない。要するに、三代の古文は、今から研究することが、出來惡いのである。

次ぎに周の宣王の時、太史籀といふ人が、大篆を作つた。これは、今でも存在して居る字體で、大いに字らしく成つて來た跡が、あり〳〵と分る。これで書かれた遺物は、周の宣王の石鼓の文である。石鼓の文は、宣王中興の盛を頌した詩を刻したので、全數十枚、むかしは岐山の麓の野原にころげて居たが、宋の時に、鳳翔縣の孔子廟に奉納し、元の時には、北京の官庫に入れたが、今でも、支那の帝室にちやんと保存してあるといふことである。これに就いて、眞贋を論ずるものが多いが、これだけはどうも本物らしい。先秦時代の諸子百家は、大抵この大篆を用ゐて書いたのである。

その次ぎに、秦の時に、小篆といふものが出來た。これに就いては、二つの原因がある。秦の政治は、何でも國民思想を統一するを主としたので、戰國時代の圖籍を同一の體裁に書き改めて整理する爲めといふのが一つ。それから、秦では法律を

蟲鳥は、その名の如く、蟲や鳥の形をした字で旗だの、手形などに使つて居た。現今普通に用ゐるのは楷行草の三體で、その外に篆隷宋の諸體がある。かくの如く、字體が度々變化したものだから、その度ごとに、古書の傳寫に、往々にして、飛んでもない誤を生じたをは、いくらもある。その一例を擧げると、大學に湯の盤銘を引いて、苟日新、又日新、日日新とあつて、苟の字に就いて、色々な說がある。或人は、敬の字の右旁が無くなつたのであるといつて居たが、この盤は、今でも支那の帝室に在るので、實際之れを見た人の說に據ると例の古文で德の字。それが苟とあつたといふことである。元來、楷書にして互に似て居るといつても、古文篆書で、似て居るとはいへない。こゝの差別を知らないで臆說を出だすといふと、兎角こんな風の誤りを生ずるので、よく〳〵注意せねばならぬことである。

それから、音韻の事などを論ずると、隨分面倒になるから、すべて話を端折ることにした。

これまで述べ來つたのは、主として漢字の歷史であつて、あまり必要が無いようであるが、苟も漢字を使用して居るものは、六書の概說位は、知らなくては困るから

鳥くして、訴訟裁判など引き切らず、この爲めに文案を草すること多く、大篆では、なか〳〵面倒臭くて、とても遣り切れないといふのが二つ。そこで李斯が創意して、此の體を造つたのであるが、要するに、大篆を省改して、書き易くしたのである。李斯が始皇に從つて、天下を巡遊した時、諸方の名山に建てた碑文は、疑ひもなく、この體を用ひて書いたのである。しかし、これでも、まだ手間がかゝるといふので、二世皇帝の時、獄吏の程邈といふものが、隷書を作つた。そこで秦漢の間、公文には篆書を用ゐ、私書には隷書を用ひて居た。その後、筆墨紙の改良及び發明があつて、又そろ〳〵字體を變革する必要が出來たものだから、漢の史游が草書を作り、劉德升が行書を作り楷書も其の間に出て來たのである。

蒼頡の古文、史籀の大篆、李斯の小篆、程邈の隷書、史游の行書、これが字體の五大變であるが。その副次的產物に係る異樣の字體は、決して少なくない。秦の時でも、大篆、小篆、隷書の外に、刻符、摹印、蟲書、署書、殳書などがあつたが、漢の時には奇字、繆篆、蟲鳥、蟲書、懸針、垂露、飛白等二十餘種の書體があつた。又後世になると八分書といふものもある。その中繆篆はくる〳〵とひねつて曲つた字體で、印章を摹するに用ゐ、

少しく餘岐に入る感があつたけれども、あらましの處を話して見たのである。

次回に於ては、いよ〳〵本題に取りかゝり、漢學即ち東亞文獻學を研究するには如何にして、その讀書力を養成すべきか、之れに附隨して、その必修書籍は、何であるかといふことに就いて、十分詳しく、論じて見ようと思ふ。

講話

國語漢文

古今の漢學研究法

文學士　久保得二

むかしは、謂はゆる漢學が、唯一の學問であつた上に、教授法、研究法などいふ氣の利いたものは、少しも考へず、何でも、詰め込み主義で、遣つたから堪らない。餘程しつかりした頭腦を持つて居るものでなければ、之れを遣り透して、物に成ることは出來ない。今日では東亞文獻學を以て、一生研究の對象とするにしても、一と通り普通學の智識が無くては成らず、英獨の二國語位は、十分に出來なくては困るし、更に能ふべくんば、自己研究の結果を世界に發表弘布する爲めに、讀めるばかりでなく、書けると猶更面白いと思ふ位で、是等の諸學科だけでも、なか〳〵のことであつて、この上、愈〻本物に取りかゝるといふのであるから、餘程甘く立ち廻らぬといふと、ろく〳〵書物を讀み切らぬ中、老いぼれて仕舞ふ患がある。「徒然草」に、或人が、その息子を坊主に仕立てようと思ひ、凡そ坊主たるもの、檀家から馬で呼びに來たとき

まんざら乗れなくても困るといふので、第一に馬術を習はせ、それから又、檀家の法事の席などで早歌でも一つ遣らかさぬと、あまり愛相が無さ過ぎて、有り難くも無からうといふので、第二に早歌を學ばせたところが、この二つの藝が、ざつと出來上がつた頃には、大分年を取つて、佛典を讀むことが出來なく無つたといふことがあるが、將來の東亞文獻學者たらむと欲するもの、この轍を履まずんば可なりである。

予は、自己の考案を述べるに先だち、參考の爲めに、今はさばかりの役にもたゝぬかも知れないが、前人の定めて置いた課業次第を、二つ三つならべ、會員諸君をして當時勉學の苦を知らしめ、兼ねて又たとひ方法を異にし、前後の別はあるにもしろ、殆んど同一の者だけは是非窺はねば成らぬといふことを會得させようと思ふ。

次ぎに引抄するのは、幕末の鴻儒佐藤一齋の定めた「初學課業次第」といふもので、天保三年の頃、弘前侯の索めに應じて作つたものである。

◎初學課業次第

(一)素讀

○小學　○四書　○五經

句讀の次第、かくの如くなるべけれども、すべて童蒙の記憶し易き四書より始め、五經か小學に移る方便なれば、必ずしも、次第に拘らず授くべし。句讀は、多く貪るに非ず、唯だ覆讀より力を得るものなれば、兎角習讀して、諳誦する程に至るべし。然らざれば、五經終はるも獨看出來がたきなり。春秋は授けざるも可きなり。四經の唔咿とゝのふ程なれば、春秋は、自ら讀まるゝなり、或は左氏傳にて授くるもよし。

外に唐詩正聲、汶陽三體詩、文章軌範正編などを旁ら授けて、諷誦諳記さすれば、年長じて、文章の一助たることこれに過ぐべからず。

(二)講釋

○四書

繰り返して講ずべし。然れども、餘り聽者の倦を生ずる事もあらば、小學又は、詩書の類も兼修すべきなり。學庸は、本註の外、或問に據つて、未說の正しきを擇び、羽翼となすべし。先づ文義を失はざる樣にして、さて義理の能くつまる樣にあるべし。講ずるところは、根本を重くし、枝葉に渉らざるところ緊要な

(三)會讀

○小學　○十八史略　○孔子家語　○大戴禮　○劉向說苑　○劉向新序　○蒙求　○春秋左氏傳　○國語　○史記

右の書にて、大抵文義に通ずべし。但し此の類の書の會終るに拘らず、この内二三種すみても、文義通ずるものは、獨看を始むべし。獨看の書目、下に擧ぐれども、是れのみならず、四書五經會讀、諸書をも兼ね、邵子の朝暮晝夜の課の如く、たとへば、晝前經書をよみ、晝後は史子夜分は詩文の類といふように分ち讀み、不審の條は一々質問すべし。

以上の諸種、大抵卒業する輩は、同志と言ひ合はせ、四書、小學、詩書の類を輪講するも可なり。尤も教授の人、是れを聽いて誤解を正すべし。

詩文の心懸あるものは、この頃より、餘暇を求めて、肄業すべきなり。

○詩經集傳　○書經蔡傳　○禮記集說　○周易本義　○周易程傳

右の書本註の外、未書をかげで研究すべし。早く力づくものは、前の數書とならべて會讀するも然るべし。

(四)獨看

○伊洛淵源錄　○近思錄　○性理字義　○易學啓蒙　○家禮　○資治通鑑綱目三編　○大學衍義　○貞觀政要

この類潛心して讀み、不審紙を貼け、師授の人に教を乞ふべし。然るべき朋友あらば、二三輩集まりて互に討論してよむもまた宜し。

啓蒙は解し易からず、周易本義をよむ爲に早く業を卒ふべし。

通鑑綱目、宏峽浩瀚なれば、最初よりならべよむも可なり。

○前漢書　○後漢書　○三國志　○荀子　○韓非子　○呂氏春秋　○老子道德經　○莊子　○南華經　○孫子　○吳子

○資治通鑑三篇　○新唐書　○五代新史

これ等の書、友あらば、讀し、又は獨看、その宜に從ふべし。管、晏、墨、列、孔叢、鴻烈、法言の類たりとも、力あらば讀むべし。古書は、文字の祖なれば、秦漢の書、必ず

一渉ならでは叶はざるなり。

○春秋、公羊、穀梁傳、胡氏傳　○儀禮經傳通解　○大學衍義補

この類、いづれも、繙閲して大意を領略すべし。暇あらば、宋名臣言行錄、唐鑑の類、よむべし。

周張、程朱の書に至りては、初學の者、遽かに究め易きに非ざれども、先づ此のあたりまで一渉して、大旨を會得すべきなり。

○楚辭　○昭明文選　○唐宋八大家文鈔　○唐詩品彙

この類も、餘暇に渉覽すべし、數遍精看せざれば、我が文筆の力とはなりがたし。

以上課業の書、まことに、初學小成の順序なり、此の上は、人々力の及ぶだけを盡し、大成を期すべし、この數種に止まると心得べきに非ず。

初學課業の次第は、小成の次序のみもし儒業を以て、教授せむとし、人主の顧問にも備はり、詞翰の道にも通ぜむとする人は、讀書頗る博からざるを得ず。仍つて小成の書目の外、その大略を四庫に分かつて、左に錄す(これから、經史小集に就いての必讀書が列擧してあるがこれは、專門的研究に屬するものであるから

らその話は、後ですることにして引抄も、こゝに止めることにしよう。

以上佐藤一齋の考案であるが、もう一つお負に平山行藏の「實用館讀例」を擧げて置かう。行藏は近藤重藏、間宮林藏とともに、寛政の三藏といはれた人で、幕末の名士である。少くて、昌平黌に學び、その後、兵法、武術を以て名を爲し、その居るところを名づけて實用館といひ、經世の術に志を致し、文化年中、書を上つて北邊の經營を論じ、その言は顧みられなかつたが、世人は、皆その忠烈に服したといふことである。

この實用館讀例といふのは、入門の諸士の爲めに學を爲す方法を示したもので、前者と全く目的を異にして居ながら、其の書目は大抵同じもので、これを見ても、昔の謂はゆる學問なるものは、截然たる分派が無く、且つ何事も德教を以て基礎と爲し、それから發展したものであるといふことが分かる。

◎實用館讀例

夫れ書を讀み、學を勤むるに下手進歩の次序を得ざれば、愈讀んで愈誤り、愈勤めて愈迷ふ、是を以て、竊かに、この次序を記して同志に示す。

初學の先づ觀るべき書は、小學を以て第一とす。その書は、聖賢の書の中より、專ら我が身を治め整ふる仕形を拔萃したるものにして、初歩の手の屆き易きやうしあたり、先づ知らで叶はぬことを擧げて、大學の基本とするなり。朱紫陽（即ち朱熹）の言に、身を修むる大法は、小學に備はれりとあり、又元の許魯齋も、小學を得て、學に進むの序を得たりといへり。

その次ぎに、家禮を讀むべし。これ我が家の内にてさし當たりたる作法知らで叶はぬことの大要を知りての後は、理義の精微を辨じそれを詳かにすべし。然れば、修身齊家の大學、論語孟子中庸と行き渡るべし。朱子云ふ、先づ大學を讀んで、その規摸を定め、次ぎに論語を讀んで、その根本を立て、次ぎに孟子を讀んで、その發達を觀、次ぎに中庸を讀んで、古人微妙の處を求

極むべし。又云ふ四書は六經の階梯なり。

さて、又六經を讀むべし。是れは身を十分に修め、家國天下を十分に治むる道具大學に教ふるところの本書なり。その順は、詩書、禮樂、易、春秋と讀むべし。詩は集傳、書は蔡傳、禮は儀禮經傳通解及び續儀禮、禮記の古註。樂は全書なし、大體を經傳通解にて會得し、又蔡氏の律呂新書を觀るべし。易は本義啓蒙蓍卦考誤を用ふ。春秋は左、公、穀の三傳幷びに胡傳を見るべし。かくの如く通覽するときは、聖人治術の眞理に悟入せむ。然れども、歷史に渉らざれば、往者政事の得失、世代の沿革、及び存亡治亂の跡を識ること能はず。故に史類を讀むべし。尤も全史を讀むこと、朱子も云ひ置かれたれども、今に至りては浩瀚なれば、編年の書、溫公の通鑑を讀むべし。一代の史とちがひ數代を聯屬せしもの故記憶するに甚だ便なり。朱子の綱目にても讀むべし。その中綱目は麟經に擬して、文例を以て褒貶しぬれば、是非の權衡、公私の情僞、明白瞭然たり。尤も熟讀玩味すべし。（それから、まだ長々と書いてあるが、初學入門の處はこゝらで止まつて居るから跡は略すことにした）

この後、また古賀精里の讀書矩などいふものがあるが、大抵似たか寄つたかのものであるから、一一引抄するにも及ぶまい。

上に引いて來た古人研學の方法を考察するに、大抵同一であつてはじめに小學近思錄次に四書五經それから傍に歷史の類を讀んで跡は自分の力で押し通せといふのである。しかしこれは道德實踐を以て學問の主要となし、且つ朱子學を以て唯一の正學となした時分の事であるから、今日の科學的研究をしくは文獻學的研究に適合しないことは云ふまでもない。然らばどうしたら善からうか。

或人は訓讀を一定する爲めに「爾雅」を以て入門の教科としたら善からうといつたが、この書は字書の類であつて平日諷誦したところで面白くない。それから、故島田博士などの説に據ると、四書五經は、何と云つても支那教學の根本をあるから、一日幾字といふ割合を以て諳記する程でなくては駄目だとばかれたがそれも、今の時勢に對しては甚だ迂濶で、吾々はそれほどの餘暇が無いから仕方がない。

尋常中學初級程度の學力があれば「日本外史」の一二冊を、人から習ひし後は、和刻

の訓點附の漢文は、大抵讀み得ることと考へる。そこで、初學者の第一に讀むべきものは、「十八史略」と「蒙求」とであらう。次きに、この二書に就いて解題的説明をなしても置く必要がある。

「十八史略」は元來の曾元之といふ人が、歷代史乘の典據となつて居る十八部の書を節略して、太古より宋末に至るまで治亂興亡の大體を記述したもので、謂はゆる十八史とは、

(一)史記(司馬遷)　(二)漢書(班固)　(三)後漢書(范曄)　(四)三國志(陳壽)　(五)晉書(唐太宗)　(六)宋書(沈約)　(七)南齋書(蕭子顯)　(八)梁書(姚思廉)　(九)陳書(同上)　(十)後魏書(魏收)　(十一)北齊書(李百藥)　(十二)後周書(崔仁師)　(十三)隋書(魏徵)　(十四)南史(李延壽)　(十五)北史(同上)　(十六)唐書(歐陽修宋初)　(十七)五代史(歐陽修)　(十八)宋鑑(李燾劉時舉)

であつて、その中、最後の一、即ち「宋鑑」に代ふるに「宋史」を以てしいづれも今日謂はゆる二十四史の中に數へられるものである。さてその「十八史略」といふ

書物は純粋の歴史としては事實の因果的關係を闡明することが不十分であるから、あまり役にも立たないが、何か一つの邦人の支那史、もしくは東洋史を座右に置き大抵の事實を呑み込んだ後に讀むと、少からざる興味があるので、普通に用ゐる故事或は常套の話柄と成つて居る逸事などは殆んど網羅してある。それからもう一つ好いことは、時代につれて、自然に文體が書き改めてある。これはその根本となつた材料がかくの如くあるからでもあらうが著者も少しは意を用ゐたものであらう。この書を讀むものは、如上の二大特徴に注意して殆んど諳記するまでに熟讀したならば、歴代の詩文を解し、又自分で之れを作るときに非常の助に成ることと斷じて疑ふべからずである。

次ぎに『蒙求』といふは唐の世に方り信州の司馬倉參軍李瀚といふ人が作つたので、矢張り歴代の故事逸話を集めたもので、その標題は二千三百八十四字で、悉く韻を踏み千字文的に出來て居る。その中四字一句で、この二句を以て一章としたので、つまり二百七十八章ある勘定であるが、むかしは、その標題を諳記ざせ、也た況んや。經史を錯綜し便に隨つて訓釋すること、童子は固より弘益多く、老成も亦頗る覽て起節すとあるを見て有用な書たることは分かる。

予が私見にして誤なくむば『十八史略』『蒙求』は、依然として漢學研究の入門となすべき價値がある。それから十八史略の樣なもので二十二史略といふものがあつて、これは太古から明までの事が載せてあるし、又『十八史略』の後を承けて『元明史略』といふものがある。この二書の出來は、あまり宜しくないが大體の歴史事實を知り得るの便はあるからざつと讀むのも善からう。しかしさまで深く熟讀せずともをである。又蒙求類似のもので『日記故事大全』などといふものがある。

『十八史略』『蒙求』を讀んだ後歴史に就いて興趣を感じ、更に深く之れを研究したいと思ふならば、『通鑑輯覽』を讀むが善い。これは乾隆帝の勅撰に係るもので資治通鑑等を節略したのであるが、繁簡宜しきを得て至極便利なものである。之れ

の賦を製し、漢帝その文を美とし、宮人をして諷習せしむ。近代の周興嗣千字文を撰し、亦天下に頒行す。豈に『蒙求』に若かむや。經史を錯綜し便に隨つて訓釋す。童子は固より弘益多く、老成も亦頗る覽て起節すとあるを見て有用な書たることは分かる。

予が私見にして誤なくむば『十八史略』『蒙求』は、依然として漢學研究の入門となすべき價値がある。それから十八史略の樣なもので二十二史略といふものがあつて、これは太古から明までの事が載せてあるし、又『十八史略』の後を承けて『元明史略』といふものがある。この二書の出來は、あまり宜しくないが大體の歴史事實を知り得るの便はあるからざつと讀むのも善からう。しかしさまで深く熟讀せずともをである。又蒙求類似のもので『日記故事大全』などといふものがある。

『十八史略』『蒙求』を讀んだ後歴史に就いて興趣を感じ、更に深く之れを研究したいと思ふならば、『通鑑輯覽』を讀むが善い。これは乾隆帝の勅撰に係るもので資治通鑑等を節略したのであるが、繁簡宜しきを得て至極便利なものである。之れ

に似たものには『綱鑑易知錄』といふものがあつて、『資治通鑑』と『綱目』とを合抄したようなものであるが、予は前者を以て優れたりとなすに躊躇しない。しかし、これは、むしろやゝ進んだところであつて、初學に是非缺くことの出來ぬのが、まだ殘つて居る、これは『文章軌範』である。

『文章軌範』も近頃はあまり行はれなくなつたが、なか〳〵さう馬鹿にしたものではない。この書は、宋の末に謝枋得といふ人が、古文の法式となすに足るべき唐宋の名家の文、凡そ六十九篇を選び輯めたもので、選者謝氏其の人の節義德操が殊に秀でて居たのと、その選擇が割合に精確で公平で穩當で、宜しきを得た所から、支那では勿論、日本に於いても從來ひろく行なはれたものである。むかしの學者先生はこれを以て、文章修錬に關する唯一の寶典となし、盛んに支那流の文法を說き立てゝ振り廻はした。しかし考へて見れば支那人の謂ゆる文法なるものは、修辭學の出來損ねたもので、あまり形式的であつて、どんと感服も出來ず、且つ實際の用にも立たず、此の書の價値も、漢文擬作の衰へた今日から見ると、大分相塲が下落した樣な觀も無きにしもあらずであるが、何が扨て、いづれにも一粒選と云へき千

古不朽の名文ばかりであるから、之れを精讀するときには、自ら悟入するところあるべきは言ふまでない。『文章軌範』の外に『續文章軌範』といふものがある。これは王陽明の高弟たる鄒東廓の名をくつゝけてあるが、要するに坊賈の手に出でたものであらうと思はれ、その選擇も議論があつて、到底正編に及ばないけれども、主として、唐以前乃ち漢魏六朝あたりの文を集めてあるからして、正續二編を合はせて通讀するときには、戰國の末からかけて、宋に至るまで、支那散文の變遷を概觀することが出來るといふ便利もある。

『文章軌範』で、支那の散文の大概を領知し、それから之れと相待つて、韵文の方はどうするかといふと、こゝに唐詩選といふものがある。それは明の李攀龍の作つた『古今詩刪』の一部だといひ、その時代も唐に限られ、選擇も至つて宜しくないが、何を云つても、唐は支那に於ける律語極盛時期であつて、その詩は各人集中に於いては必ずしも絕妙といふを得ざるにしろ、なほ且つ他の時代に於いては見るを得ざる程の上出來のものばかりであるから、支那律語の何者たるかを知るに就いては、大いに役に立つ。しかしこの書は註釋が無くては分からぬので、從來いくら

なおるが、一番便利なのは千葉芸閣の『掌故』などいふものであらうか。森槐南氏の作られた『唐詩選評釋』は至極の名著で崇拜するに足るべきものであるが、主として作法の上から論じたもので、初學者には聊か六かし過ぎる。

『十八史略』『蒙求』で史學の知識をこしらへ、『文章軌範』『唐詩選』で純文學の鑑賞力を培養する。これから支那特有の倫理、教、大きくいへば哲學を研究するの基礎はどうするかといふに、これにも手頃のものがある。

『小學』『近思錄』の二書は朱子學の根本基礎として、朱子が自ら編著したものである。むかし三代の頃、大學に對する小學、即ち閭里の塾なるものがあつて、そこで灑掃應對進退の節、親を愛し長を敬し師を隆び友を親しむの道を教へた。つまり德育を以て主としたので、其の書は又分からないが、『禮記』『周禮』管子の『弟子職』などに因つて、その一斑を知ることが出來る。そこで朱子は、此等を主として古今時勢の推移を考へて此の書を作つたのである。

『小學』は、內外二篇に分かれ、內篇は立教、明倫、敬身、稽古の四部に分かれ、主として理論めいたものを集め、外篇は、嘉言、善行の二部に分かれ、主として實踐道德の實例

を集めたので、支那教學の初步としては、十分の價値がある。『近思錄』は、朱子の形而上學の入門であつて、自己の立論を證明するに足るべき古人の言辭を類集したものでその性質上すでに六かしい。

そこで『小學』を讀めば、直ちに四書に取りかゝれば善い。四書といふものは、かつて詳しく話したことがあるが、支那教學の極致として考へられたもので、なかなか〳〵六かしいが誰れが讀んでも分からぬことはない。たゞ始めに於いては悟徹するところ深からずだん〳〵他方の知識が進み且つ經驗を積むに從つて、愈〻面白味が出て來るので、この書は生涯座右を離さず讀むべきもので耶蘇教の聖書と同格に取り扱ふべきものである。

以上六七部の書物を熟讀すれば、漢學の土臺だけは出來る。いはば東亞文獻學の小學程度ぐらいの處、これから先どうしたら善いかといふに就いては、次號に於いて詳述しよう。

秩かさしてふりさけ見れば、白虹さかしまにかく馬入の鐵橋は、逋陀として碧流を横斷し、素絹南に曳く三千尺、村あり、森あり、枯れかれなる雜木の林をこめて、きはめてうすき青嵐の光は洽ねく天地の美を彩る

天ぞゝる一万二千四百尺、醒めたる芙蓉の靈峰は、混沌たる大空を摩して高く――高くさながらに天なるけわひも遠からずとこそ、白雲あり銀の笠のこと、寸を隔てゝ靈山の頂を蔽ふ。

優然たる其の姿や、群山氣を凝らして其の四周を匝る。思ふ、正にこれ白露滿江の夕、百戰百勝の將軍が、金覆輪の鞍の上、錦袍白帶、珊瑚の鞭をあげて月明に嘯くの姿とも見るべく、白光環坐、天來の聖靈に感じて起これる大豫言者が、無邊の蒼穹を仰いで大帝に祈るの姿とも見るべきか。

東の野、南の野に一面の綠をゆらいで、風は今はた音する許りに雜木の林を音づれ、枯れたる梢は皆祈りの御座おごそかにたゝえの歌をとなふ。ベツレヘムの星いでゝセントソフイヤの塔に天籟の聲を聞きしの時、非ざりしか此の調――千古不易の雄姿を仰いてわれは遙かに二千年の夢を思ふ。『村羊生』

――新春紀行の一節（三十六年一月）――

國語漢文

先秦學術の一斑（上）

文學士　久保得二

讀書力を養成することに就いて、前回まで述べ來たつたが、支那人は、常に尙古主義を以て、萬般の事をなすものであるから、古今四千餘年、隨分久しいものではあるが、要するに、根本の思想は、すべて先秦時代の學術に備はつて居るので、文學といはず、哲學といはず、是非ともこゝに注意して、その研鑽を遂げねばならない。そこでこの處兩三回、前に掲げた樣な問題に就いて、極めて平易に、もう一つか負けに、簡明に、概略だけでも話して見よう。

すでに知らるゝ如く、支那學術の萌芽は、遠く三代の上古に於いて發生したので、その間、模範的聖者の輩出、頻々として、その言語文章は、動かすべからざる後世の典據となつたのである。黃帝の時、文字の製作、大いに見るべきがあつて、史官が二人、左史と右史とに分かれ、一は言を記し、一は事を記したと傳へて居るが、その當時の

文獻はどう成つて仕舞つたか、丸で形なしであつてその擧すべきものは堯舜以後に限られて居る。併し、それに就いても、少しく議論すべきがある。かの河圖といひ、絡書といひ、神怪奇異の傳說の爲めに知られて居るものは固よりこゝに論ずべき必要もないが、古へ三墳五典八索九丘といふものがあつたといふことを、鄭玄などは、下の如きことを言つて居る。「伏羲・神農・黃帝の書之れを三墳といふ、大道をいふなり。少昊・顓頊・高辛・唐虞の書之れを五典といふ、常道をいふなり。八卦の說之れを索といふ、その義を求むるなり。九州有するところ、土地生ずるところ、風氣宜しきところ、皆その書に聚まるをいふなり。」して見れば、三墳は道德書、五典は歷史、八索は占筮の書、九邱は地理書といふやうなことであらう。今でも三墳といふものがあるから信用することは出來ない。しかし、五帝時代は、前の黃帝の世を承けて、文字も幾分か增加し、少なくとも簡單なる標號文字の類があつて、或事實を書き留めて置いたといふことだけは、想像と雖も、決して謬見ではない。何にしろ、東亞文獻は、遠

き昔から數度の災厄を經たので、周の帝室に收藏してあつた書籍は、王子朝の亂の爲めに、その大部分を失ひ、諸侯の宮中に保有してあつたものは、去籍と始皇焚書の禍との爲めに殆んど全部を擧げて、絕滅したのであるから、今日傳へざるも固より然るべきことである。

上古の文獻、この外にも、名だけ知れて居るのは、二三あるが、今更何とも仕方がない。そこで、予輩が典據として、三代の時勢思想及び文化の狀態を揣摩し得べきは、易・詩・書の三經に限られて居る。この外に、禮記・春秋を加へて、普通五經と呼び做して居る。東亞文獻の研究に於いて、この上もない必要なる寶典である。

この三大古典は、いづれも、一人の手で出來たものではなく、普通に、孔子の刪正修補を經て、はじめて完成されたといつて居るが、その內容は、早く上代に於いて、紛然雜出したものである。この中に於いて、先後の次序を論ずれば、易が第一である、何故といへば、詩は殷より上に及ばず、書は堯舜に止まれるに反し、易に至りては、少なくとも、その一部は、なほ悠遠なる上古に於いて、その起原を有する證據がちやんと備はつて居るからである。

三代の昔に於ける漢族の精神的生活は、如上の三經に於いて、殆んど遺憾なきまでに表彰されて居る。何となれば、易は宇宙論を主として、知的方面に關し、書は宗教的分子を含むを以て、意的方面に關し、詩は、たとひ教訓的抒情的の一體に限られたるにもせよ、なほ是れ情的方面に關して居るからである。

そこで次ぎには、この三經の何者たるかを概說し、それから、孔子及びその門人の著述即ち北方思想に就いて話し、次回には、南方思想と、それから、この三者の調和融會の歷史的研究を概說することにしよう。

さて第一には『易』。

『易』の根本基礎は、いふまでもなく、八卦に在るので、傳ふる所に據れば、伏羲といふ人が、考へ出したといふことである。しかし、當時人文の程度から言つても、今存する事が、盡く其の時に出來たといふのではなく、八卦だけを創出したとしても、別に深い意義を有する者ではなかつたらうと思はれる。おもふに博士レッグが、希臘の昔有名なる詩人ヘシオドの觀念と頗る相似て居るといつた如く、朧げながら消長、大動力の存在を認識し、それが天地人の三才を支配するといふところを考へ

はじめたので、第一に陰陽即ち兩儀、第二に四時即ち四象、その次ぎが天地雷水山風火澤の八卦、つまり、宇宙の萬象は、この八種の標準概念の中に包括されるといふ位の者でおらう。これだけでは、何分にも淺近であるが、兎に角、實用的規畫を離れて、已に思索を着けたもので宇宙論の門戸を開き、やがて哲學の濫觴といふべきものである。それから、これを古代神話の變形物として見ると、說明上、甚だ便利で、且つ面白いが、支那の神話なるもの、すでに散亡して、十分に考へられないから、遺憾ながらこの者の關係を探究することは出來ない。

伏羲の八卦から進んで、現存せる易經がちやんと出來るまで、幾多の頭腦は、之れが爲めに耗盡されたらう、すべての場合に、人智の進步は、古代の未成品を仕上げ直し、之れをして、十分ならしめざる限りは、止めようと思つても止まるものでない。

そこで、今の『易』なるものは、伏羲の八卦を重ねて、六十四卦としたのであるが、その書中、各卦を說明したる卦辭、即ち象辭を以て周公の作となし、十翼を以て孔子の作となすこと、最も普通に行はれて居る說ではあるが、之れを否定すべき證據は澤山にあるから、どうも、信ずる譯に

は行かない。つら〳〵考ふるに、孔子の中親しく易を受けたものは、商瞿といふ人である。されば、今の易經は、大方この商瞿もしくはその弟子どもに因つて、完成されたものではなからうか。

複雜多端、且つ明晰を缺ける歷史的過程は、姑らく措いて、取り敢へず一部の易經を研究の對象となし、古今學者の說くところを總括して考へて見れば、この書は、疑ひもなく、支那最古の哲學體系であるといふことに歸着する。普通に、『易』は、占筮の書として知られて居る、なる程、その初めは、卜筮に起原したのであるが、すでに、純然たる哲學と成つた以上は、正に其の地を易へ、たま〳〵卜筮に應用されることもあるといふだけで、世人の俗說は、要するに、その當を得たものではない。

易は、陰陽二大動力を根本原理として、宇宙間の一切現象を演繹しようといふので、まさしく、二元論的思辯である。陰陽は、互に豫想し、相待つて後にこそ現象を構成するもので、長へに、自ら差別して、その特質を持續しなければならない。陰陽即ち兩儀から變じて八卦となり、その八卦は、天地間に存する始源的物象であつて、一切現象は、八卦の互働に因つて出來る。されば之れを具體的に論ずるとき、八卦を重ねるといふをは必要にして且つ十分なる要件である。之れを括言すれば、易の目的は、宇宙現象變化の大法則を標號的に確立せしめ、類推法により、併せて之れを人事の上に應用せむと試みたものである。

『易の論究するところは上述の如く、現象變化の法則に在るので、宇宙本體の考察は、全く閑却されて居る。加ふるに、八卦の互働的作用は、現象變化の法則を論斷したものとはいへ、決して、十分とはいへない。何となれば、四象八卦が、果たして始源的分出であるかどうか、根本的動力であるかどうか、その邊は、丸で、證明がないから分からない。予は『易』に於いて、多少の合理的傾向を見るばかりで、之れに對して、絕對的信用を拂ふ譯には行かない。

次ぎは『書經』これは三代の史官が、當時君臣の言を書き留めて置いたのを、孔子が拔萃したので、事を記したものは別に存して居たが、この方は、不幸にして傳はらないのであらう。書經の內容をいふと、堯典は堯舜の政治を記し、皐陶謨は舜と皐陶と君臣互に訓戒したる言葉を記し、禹貢は禹の成功を記し、甘誓は禹の子の啓が有扈氏を伐つときの軍令を記したのである。この四篇の作は、少

なくとも四千年前であつて、世界に於いて、有數なる最古文獻の一である。その次ぎは、商書五篇周書十九篇、合はせて二十八篇外にもあるが、最も信據すべきものはこれだけしか傳はつて居ない。書經の文は、之れを一概して、極めて奇古で、自ら周末諸子の文とは異なつて居る。それで、この書に記すところは、すべて模範者聖者の訓言であるが故に、萬世に亘つて磨滅すべからざる典則として考へられて居る。しかしまだ科學的反省の何者たるかを知らず、且つ抽象的思索を着けざるが故に、要するに、地方的道德現象の沈澱物に過ぎない、尤も三代の倫理觀を考察すべきものは、之れを措いて外に無いから、兎にも角にも、至大の價値を持つて居るといはねばならない。この事、その發展上から見て、史料としても考へられて居るが、少なくとも主觀史の一部は、こゝに表現し、三代民風の異の如き、一目瞭然之れを掌上に指す如くである。

次ぎに『詩經』は純粹なる支那文學の最も古いものである。元來、怪力亂神を語らずと敎へられたる漢族は、神話を無くしたから、ホメロスに比すべき詩聖の一人をだに上古に有しなかつた。それで、現存せる支那詩歌の最も古いものは、書經に

載せたる舜と皐陶との唱和であるといへば、或は律語を以て散文に後れて出たものとする人もあらうが、堯舜以前に於ける律語の存在は殆んど疑ひを挾むべからざるをで、支那に於いても、他國と同じく、散文よりも前に詩が出來たのである。しかし、太古より周の前半で、少なくとも千年以上の長い歲月の間に出來た歌謠はすべて無くなつて仕舞つて、唯だ商頌五篇が存するばかり、詩經中、これを除いて、其の餘は盡く周人の作である。

詩に六義といふことがあるが、これは姑らく略して話を端折る。それから、『詩經』は、孔子が手訂したので、その當時現存せし詩三千餘篇に就いて選擇を施したといふをである。元來、この刪詩に就いては、後人の議論もあるをであるが、予の私見を以てすれば、ひとり孔子手訂の時のみならず、その初め、封國の多き、年代の久しき、此の間の歌謠といふものは、とても數へ盡くされぬ程であつたらうが、周の太師が之れを探つて天子に奏した時に第一回の淘汰をなし、次ぎに、魯は周公の勳勞を以て天子の禮樂を用ゐるをを許されたが、其の國の太師が之れを傳ふるとき音の詳らざるものを棄てたので、これが第二回の淘汰、つまり、孔子以前に二回までも刪詩

があつたので、孔子の時、魯國に傳はつて居た時の總數は、果たして三千であつたかどうか、分からないが、兎に角、刪正を施し得べき程の多數であつたをは斷じて疑ふべからざることである。かくの如くすれば、今の詩經は、三度まで精選された跡の殘りの代物で、その篇數の比較的に少ないのは如何にも、然るべきことである。

『詩經』の詩は、極めて幼稚なもので、外形上の拘束は、むしろ太だ寬といふべく、その句は、大抵四言を以て定式とするが、必ずしも、之れに拘泥せず、韻脚の如きも假借多く、音に反切なく、協聲をなすこと甚だ自在である。次きに內容を調べると、すべてが抒情詩であつて、敘事詩は、一篇も見當たらない。

支那人の詩に對する概念は、全く誤つて居る。その說に由ると、詩は、自家胸中の感懷を吐露するものとはいへ、その目的とするところは、ひとり消憂暢思に止まらずして、道德を推奬すべきものであるといふので『詩經』に收むるところは、すべて敎訓的抒情詩の一體に限られて居る。そこで、詩材を求むるに、常に倫理的關係の範圍に於いてし、上古樸茂の民情に從つて、最も多く戀愛を歌つた。戀愛に關する敎訓的抒情詩といへば、すべて矛盾の甚だしいもので、戀愛の極致は、現世社會の利害

を超越したのであつて、その上藝術的美は必ずしも道德的善と一致したものではない。支那人は愚かにも之れを悟り得なかつた。されば『詩經』を讀むものは嚴正なる敎訓に接するをは出來るが、終に人間の眞相を窺ふことが出來ない。勿論文學の進步が、いかにも遲々として戲曲小說など、なか〳〵出て來なかつたのは、一に尙古的觀念が着きまとつて居て、その累をなしたからである。

すでに、詩の何者たるべきかを知らずして、之れを蔑視したる極は、詩想の涵養にも對して不利益なること、固より言ふまでもない。周公は禮を制した、如何にも見事なものである、しかも外部身體の動作を限束して、內部心靈の活動を調攝せむとする儒家特有の敎法は、徹頭徹尾、背自然的である。そこで、煩瑣なる禮法の規矩に控縛されて居る內に、いつしか、陰柔狡猾の性質となり、萬斛の痛淚もなく、一腔の熱血もなく、至純至粹の情緒は藥にしたくも、求められない。かくの如く情熱に乏しいものが、いかにして、善く人を動かす樣な眞詩を作り出だすであらうか。それはとても出來ない相談である。之れに加ふるに、偶然の機會、之れを出だすべき着想を得

たとして、例の禮法に制せらるれば、思ひ切つて、十分に言ひ出すことが出來ない。そこで、字句が、自然に朦朧になり、愈〻以て眞正の價値を失ふことに成る。論じて、こゝに至れば、周公たるもの一向に有り難くない。

「詩經」の詩材は、前に述べた如く、すべて人事の方面に限られて直接に天然に對する感想を歌ひ出したものは、一篇もない。おもふに、黄河の沿岸苛酷なる北方の風物は、容易に題目を供給しなかつたからでもあらう。しかし、この貧しき天然を借りて、技工を潤色したところ、往々にして無限の情致がある。そこで、之れを要するに、詩經の佳處は、全く局部に在るので、主として、情景の融合を以て歸着として居る。否、これは「詩經」ばかりでなく、支那の詩、更に進んで支那文學全體の一特質で、ゲーテも、逸早く、殆んど同じ意味の事を言ひあてたことがある。

易、詩、書三經の性質は、ざつと、此の如くで、その專門は、何であれ、苟くも支那に關する研究をしようと思ふ人は、劈頭第一に、これに食つてかゝらなければならぬ。さて、この三經に見えたる漢族固有の思想を集めて大成し、二派の教義にたいへき上げたのが、孔子である。

孔子の略傳人物などは、前年話したことがあるから、こゝには略すをにした。孔子の主義は、人格の完成を期するので、心身並行の發達、知情意の融會といふのが、その大理想であつて、手短かにいへば、大なる常識を尚ぶものである。そこで、常識の者、必ずしも誤らざる以上、儒教はたとひ淺薄卑近なるにもせよ、その基礎は、無暗に搖動する者ではない。さればこそ、强弩の餘勢、今に猶は東亞の半面五億餘萬の人心を支配して居るのである。しかし、孔子の考へ出した學說は、之れを倫理學、若しくは更に進んで哲學として考へ見れば、他は兎に角、時代の關係ばかりでも、原始的體制たらざるを得ない。お負けに孔子は、道德を以て人間唯一の事業となしすべての價値を、これから打算せむとした故に、文學史學の眞性質を認知するに及ばず、之れを以て、敎化の具となし、道德に隷屬すべきものとして仕舞つた。支那に於いて、これ等學藝の發達が、甚だ遲かつたのは、自ら其の故なきに非ず。予は固より孔子の本領、彼れに在つて此れに在らざるを知つては居るが、最も忌憚なくいへば孔子は、敎學上、至大の功勞ありしと同時に、後來悠久なるべき人文の進歩に對しては多少の妨害をなしはせぬかといふ疑問を避け得ぬことゝ思はれる。

孔子の弟子は三千、その中で六藝に通ずる者七十七人打ち揃つて、異能の士ばかり。德行には顏淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓あり、政治には冉有・季路、言語には宰我・子貢、文學には子游・子夏、しかし思想開展の上に重要なる位地を占むるは、曾參と卜商（即ち子夏）とであつて、併も、この兩者、多くの點に於いて異なつて居るから面白い。曾子は、內を重んじ、直覺的に心性の理を悟らむとしたるに反し、子夏は、外を重んじ、專ら文獻學的研究に從事した。そこで、曾子の後は、子思となり、孟子となり、子夏の末派は荀子となつて、その差は、愈〻明晰である。

子思は、孔子の孫で、名は伋、かつて宋に困み『中庸』を作つた。その外にも述作したらしいが、今は傳はらない。孟子、名は軻、子思の門人に學び、齊の宣王・梁の惠王に游事せしも用ゐられず、晚年におよび、退いてその弟子萬章の徒と、詩書を序し、孔子の意を述べて、孟子七篇を作つた。この外に、外篇四篇といふものがあつたといふが、これは傳はらない。孟子の說は、性善に本づき、堯舜を以て、至治の極となし、直ちに之れに倣つて、當世を治めむとしたので、その人物の本色は、活潑なる辯論家であつて、冷靜なる思索家ではない。されば、その說往々にして、淺膚卑近、大抵獨斷で、矛

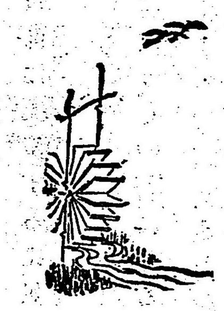
盾を避け得られないが、文辭の雋妙は、百世に獨歩するに足るべく、英偉の氣、筆端に迸るの慨がある。

子思孟子は、儒門の正統嫡嗣であるに由り、その著に係る『中庸』『孟子』は、三代學校倫理敎則の遺とも見るべき『大學』と、孔子の言語、文章を記した『論語』と合はせて、四書といひ、之れを五經に配し、儒敎の聖典として、宋から後は、この上もなく尊重することになつた。五經中の『春秋』『禮記』は、まだ話が濟まなかつたが、この處、都合によつて、後に廻はすことにした。

荀子は、普通に荀卿といふが、實名を況といつた。彼れは戰國の末に出た有數の學者で、韓非・李斯の先生であつたが、その說は、孟子などと大いに異なつて居る。彼れは性惡を主張し、尊禮を以て第一となし、後王を稱し、理想の現實化を百世の後に期して居た。その著に係る『荀子』といふ書物は、文字からいつて辨博富麗を極めて居るが、光燄氣魄、遠く孟子に及ばない。孟荀二子いづれも得失利害がある。前者の弊は空疏にして獨善の氣風を促し、後者は、之れを實際上にして法術に近づくの傾向を生じた。しかし何にしろ、一代の大學者

であるから、荀子の書中、取るべきもの、決して少なくない。かの墨子が儉を尙び、樂を非とするを排擊して、文を知らずとなし、その神怪災祥形相の說を斥けたるが如き、當時に在つては、疑ひもなく卓見であつた。ひとり性惡說に至つては、之れを如何にするも、後人の訾誚を免れない。その說によると、人の性は惡で、その善なるものは僞、僞とは字の示す通り人爲、即ち作り物、そこで、人は其の性に從へば必ず亂に歸して、到底仕末に終へない。これが故に、聖人は特に禮義といふものを作つて之れを矯飾し、皆治に出で道に合する樣にさせるといふのである。こゝに於いて彼れは子思及び孟子を罵り、性善說を否定せむとした。

四書、五經及び荀子は、先秦時代の北方思潮を代表したもので、文學哲學を研究するものは決して之れを閑却してはならぬ。



國語漢文

先秦學術の一斑（中）

文學士　久保得二

さきに北方思潮の概略を述べて置いたから、今度は自然の順序として、南方文學の事を御話致さう。そこで、第一に考ふべきは、人種的差異であつて、予の私見を以てすれば、今日の南人北人、一つにくるめて支那人といふものの、この兩者は多くの點に於いて相違して居る。思ふに南人即ち交趾支那族は、その初めから、全く北人と異なつた關係を有して居たので、中央亞細亞あたりと思はるゝ人類の始源地から、北人よりも前に出發し、先づ南方に向かつて、印度あたりを過ぎ、それから今の緬甸暹羅安南にひろがり、その次ぎに支那に入つたので、我が日本人の祖先も、矢張この一派で、潮流の爲めに、東海中のこの孤島に移住する樣に成つたのではあるまいか。南人と北人とは、體格からして違つて居るので、西の方でいへば鷄頭關を界として、截然その分布の區域を異にして居る。南人は北人に比して、色が白く、軀が疲

せ、丈も低く、眼も細く、鼻梁も高くない。それで形貌と氣質とは、極めて緊密なる關係を持つて居るものであるから、北人の剛勁健固なるに反し、南人は概ね柔和温順である。そこで、孔子も子路の問に答へ、南北人の區別を論じ、「南方の強か抑而の強か。寛柔以て教へ、無道に報ぜざるは、南方の強なり、君子之れに居る。金革を被り、死して厭はざるは、北方の強なり、而して強者之れに居る」といはれた。その上支那人は、一般の風習として、交通の便などを謀ることなく、長しへに祖先墳墓の地に住居し、たとひ他國に出稼して死んでも、その遺骨だけは、必ず故郷に持つて運んで埋葬し、且つ血統を重んじ、素生の分からぬ者とは結婚しないから、その血統は極めて純潔で、如上の差は、四千年後の今日と雖も、相變はらず、ちやんと存して居る。すでに、人種を異にする以上は、言語も違ふので、古しへは楚夏の二音、その後は轉じて漢呉兩音、今日で云へば、北京語即ち官話と廣東語とがある。前者は平上去入の四聲の中、入聲を缺いて居るし、後者は助辭が多く、概して平滑流暢で比較上調諧的である。

それから、南人を圍繞する天然は、到底北人の夢想し得ざるところで、その空氣は

濕潤にして、雲烟の變化、殊に著しく、草木までが生々して居て、從つて土質も肥沃である。元來南方一帶、謂はゆる江東江南の地をして繁榮富饒ならしむる唯一の源は、楊子江の灌漑に在つて、この河の長さは、三千英里、河口より一千七百英里の間は、普通の汽船で上下することが出來るので、現に我が大阪商船會社の定期船は、武昌といふ處まで溯るのである。之れを彼の水量に乏しく、その上、折々洪水の災を惹き起こし、流域を變化する黄河に比すれば、その恩惠の大小、到底言説の外に在りといふべきである。されば楊子江の沿岸、沖積層の平原は、非常の面積であつて今に綿絲麻茶を產し、どし〳〵と外國に輸入する。南京米といふのも、つまり此處から出るので、味は惡るいが、極めて廉價である。とてもの序に、南北二方の自然景象を描きだした近人の句を引かうなら、北方には「雁は寒雲を度り、馬は古道に嘶き、崇山峻嶺、陡に大場を開き、曠野平林、煙火攢簇、樵斧耕鋤、隱約目に在り」といひ、南方には「蝦扉蟹舍菱を採り、魚を捕へ、小舟蕩漾、濃陰の下に來往し、柳隄花塢、盡く春光蕩駘の中に在り、水鄕人家、桔槔聲起こり、牛背の笛聲、兩々歸り來たる、これ耕田鑿井の餘風」といつてある。

南人は此の如く、天惠に富める沃土に居住し、その生活も比較的に容易であつたから、格別衣食に汲々たらずして、十分に精神的生活をなすことが出來た、そこで彼等は多少の空想を發動させることを得たが故に、理想的傾向を有し、その意志は強固でもないが、却つて、感情に富み、概して想像に長じ、その思想から出た文學的作品は、流動多致、變化に富み、決して固定的もしくは單調的でない、北方を山とすれば南方は水、そこで北方は仁者、南方は智者といつた樣な安配。しかし、これは單に兩者の比較でおつて、之れを極言すれば、均しく實際的人種の範疇内に包括されるので南人の想像力も、亦た決して多大の嘆賞を値するものではないといふことを十分に承知して貰はなければならない。

さて南方思潮の張本即ち首唱者は老子である。老子は楚の苦縣厲鄕曲仁里の人、姓は李、名は耳、字は伯陽、耳の緣がそべらであつたから、聃といふ綽名があつたとのこと。元來苦縣といふのは元と陳の領分であつたが、春秋の時、陳は楚の爲めに亡ぼされた故に、この地も楚に入つたので、老子は、謂はば亡國の遺臣である。そこで自己の國を去つて、周に赴き、「守藏室の史」、即ち今日でいへば圖書館の番人となつたようなものに成つたが大方そこで學問を研究したのであらう。その孔子と同時で、孔子に忠告したといふをは、諸書に見えて居るからまさかに詐では無からう。その內に周も日に增し衰微したから茲に居ても仕方が無いといふので、一頭の青牛に跨り、どこといふ目あてもなく乘り出して、西の方大散關といふ處に來た。すると關所の番人の頭の尹喜といふ人が、之れを歡迎し、何か書いて遺れろといつたから、仕方がなく五千餘言（その雜誌でいへば十頁にもならない）の薄ッぺらなものを書きなぐつた後、ハイ左樣ならといつて立ち去つたが、これが今日傳ふるところの『老子』といふ書物である。それから、老子は、どこの隅でくたばつたか分からない、或は仙人になつたともいふが、固よりわてには成らない。後世になると老子が生まれ換はつて佛に成つたといふことを言ひ觸らしたものもある。齊書に『老子關に入りて、天竺維衛國へ之き、日精に乘じて國王夫人の口中に入りすでにして、降出す、佛道これより興る』などいふのが、その一例である。これは固より詰まらぬ話ではあるが、支那の南方思潮が、その根本に於て、期せずして印度佛教の厭世思想に類似して居るといふことの傍證ぐらゐには成ると思ふ。

春秋より後、荊楚は野蠻の域より出で、駸々として北方漢族の文化を移植し、儼然たる一大王國となり、頡りに中國と覇を爭つたが、自然の勢ひ、獨り政治上に止まらずして、思想上にも及んだ。老子の說、北方の煩瑣的道德論と對立したのは、固より然るべきところである。しかし、老子の學問は、果して傳承するところがあるかどうか分からない。これより先き三代の昔、虞夏禪讓の際、殷周交替の間、當時の聖人仲間を反對の位地に立つて居た隱者の類が、大分わつたらしいが、老子はこの種の遺世的思想を承け繼いだものかも知れないが。その根本は、前に述べた通り、わく迄で人種的差異と地理的影響とにあるのである。老子の學は主として、虛無恬淡を唱へ、現世を蔑視し、繁文縟禮の弊害を攻擊し、混沌蒙昧の太古に還るようにしようといふので、全く退歩的で、且つ餘りに理想的である。その著たる老子、即ち『道德經』は、短く薄ッぺらなだけに、その文たるや、如何にも簡奧にして、なか〳〵六ヶかしく、甚だ分かり惡い。その大要はといふと、元來道といふものは、自然に存在して居るので人爲を假うで新らしく出來たものではない。仁義といふものは、有り難そうで一向下ざらない謂はゞ道の廢である。禮樂も其の通りで、それは德の薄き柔弱謙

下にして虛靜無爲、これが謂はゆる玄德であつて、柔能く剛を制し、弱能く強に勝ち謙下にして爭はざれば、天下能く之れが敵となるものなく、虛靜の極、萬物は手を勞せずして、化して行く、これが即ち無爲。名は無爲であるが、實は大有爲、これほど都合の善いことは無い。そこで聖人は民をして無智無欲ならしめるのである。かくの如くして、老子は堯舜などを少しも尊ばないで、むしろそれ以上、支那の神話時代を以て、その理想として居るのである。後世になると、誰れが言ふともなく、老子の說は黃帝から出たといふので、遂に御苦勞にも、黃帝の書といふべんちきな者まで擬作し、之れを一口に黃老といつた。それは、まだしも、漢より以後は、方士といふ奴が出て來て長生飛仙の術を說き、道敎を確立せしめ、老子はいつとなく、祭り込まれて、道敎の元祖となり、太上老君だの、玄玄皇帝だのいふ名を頂戴し、見事にも天神の化生と成つて仕舞つた。

老子が一たび其の說を唱へてより後、之れに歸向したる末祉連も、決して少なくないが、文子といひ、關尹子といふ手合、皆書物がわるが、今傳はつて居るのは、眞赤な僞物であるから、こゝに論ずる必要もない。その次きに能り出だのが、鄭の人列

遂、この人は事蹟も分からないし、その書も甚だ奇妙さてれつに出來たものである。「列子」八卷、今傳はつては居る。勿論どこまでも知れないが禦寇自身の手に成つた部分もあるだらうが、その大部分は、後人の作で、主として次ぎに出て來る莊子の書から取つて來た處もあるし、他の戰國の末の雜書から剽竊した處もあるし、朱子が「列子の語、佛氏多く之れを用ゐるといつた通り、處々に佛敎の臭味を帶びた處がある、これは漢末魏晉の間に出來た者であらう。して見れば一部の「列子」は數百年に亘り、數人の手に因つて段々に出來たもので、一貫の思想系統もなく矛盾も極めて多いが假りに之れを避け、辻褄の合ふ樣にして考察すれば、大體に於いては、まさしく南方思潮の繼承者であつて、宇宙の必然的進動を否定し、一意向上絕對無我の域に到達するを以て、修心の目的としたものである。しかし、孔子を推尊し、楊朱を唱道し、權謀を好まず聖賢を罵言しないのは、他の道家者流と異なるところであつて、後世の儒家から、あまり惡く言はれない所以である。

次ぎは莊子蒙の人で、かつて漆園の吏となつたといふことは、蒙といふのはむかしの宋の蒙で、この頃、宋王偃が凶暴であつて、桀宋といはれ、その後、齊楚魏の三國は

相謀り、兵を合して之れを亡ぼし、その地を分け取りにしたとき、蒙は魏に入つた。俳し、莊子は梁の惠王齊の宣王と同時であつたといふから、又孟子と同時で、その頃宋は未だ滅びないから、莊子は立派に宋の人である。朱子などは、莊子自ら是れ楚人といつたがこれは歷史的考證を忘却したものである。莊子は誰れから學んだか分からないが、孔子の弟子であつた子夏の門弟田子方から出たといふを唱へる人がある、成る程莊子は、これ等の徒に從つたかも知れないが、時勢の感化と個人的性癖とは、彼れをして南方思潮に傾かしめたので、儒家の說も、少しは伺いたらうが、それは後年駁擊の材料となつたに過ぎない。楚の威王が莊子の賢を聞き、使をして之れを招かしめたのも、莊子は笑つて之れを拒絕した。

「千金は重利なり、卿相は尊位なり。子、ひとりと郊祭の犧牛を見ずや、之を養食すること數歲、衣するに文繡を以てし、以て太廟に入る、この時に當たつて、孤豚たらひと欲するも、豈に得べけむや。子亟かに去れ、我れを汚すこと無かれ、我れむしろ汚瀆の中に遊戲して、自ら快うせむ國を有するものの、爲するところとなる無けむ終身仕へず以て吾が志を快うせむ。」世の中には

少しばかりの俸祿の爲に縛られ、その爲めに、一生自由の何者たるかを知ちず、むだくも迷累されて、ひどい目に遇ふ奴もある。莊子の如き、固より常軌を逸して居るがさすがに深く觀るところのあつたものである。

ある論者は莊子と孟子と時を同じうしながら、互に遇つて議論したとも無ければ、その書中各他の名前さへ擧げないまことに訝しいことだといつて居るが、これは未熟な考から出た愚論で莊子は、上に述べた通りの隱者であるし、孟子は何でも一仕事やらかさうといふので、丸で人物が違ふから、互に全く疎遠であつたので、不思議でも何でもない。

莊子は老子の說を主奉する者であるが、老子よりも一歩進んで居る。元來老子は、その究極に於いて出世間的であるが、まだ〳〵全く世界と絶緣せず、多くの場合には、社會の改良に論及して居る。併し、莊子に至つては、社會及び道德を眼中に置かず、人類生存の目的に對して疑問を着け、死生變化の無常迅速に想到し、現實界を以て、全く無意識に出でたる一場の幻夢に外ならずとなし、つまり佛家の禪に類似せる、見獨心齋等、坐身平氣の方法を講じ勉めて煩惱を去り羈絆を脫し、化に應じ、物

を齊觀し是非善惡に差別を無にしかの無何有の鄕に彷徨し、廣漠の野に逍遙し、以て造化の祕奧に參透しようといふので、その極、遂に向內的思索に入つたので、支那古に於ける思想界の一大進境といつても差支は無からうと思はれる。

莊子の書、五十三篇、十餘萬言といつたが、今存して居るのは三十三篇で、晉の郭象が註を作つたときに刪つたといふこと。三十三篇の中內篇七篇、外篇十五篇、雜篇十一篇。內篇は疑ひもなく、莊子の手筆であつて、篇名皆三字、逍遙遊といひ、齊物論といふが如き、いづれも深い意味があるのみならず、確然たる論理上の聯絡を存して開展して居る。しかし外篇雜篇には、後人の作も混入して居るから、盡く信ずる譯には行かないが、その思想は略一貫して居るから、後人といふものゝ、矢張り莊子に私淑した者の筆であらう。

あらゆる支那文學の中天才の作品として最もえらいのは、莊子の書と李白の詩とである。凡そ天下の書は、汗牛充棟限りもない程であるが、その半以上は屑物で終身見ないでも毫も不便を感ぜず又慨ともしないが、唯だ如上の二書は、どうしてもこれを讀まぬ譯に行かぬばかりでなく、之れを觀るの遲きを悔ゆるほどである。

『莊子』はその思想と詞藻とに於いて、ともに豐富であつて、六つかしい哲理的抽象的議論を醇化して、詩的具體的事實とする傾向があつて、その材を擇ぶと極めて自在、どんな詰まらぬ物でも一たび其の筆に上れば、一種の妙致を發揮し、土砂も黄金となり、襤褸も錦繡となるといふ位、それから、莊子は極端から極端に走るので、その言ひ草は、いつでも飛び離れて居て、人の意表に出る。それ故に一たび大を說けば「北溟に物あり、その名を鯤となす、鯤の大、その幾千里なるを知らざるなり。化して鳥となる、その名を鵬となす、鵬の背、その幾千里なるを知らざるなり、その翼垂天の雲の如し。この鳥や、海運すれば、將に南溟に徙らむとす、南溟は天池なり。齊諧は怪を志すものなり、諧の言に曰はく、鵬の南溟に徙るや、水擊つこと三千里、扶桑に搏つて上るもの九萬里、去るに六月の息を以てするものなり」といふ、飜つて一たび小を說けば、「蝸の左角に國するものあり、觸氏といふ。蝸の右角に國するものあり、蠻氏といふ。時に相與に地を爭つて戰ひ、伏屍數萬、北ぐるを逐ふこと旬有五日にして反る」といひ、すべてが、こんな風で、その向かふところ、一として可ならざるなく、滑稽諧謔、自ら恣にするものゝ、その底には無限の熱血と痛涙とがある。何にしろ、莊

子の書は、天品である、絕品である、神品である。

莊子と相並んで、南方の思想界を重くせしめたのは、屈原であつて、『詩經』などに見えた北方の律語に對して、流暢綿麗、兼ねて邊幅の大を誇るべき一種自在なる律語を造り出した。

屈原は、名は平、楚の同姓で、懷王に事へて左徒となり、大いに信任せられ、入つては王と國事を議して號令を出だし、出でては賓客に接遇し、諸侯に應對するを常として居た處、上官太夫といふ奴が、心に其の能を害し、いろ〳〵と讒言をした故に、屈原は氣の毒にも、懷王から疎んぜられて仕舞ひ、悲しみの餘りに、「離騷」といふ一大詩編を作つた。離騷の離は「罹る」といふこと、騷は愁といふことで、今樣の新體詩題目にすれば、「わびしきおもひ」といつたようなものである。その後懷王は張儀といふ者の爲めに欺かれ又ぞろ屈原の諫をも聽かずに秦に乘り込み、直ちに囚へられて仕舞つて、楚國には君が無いから、懷王の子の頃襄王といふが位に即いた。すると上官太夫だの、令尹子蘭などいふ奸佞の臣下が追々に用ゐられ、屈原は頃襄王から怒られて、江南に遷された。そこで愈〻浮世をはかなみ、遂に石を抱いて、汨羅とい

ふ深い淵に身を投げて死んで仕舞つた。

屈原の作に係るものは、上に云つた「離騷」を首として、九歌以下二十五篇の多きに上り、之れを一貫するものは忠君愛國の至情である。元來彼れは楚の同姓であつて、其の君たりし懷王は、己れの諫を用ゐず、その爲めに秦に客死し、終に後年滅亡の原因となつたので、屈原の一生、家國の興亡すること極めて大、その哀怨も、亦尋常忠臣の心情に比して一層であつたらうと思はれる。

そこで「離騷」の內容を略述すると、これは全く屈原が自己の身生を歌つたところの一大抒情詩であつて、先づ出生閱歷よりして筆を起こし、その讒せられて放逐に遇ふや、去つて、古への聖主たる虞舜の遺蹟を吊ひ禱を捧げ、浮世の外なる靈境に徜徉し、月明らかにして風清く、魂は飛んで帝座に近づくを疑ふばかり。併し、好個の幻境久しく駐らず、身は依然として塵土に流落しつゝあるを自覺するや、悵然として堪ふを能はず、そこで、神巫を訪うて其の敎を受け、車を備へて征途に上り、彩られたる雲や、美しき虹に圍繞せられ、銀河の流を橫斷し、やがて西極に近づき、將さに黃河の源頭に達せむとしたるとき、首を回らして故鄕の方を望むと雖も、雲烟咫尺に

迷ひ、何にも見えなかつたといふので、疑ひもなく、屈原その人は、この現世を厭離して、理想界を翹望したけれども、その性情あくまで忠孝で、夢寐にもその君を忘るゝ能はざりし故に、遂に目的を達するに及ばず、やがて懷疑の深淵に沈み、煩懊の烈焰に其の身を焚き盡くされ、傷ましくも自ら死を望むまでに成つたのである。

その他の諸篇も、大抵同一の內容、もしくは思想傾動を以て形成されたので、之れを潤色する爲めに、優秀なる南方の天然と神話とを借りて來た。そこで、王逸は之れを論じて、「離騷」の文、詩に依つて、興を取り、類を引いて譬喩す、故に、善鳥香草以て忠貞に配し、惡禽臭物以て讒佞に比し、靈修美人以て君に媲し、宓妃佚女以て賢臣に譬へ、虬龍鳳鸞以て君子に託し、飄風雲霓以て小人と爲す、その詞溫にして雅、その義皎にして明、凡そ百の君子、その清高を慕ひ、その文采を嘉し、その不遇を哀しみ、その忠を憫まざるはなし」といつたが、殆んど之れを盡くして居る。

かくの如き感懷と、かくの如き材料とを以て之れを如何に敲き上げたかといふと、屈原は南方特有の詩形たる辭賦の一體を以て之れを表顯した。前にも云つた如く、南方の賦は固より北方の詩と全く別樣の發達を成したので、かの宋景文が「離

屬は詞賦の祖なり、後人之れを爲す、至方矩を加ふる能はず、至圓規を過ぐる能はざる如しといつた通り、屈原の作詩の伎倆は、古今獨歩で、その體制の自由にして、韻律の秀傷なるは、決して北人の夢想し得べきところでは無い。されば、その價値「詩經」に比して、むしろ勝つて居るといつても、宜しからうと考へらる。

屈原の弟子に宋玉、景差、唐勒などいふものがあつて、いづれも辭賦を作つたが、今存するのは、宋玉のばかりである。

宋玉、字は子淵、楚の人、頃襄王の時、大夫となつたので、その逸話は、諸書に散見して居るし、單行の集は傳はらないが、散佚は少ないようである。其の作『楚辭』に見ゆるものは、九辨及び招魂の二篇であつて、前者はその師屈原が忠にして、放逐されしを悼むに由つて作り、その辭、悲秋を藉りて興を起こし、後者も殆んど同義で、屈原の愁恨、山澤に散漫し、魂魄放佚、その命將に絶えむとする故に、其の魂を招いて、壽を延べしめるようにと祈つたので、共に屈原の生存中に作つたものであらう。その他「文選」に見えるのは風賦、高唐賦、神女賦、登徒子好色賦などで、又別に笛賦、釣賦、舞賦、諷賦、小言賦等も、其の作であると言はれて居る。散文では「對楚王問」と題する小品

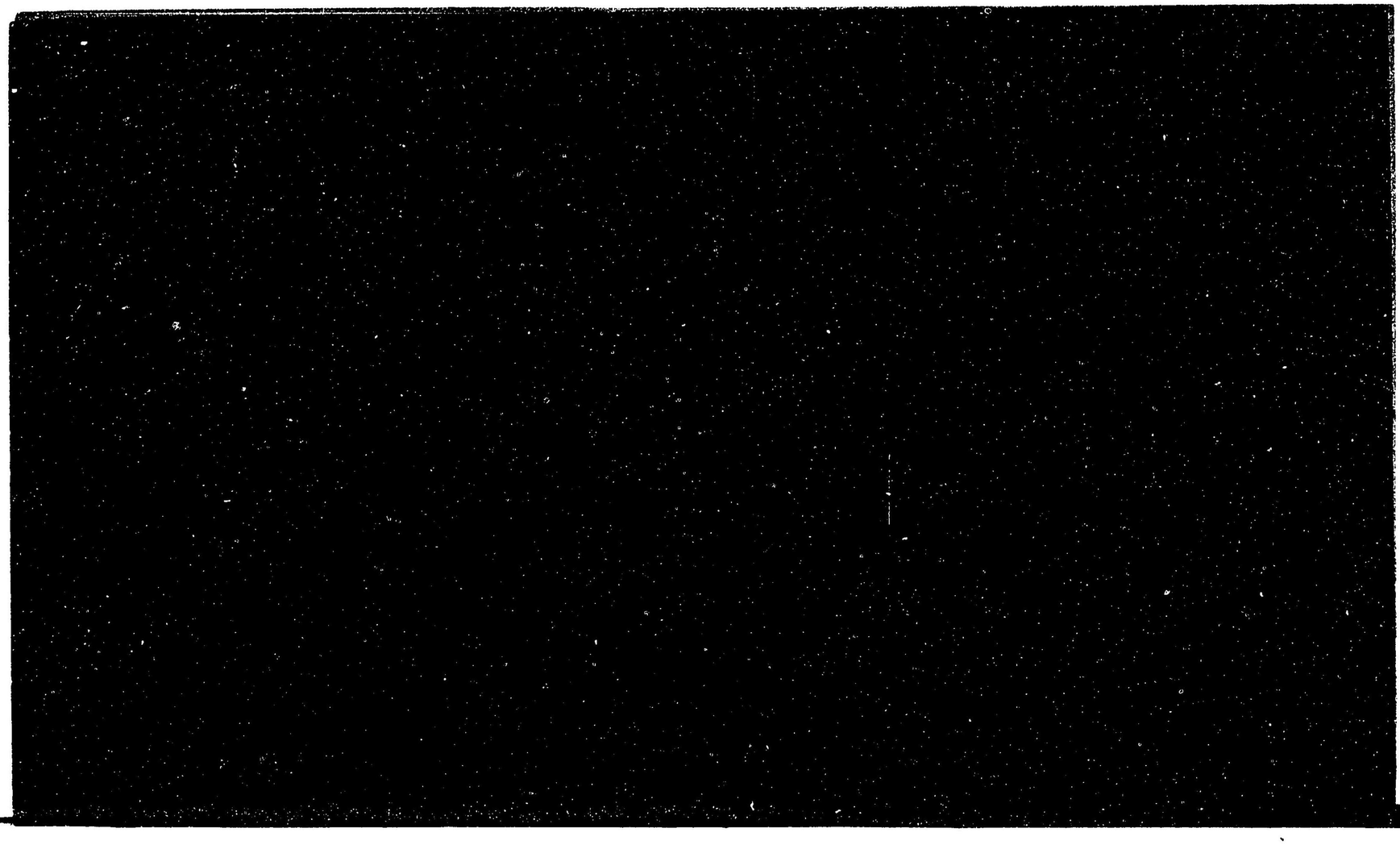
一篇、今に人口に膾炙して、下里巴人、陽春白雪の喩は、數〻襲用されるのである。

漢の時に劉向といふ學者があつたが、屈原の作及び後世思慕するの辭、即ち宋玉の九辨、招魂、作者の知れざる大招、惜誓、淮南小山の招隱士、東方朔の七諫、嚴忌の哀時命、王褒の九思を合はせて十五卷となし、之れを名づけて『楚辭』といひ、外に自分で屈原を思念して作つた九嘆を加へて十六卷となし、その次ぎに、後漢の王逸は、屈原と土を同じうし、國を同じうして生まれたといふ因緣から、又頗一篇を作り、題して九思といひ『楚辭』の注を作つた序に附け加へて、すべて十七卷としたが、これが今日傳ふるところのものである。

以上を總括すると、南方思想界の產物として、哲學に關するものは『老子』『列子』『莊子』純粹の文學としては『楚辭』、それで、その何れもが、北方の產物に比して、はるかに文學的である。

天地の氣各〻方を以て殊なり、而して人も亦之れに因る。南方は山水蘊藉にして縈紆、人其の間に生まるゝや、氣の正を得たる者は溫潤和雅にして其の偏なる者は輕佻浮薄なり。北方は山水奇傑にして雄厚、人其の間に生まるゝや、氣の正を得たる者は剛健爽直にして其の偏なる者は麤厲强横なり。此れ自然の理也。是に於いて其の性に率ひて發して筆墨となり、遂に亦南北の殊あり。惟だ能く學べば咸正に歸す、學ばざれば日に前に流る、學の純雜を視て優劣を爲す、宗の南北を以て低昂を分かたざるなり。

（『芥舟學畫編』）



先秦學術の一斑（下）

文學士　久保得二

これまで述べ來たつた南北兩思潮は、いづれも時勢の紛擾騷亂に激して起こつたものであつて、後になる程實際社會に切實であつたけれども、要するに道德を以て社會を改良して行かうといふので、如何にも尤も至極ではあるが、急な間には合ひ兼ねる。これより先き、犀利なる眼光を以て、國家經濟の方面を觀察し、堂々たる政治上の經綸をなし、見事に成功したものがある、それは即ち管仲その人である。

周の興る時、武王を輔佐して、大功を爲したものゝ中で、太公望・周公旦の二人に勝るものは無からう。さうして、この二人は、多くの點に於いて違つて居る。太公望は兵法に通じ、權謀を用ゐたに反し、周公はただ表面ばかりかは知らないが兎に角道德を以て政治の標準となし、且つ禮を制したのである。そこで、太公の後たる齊と周公の後たる魯とは、國風民俗に於いて依然として非常の差がある。「史記」に

據ると、下の如きことがある。武王すでに商を平げて、天下に王たり、師尚父を齊の營丘に封ず。東して國に就くや、道に宿して、行くこと遲し。逆旅の人曰はく、吾聞く、時は得がたくして、失ひ易しと。客寢ぬること甚だ安らかなり、殆んど國に就くものに非らざるなりと。太公之を聞いて、夜衣して行き、黎明國に至る。萊侯來たり伐ち之れと營丘を爭ふ。太公、國に至り政を修め、其の俗に因つて其の禮を簡にし、商工の業を通じ、魚鹽の利を便にし、人民多く齊に歸す。五月にして、政を周公に報ず。周公曰はく、何ぞ疾きや。曰はく、吾その君臣の禮を簡にし、其の俗の爲に從ふなりと。魯公伯禽周公の子の初めて封を受けて魯に之くや、三年にして政を周公に報ず。周公曰はく、何ぞ遲きや。伯禽曰はく、その俗を變じて、その禮を革め喪は三年にして之れを除く、故に遲しと。周公乃ち嘆じて曰く、嗚呼魯は後世それ北面して齊に事へむと。これは、人口に膾炙して居る話柄であつて、親親上恩は魯の施政の主義で、尊賢上功は齊の立法の精神であるといふことが分かる。かゝる歷史的感化から、魯の學者は道德說を振りかざし、齊に於いては功利說が興つたのである。しかし、もう一つ、齊が東方魚鹽の國であつて、自然に經濟思想を養成したといふことを忘れてはならない。齊に於いて管仲の出たのは、決して怪しむに及ばないことである。

時勢の必迫は、管仲をして、其の說を出たしめたのである。當時世が愈〻降るに從ひ、國家の組織を改造する必要が起こつた。これを一國の中で云つても、昔は道德主義で以て構成されて居たので、國家の公と個人の私との間に、さばかり嚴重な區劃が無かつたが、人口の增殖したことゝ、生計の困難に成つて來たのと二大理因は、道德主義の政治をして、漸次に無效とならしめた上に、從來の有樣では、君上の威信が甚だ振るはずして、とても主權者の勢力を維持して行くことが出來ない。そこで、何とか革新を試みねばならぬ樣になつて來た。又續つて他國との關係上から云へば、中央集權の瓦壞は群雄の割據となり、大は小を兼ね强は弱を呑むといふ有樣で、富國强兵は第一に講ぜざるべからざる要件となつた。こゝに於いてか、管仲は齊より出で桓公を佐けて霸者政治といふものを始めて行つて見るように成つたのである。

霸者政治は、或人の言つた通り、王者政治と法治政治との過渡であつた換言すれ

ば、道德主義の政治と法治主義の政治との連鎖であるが、要するに一時を彌縫するに過ぎぬ者である。桓公及び管仲は、天下を統一して、帝王とならうと思つたかも知れないが、その頃は、諸侯の數もまた多く、且つ表面に於いては周室を尊ぶ風がまだ殘つて居て、とても生きて居る內には、その目的を達することが出來ないといふ見當が付いたから自國の富強を恃とし、王室を尊ぶを名とし、一時諸侯を命令したのである。その心では、子孫代々かくの如くして、いつかは一統をしようと思つたかも知れないが、さう甘くは行かぬもので、後嗣その人を得ずして、やがて一時的のものとなり、その後、ある場合だけ、諸侯を糾合することを覇といふ樣に成つたのである。或は覇者の起原を論じ、遠く夏殷の間に在るといつたものもあるが、そんな古い時分の事は、今更分からないのみならず、又わざ〳〵探究する必要もない。

管仲の傳は、簡單ながら『史記』に見えて居るし、管鮑貧時の交といふことは、常套の故事にさへ成つて居る位、又その詳細を知りたい人は左傳・國語・新序・說苑などを併せて見れば好い。それから管仲の理想及び主義は、如何なるものかといふにその精神とするところは個人の幸福と國家の健全とを保たしめようといふので、

禮義廉耻を以て四維となし、國民は誰れでも、社會の一員として、其の義務を盡くさなければならない、尤ともこれればかりなら、矢張儒教的であるが、管仲の儒家と異なるところは敢て强制的に道德の實効を命令せず、主權者は國民をして道德を行ひ易い樣に相當の準備をして遣るといふので、これが經濟上の見解である。管仲の考では、人が社會を構成し、道德を實行して、相互の安寧と秩序とを保つて行くのは生活狀態の或程度以內に限られた者で、一たび其の度を超ゆれば、道德も何にも要つたものに非ず。制裁も全く效果がなく本來の獸性を出して、互に噬呑するものである。だから國家をして健全ならしめ、人民をして道德を守らしめようとするには、或る程度まで、人を富まさなければならない。そこで、「倉廩實ちて禮節を知り、衣食足りて榮辱を知る」といつた。これは管仲の根本原則たるのみならず、千古不磨の格言である。管仲はこれから演繹して政治經濟の諸論に及んだのであつて、その說くところも誠に至極穩當で、誤謬も割合に少ない。現に管仲は之れを以て、諸侯を九合し、天下を一匡し、尊王攘夷の大業をなしたのであつて、孔子が「その仁に如かむや、その仁に如かむや」といひ、韓非が之れを崇め奉つて聖人といつたのも

當然の事である。而して予の管仲に取るところは、彼れが道德の絕對的價値と强制的命令とを否定し、支那に於ける政治、法律、經濟等、諸種實地的學問の開山となり、大に新思想を發揮し、文學上に暗々の中少なからぬ影響を及ぼしたといふことである。

『管子』の書は八十六篇であつて、古人は之れを八に分かつた。その中經言の九篇は全く管仲の手筆であるといひ、殊に牧民篇の如きは司馬遷も引抄して、仲の說だといひ、又韓非の引いたものも往々にして、經言中の文と符合して居る。そして其の文は簡奥であつて、戰國時代の作家と違つて居るから、全く前言を信じて差支がない樣であるが、しかし容易に首肯の出來ない節もある。何となれば文中に於いても種々の異思想が混合して居て、儒家の言に似て居る處もあるし、道家の言に似て居る處もあるし、墨家の言に似て居るところもあるし、法家の言に似て居るところもある。尤もこれが即ち管仲獨得の思想だとすれば、それまでゝあるが、篇々の文致が多少異なつて居るのは、前說を否定するに對して、極めて有力なるものである。されば『管子』も『列子』などと同じく、その或る部分は管仲の手筆で、その

餘は先秦時代その餘流を汲むもの數輩の手に成つたものである。

しかし、經言は、全部管仲の筆でないにしろ、兎に角、春秋の文に相違ない。簡古なるあり、逸宕なるあり、質正なるあり、而してこれを一貫して寬厚の風があつて、殺伐の氣がない。楊忱は管子論高くして文奇なり、作者ありと雖も、復た一辭を加ふべからずといつたが、若し此等の諸篇に就いて評論したものとすれば、大いに中つて居る。

管仲の思想は、當時に於いて必須なるものであつて、その根本は變通主義である。しかし、管仲は敢て全く舊慣を打破したのではなくて、實は周官の制度を多少改善しただけである、だから、改善といふ點に重きを置き、新法を案出する方へ向かへば、謂はゆる法術家ともなるし、なほ幾分舊來の禮文を保存した點に重きを置けば、儒家と切つても切れぬ緣故がある。そこで管仲の功利說は從來數派に分かれた。

この數派も地理的分布をなして先づ最も明晰に三大派をした。その第一は管仲の功利說を北方思潮即ち儒教的政治的に掲きまぜたので、孟子などが明らかにそれである。彼れは管仲の人物をけなし付けたけれども時勢の窮迫と齊に遊んで

長く其の地に留まつた結果とで、自分では意識しないかも知れないが、いつしか、此くの如く成つたのであらう。併し、その影響の痕跡がさまで明瞭でないから、前人は之れに就いて一言したこともない。それから荀子の法治主義に傾いて居るのも、やはり之れに洩れない。けれども、最も注意すべきは刀佼といふ人で義を以て利と均一にした。彼れは魯國の産で、商鞅の師となつたが、後に鞅が素にて罪を得た時禍を懼れて、蜀に逃げ込んだ。その(第二)は、純粋なる管仲の遺志を、その儘に進歩さしたもので、換言すれば生え抜きの中部思潮が漸次に膨大したので、富國強兵を以て主要となし、謂はゆる法家である。この系統に屬するものは魏の李悝、秦の商鞅であつて、地理的位置から言つても支那の中部を通貫して、西方にまで進んだことを示して居る。その(第三)は南方思潮との化學的抱合であつて、君をして無爲ならしめ、臣をして功利を爲さしむるといふ、謂はゆる術家である。この系統に屬するものは古いところで鄭の鄧析、齊の愼到、韓の申不害などである。

以上の諸人はいづれも著述があるが、文學上から言へば價値が少ないから、こゝに詳論することを見合はせて置かう。

北方思潮、中部思潮、南方思潮といふ風に三つ並流し、前の二つ、後の二つは、かくの如く合一の傾向を、早々より現はしたが、戰國の末、如上の三者が、或意味に於いて一に統合されかゝつたことがある。それは、次きに述ぶるところの韓非子である。

天才が冷酷なる浮世の迫害に遇つた悲慘なる歷史は、韓非の短い歷史に於いて顯はれて居るので、千古の人をして同情の念に堪へざらしむるばかりである。彼れは元と韓の庶公子であつて、李斯と俱に荀卿に事へたが、さすがの李斯も、とても斯人に及ばないといつて、一目置いて居た。韓非は、戰國の末に出て、自國の日に削弱せらるゝを見兼ねて、慷慨の念に堪へず、屢〻書を以て、韓王を諫めたところが、聽かれない。併し、こゝに一條の異說が郁離子に見えて居る。それに依ると、韓非子、政を韓になすこと、且に十年ならむとす、韓の貴人、俄に死するもの完家なく、こゝに於いて、韓に贖官多し。」尤も、これは、他に傍證がないから、眞僞の程は一寸分かり兼ねるそこで、不平の思に沈んだ極、先づ書を著はして見た。『史記』に「韓非國を治むるにその法制を修明し、勢を執り、以て其の臣下を御し、國を富まし、兵を強くし、而して、以て人を求め賢を任することを務めず、反つて浮淫の蠹を擧げて、之れを功實の上に

加ふるを疾み、以爲へらく、儒者は文を用ゐて法を亂し、而して俠者は死を以て禁を犯す。寬なるときは名譽の人を龍し、急なるときは介胄の士を用ゐる。今の養ふところは用ゐるところに非ず、用ゐるところは養ふところに非ず。廉直の邪枉に容れられざるを悲しみ、往者得失の變を見、故に孤憤五蠹内外儲說說林說難十餘萬言を作る」とある。すると、誰れが持つて行つたか知られないが、秦の始皇は、其の書を見て、大いに感服し、嗟乎寡人この人を見て之れと遊ぶを得ば、死すとも恨みずといつた。その頃韓非の同門たる例の李斯は、秦に用ゐられて居たが、これは、韓非の著はしたものであるといつた。その内に、秦は急に韓を攻めたから、韓王は韓非を秦に使に遣つた。始皇は之れを悦んだが、まだ信用しない。そこで、韓非は、書を上つたが、それは今の韓非子の開卷第一に載せてある「初見秦」といふ一篇である。この破題の數十字臣聞く、知らずして言はざれば忠ならず、人臣となつて不忠たらば死すべく、言つて當たらざればまた死すべし。然りと雖も、臣願はくば、悉く聞くところを言はむ、唯だ願はくば大王その罪を赦せよ。もし其の說にして成らずんば、せば、大王臣を斬り、以て國に殉へ、以て王の爲めに謀つて忠なら

らざるものとせよ」といふ如きは、その抱負の大を見るに足る。そして、此の書に言ふところは、天下統一の策であつて、韓非は、自國の存亡を意に留めぬかの如くであるが、それは、胸中別に畫策するところがあつたに相違ない、その次ぎにある存韓の一篇が、暗に個中の消息を漏らして居る。始皇は、此の書を見て、愈、其の人となりを慕はしく思ひ、之れを登庸せむとした。すると、李斯・姚賈などいふ手合が、之れを惡み、韓非は、韓の諸公子であるから、之れを用ゐれば、常に韓の爲めにし、秦に取つて損にはならうが得にはならないといつた。小人の言、いつもながら忌々しいが、如何にも尤も至極な事であるから、始皇は、之れを獄に下した。その時、李斯は人をして韓非に毒藥を贈り、自殺を勸めた。幾程もなく、始皇は大いに後悔し、人をして赦さしめたところが、時すでに晩し、この絶大の大思想家は、最早や死んで居たといふこと。こゝに又異說がある。『戰國策』に「秦王姚賈を千戸に封じ、上卿となす、韓非之れを知つて曰はく、賈は梁の監門の子、梁に盜し、趙に臣となりて逐はる、今秦かくの如きものを取り、社稷の計を同じうす、群臣を勵ます所以に非ざるなりと。王、賈を召して之れを問ふ、廼ち韓非を誅す」とある。之れに從へば、韓非の人物頗る鄙

劣であつて、却つて自家の矛盾を免れない。予は、たとひ本末を審かにせざる所あるにしろ、『史記』列傳の云ふところを信じ、之を以て足れりとする外はないと考へる。

今傳ふる『韓非子』五十五篇、少しく議論のわる處もあるが、大體に於いては、舊の儘で、先秦諸子中、尤も信ずべきものである。前にも云つた通り、韓非は、春秋以來の三大思潮を統合したもので、之れを詳說すれば、君主自ら法律を制定し、國家を治め人材を登庸するを第一義とせよといふのは、北方思潮に依傍したもので、次ぎに君主の一身は無爲の政をなし、臣下から見て丸で分からない樣にしろといふのは、南方思潮の影響であつて、最後に、施法の精神は、あくまで嚴格にして毫も假借するところなきを貴ぶといふのは、主として中部思潮の餘派、法治主義を取つたものである。といふことを證明するのである。

いかにして韓非がかゝる思想を形成したかといふことは、尤も興味あるばかりでなく、又極めて必要な問題であらう。彼れは、固より、中部地方の產であつて、その國は申不害がかつて政を行ひ、一時國力を盛んにし、その流風餘韻が、殘つて居るところである。そして、彼れの師は荀卿であつた。そも申不害は、南方かぶれの法治

主義を標榜した人で、荀卿は北方かぶれの法治主義を振り廻はして居た。そこで、韓非子は、南方北方プラス二倍の法治主義といふので、兎に角、法治主義が根本となつて、他の二大思潮を以て之れを潤色したものである。世人或は、荀卿の門から韓非の出たことを怪しむが、それは、荀卿を以て、單なる儒家と考へて居るところから起こる謬見である。前にも述べた通り、荀卿は、儒家には相違ないが、その禮を重んじたる極は期せずして、法治主義の範圍に入つたもので、その門から韓非の出たのは、不思議どころか、極めて自然である。況んや、韓非は、綜合に妙を得て明快なる頭腦を持つて居たから、その師の持說以外に、一步を踏過したのである。故に、之れを總括すれば、時勢的感化、地理的影響、歷史的觀念、師承的傳統、個人的性癖を捏ね合はせて一大新思想を構成したので、先秦時代の思想界に於いて、極めて緊要なる地位を占むると同時に、之れを以てあらゆる變化を極め盡くし、思想的運動の大團圓をなしたものである。

韓非の學說を述ぶれば、隨分長くなるから、こゝに概略を摘んで言ふと、從來の道德論者は、情を重んじて居るが、情など、何になるものか、人間は、唯だ利の爲めに活動

するばかりである。そこで國家を治むる唯一の要具は、法律であつて、つまり利に傾く念を制限して、相互の安寧を維持して行くのである。それから法律は刑罰を主とし、之れに伴ふものは警察機關の設備である。先づざつと是れだけ。要するに、韓非の法治主上主義は、法律の絶對的價値と帝王の神聖とを以て成立したもので、明らかに時弊に反抗して起こつたものであるが、彼れはかゝる立言をなすべき必要と、その確實とを自ら信じて居たのである。しかし、其の失は、法律を過重して人情を輕視したといふことである。彼れの論を以てすれば、社會といふものは、僅かに利害の觀念を以て結合したもので、親子夫婦の間でさへも、親めば合し、疎めば離れ、別に何の意味もなく、乾燥無味殊に甚だしいもので、人間に普遍的實在を有する同情、類感などといふものは、全くその眼中になく、決して完全なるものとはいへない。但し彼れの頭腦は、緻密であつて、その論理の明晰、思想の自由は、たしかに思索上の大進歩である。

韓非子の話が濟んだからすぐに秦の焚書に遷つても善いが、てゝに是非一寸論じて置かなければならぬものがある。それは『戰國策』と『呂氏春秋』。

『戰國策』は、普通に史料として居るので『漢書』には『史記』と一類にしてあつて隋唐二書又之れに從つて居る。後に晁公武に至り、はじめて、改めて子部縱橫家に入れ『文獻通考』も之れを承けた。考へて見れば『戰國策』の體裁は、歷史であるけれども、その議論は、縱橫者流であつて、人は固より一家では無けれども、大體の趨向に於いて一致して居るから、內容を論ずるときには、子類といつても、さしたる誤謬ではない。

縱橫家も、矢張中部思潮の副產物であるが、主として國際上に關係し權謀術數を用ゐるだけに、南方思潮に近い。故に一言すれば、術家の變形である。その元祖は鬼谷子であつて後に蘇秦張儀などを出したが『戰國策』は、これ等策士の言動を類集したものである。

戰國策は、元と纏まつた一部の成書ではなく、縱橫家の流を汲むものが、その私淑する人々の事跡を筆記して虎の卷としたのを集めたものである。劉向の序に「校するところの中、戰國の策書、臣向國に因つて十三篇を得たり。この書もと號して國策といひ、或は國事といひ、或は短長といひ、或は事語といひ、或は修書といひ、或は長書といふ。臣向以爲へらく、戰國遊士の策

謀なれば、宜しく戰國策となすべし」とある。されば、戰國策は、疑ひもなく、劉向の手に因つて編次されたものである。

戰國策の風は、春秋と異にして、最も直接に、効果を得ようといふので、あらゆる手段を盡くし、中には隨分卑劣なものもある。從つて其の言に發するところ、少しも忌憚なく言ひたいことを言ひ散らして萬乘の諸侯を手の中に丸めたのである。何は兎もあれ、すでに策士と名がつくからには、勿論非德的人物も多かつたらう。しかし、かゝる人物の言動を記載したからとて、その者に文學的價値の無いといふ筈はない。否、事實の複雜なるに就け、その策士たるもの、いづれも稀代の雄辯家であるに就け、一層の面白味があつて、『戰國策』は之れを『左傳』『國語』に比し、ほゞ同に文學者價値のあるものである。

もし文學を論ずるに似而非美學者の偏見を離れ精神氣魄もしくは風韻に重きを置き、文學以外に人を勾引する一種の勢力の存在を重視したならば、秦時代のあらゆる文學的作品の中、最も卓絶なるものは『莊子』とでの『戰國策』とであらう。『莊子』には仙氣があるし『戰國策』には劍氣がある。これは決して摸倣す

べからざる特色であつて、その價値の超絶的なることは論ずるまでもない。

周の時代に於いて天下に重視されて居た國は、すべて五つである。腐つても鯛で第一が周及びそれと同一の歷史的關係を持つて居る魯、これが北方思想の發源地。次ぎが楚で、南方思想の發源地。次ぎが齊で管仲の出たところ。次ぎが晉、後に韓、魏、趙に分れ予の謂はゆる中部思想の匯合したところ。それから秦、こゝには如何なる文學を出したか、秦の文學、即ち西方文學を考究するには之れを二つに分けねばならぬ、即ち始皇の前と始皇の後とである。

始皇の前に於ける西方文學の最も古いのは『詩經』の秦風であつて、明らかに國民の特色を示して居る。秦人の風はあくまで孤峭峻厲である。それもおもふに自然的景象の感化であらう。秦の領地は今の陝西を根據として、四川を併せ、甘肅の一部にも及んだ。今若し一たび三晉の平野を過ぎて、函谷關にさしかゝると、一夫之れに當たれば萬夫も防ぐなしといふ、天然の要害、それから潼關やがて蜀道となり鳳嶺の嶮巇を望み、畫眉關から馬道を經、鷄頭關から棧にかゝるのであるが、この間、至るところ山は峻にして水は激し濃雲瞑霧が常に閉ぢこめて、何となく、物

さびしく凄い樣である。この山水に涵養された秦人は自然の勢ひ前の如くなつたのであるが、彼れが十分にこの特色を發揮すべき文學を出ださずして、やがて滅亡したのは如何にも殘念なことである。

『呂氏春秋』は唯一の西方文學であるが、如上の理由を以て、まだ獨絶の價値を發揮するに及ばない。すべて偉人の事業は大抵黑幕に無名の大傑士が付いて居るのであるが著書の黑幕付は呂不韋が開山である。呂不韋は多少の政事的手腕があつたにしろ、何を言つても一個の商賢であつて著書などをする眞面目な人物ではなかつた。併し此の書は兎も角も首尾一貫して居る處を見ると門下の士の手に成つたといふものゝ、誰れか一人編輯主任があつて、その意見を以て取捨し、やがて一つの結構は毎篇冒頭に抽象的議論を振りかざし、部に敲き上げたものと見える。その次いで事實を擧げて之れを證明し、比喩を引いて之れを補證し、遂に初論に復すといふので、始めに演繹をなし、終に歸納をなすといつたようなもので極めて分かり易い。

『呂氏春秋』の文章は茅坤が「その文沈鬱孤峻、江流峽を出で、石に遇うて未だ伸びざるもの〻如く嗚咽の氣あり」といつた通り、かぼろ氣ながらも、西方文學の特色が見える。

始皇の後の西方文學を代表するものは、實に李斯その人であつて、その傳は『史記』に見えて居て誰れでも知つて居る。彼れは韓非を畏敬しただけに、思索力に乏しいが實行的能力はなか〳〵えらいもので、あつて、ただ道念の固くないのが大缺點であつて、終に身を誤り、上蔡門外黃犬を率ゐて狡兎を逐ふことの出來ないのを嗟嘆して趙高づれの手に死んだのである。六國の學者は秦の統一以後ぐうの音も出ずに引込んで仕舞つたから、李斯は兎にも角にも學識あり才力あり、且つ丞相の位に居たところから一代の文柄を其の手に握つて居た。彼れの文は逐客を諫めた書以下列傳中に見えた數篇と始皇本紀に散見したる金石文字とである。彼れは文章に於いて全くその師荀卿に學んだもので、自己の巧思匠心といふものは割合に少ない。そこで遊麗ではあるが奇峭でなく、豐褥ではあるが簡切でなく、直截ではあるが枯淡である。ただ規摸の大きい處はたしかに、天下統一の氣運の然らしめたところであらう。それから編中對偶の句の頻々たるは漢の中葉以後か

ら出かけて來た四六駢儷文の備を作つたものである。

始皇及び李斯の政治的方針は君主の權を無限にし人民をして絶對的服從を爲せようといふのである。そこで、法律さへ呑み込まして置けば、善い、從來の學說はたとひ妨害をなつても、利益になることは少ないから、宜しく絶滅すべしといふのである。この論は李斯に因つて建議せられ始皇に因つて採用せられ、遂に焚書坑儒の慘禍を現出した。

支那文學は疑ひもなく、こゝに一大頓挫を來たしたのである。しかし、つら〳〵考ふれば焚書坑儒は始皇の暴行に外ならぬ樣だが、實は必然の結果であつて、法治至上主義から割り出されたるのみならず、同時に數百年間活動し續けた餘波俚たる漢人種に對する休息の鐘聲であるといふことを忘れてはならない。

助動詞と豆爾波と

文學士　横地清次郎

こゝに六十の露消えがたに及びてさらに末葉の宿りを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿を作り、老いたる蠶の繭をいとなむが如し。これを中頃の住家になずらふれば、また百分が一にだにもおよばず。とかくいふほどに、齡は年々に傾き、住家は折々にせまく。その家の樣世の常ならず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺ばかりなり。

落花の雪に踏み迷ふ片野の春の櫻がり、紅葉の錦着て歸る嵐の山の秋の暮、一夜を明かす程だにも、旅寢となれば物憂さに、恩愛の契淺からぬわが

故郷の妻子をば行方も知らず思ひ遣り、年久しくも住み馴れし九重の帝都をば今を限りと願みて、思はぬ旅に出で給ふ心の中ぞ哀れなる。

前のは鴨長明の物せし『方丈記』の一節、後のは『太平記』、俊基卿吾妻下りの一節、ともに名ある文として人々の口にする所で、今其の文の中に、文字の右傍に線を施したるのに、にて、をば、たる、が、だに、も、ずは、以下數多の語、その他この例ならぬわらゆる文中に現はるゝ總べて此の類の語形短小なる語(尤もたゞ語形短小なればとて余が今指示せむとする語にも限らず)は、其の文章中に立ちて勤むる職務より考へて見ると、名詞や代名詞や動詞や形容詞などとは違つて獨立の働きを爲さない。諸種の品詞に添はつて、樣々の意味を云ひ添へ、語の働きを助けなす所から此等を總稱して助辭とも名づけて有る。さて其の助辭の中にて語の形の變化するものと、變化せぬものとの二種が有るから、これを活く助辭と活かぬ助辭の名稱が有る。

さて語形の變不變から別かつて見れば以上の如くであるが、文章中に於いて其の助辭の方には働助辭の名あり、活かぬ助辭には靜助辭の名稱が有る。

働ひる役前、即ち語の品性より考へて見ると働助辭は總べて(僅少の除外例はあるがそれは皆特種の性質のもので、全体より見れば先づ働助辭は總べてというて差支ない)動詞の語尾に添はつて其の活用を助くる所からこれを助動詞と名づけ、靜助辭の方は其の性質の種々の別はあるが總括して豆爾乎波或は助詞といふ。或は此の一群の語が常に他品詞の後に置かれて其の役を爲すこと丁度英語の前置詞の如き所あるより之れを後置詞とも後詞とも呼ぶ人もある。或は語と語との中間に立ちて相互の關係を示す作用あるより關係詞とも名づけてあるが、靜助辭は殘らず語と語との關係を示すものだとは言ひ難い樣で有る。

さて助動詞と稱せらるゝ語は其の數が動詞の如くに多數では無い。根本の形だけで數へて見ると先づ二十八個で盡きるものというて宜しからう。即ち被相を示すると、役相を示すとさすとしむと、動作の完了を示すつと、ぬとたり、とりと過去を示すけりときと、未來を示すむ、打消を示すずとじとまじと、推量の意を示すらむとらしとめりとましとけむと、當さに然る可き意を示すべし、それから詠歎の意に用ゐらるゝなりとけりと、指定する意のなりとた

りと、比況の意を示すでとしと以上二十八語であるが、此の中意は異なつて居ても語形の同じいのもあるから、それを引き去つて見ると二十三語に過ぎぬ。此等の諸語皆活用するのであるが、其の趣きは動詞とは稍異なる點がある。即ち或ものは動詞の下二段活や四段活や良變活や奈變活に同じい活用をなして、未定、連用、中止、終止、連體、接續、命令の諸形を備へて居るものもあるが、或者は其の語の性質上必ずしも此の諸形を備へぬものもある。且つ又其の活用も形容詞と同樣なのもあるし、或は五十音圖の他行に渡つて不規則なる活用をするのもあつて、頗る厄介である。却つて動詞の數は非常に澤山あつても歸する所は九類であつて、各類語根、語尾の規則正しきに比べて記憶に面倒である。さて助動詞を研究するには左の順序に因る。

第一、助動詞の意義。　これは講讀に由つて得た知識で、一々實例に當たつて前に述べた二十數語の意味區別を研究するのである。これは敢て難い事では無い。注意すべき點をいはば(1)被相のるらるると勢相のるらるるとの別、(2)さすは使役の意を示す助動詞であつて、一個の動詞ではない、然るに往々動詞として誤用し易

い事、例へば「復習をさす」とか「勉強さす」とかの類、此等は誤りで「復習をせさす」、「勉強せさす」と動詞へ續けねばならぬのである。(3)指定のたりと完了のたりとの別、(4)指定のなりと詠歎のなりとの別、(5)過去のけりと詠歎のけりとの別、先づ是れ位でありませう。

第二、上への連續。　第一の研究によつて會得しえた二十八個の助動詞の中で指定のたりは助動詞の名は有りながら、動詞には連續せずして名詞にのみ連り、動詞には名詞にも連り、でとしは動詞に連る外に助詞の又はがにも連る。またりは四段活及び佐變活の動詞にのみ連る。以上の除外例を心得てさて後に助動詞一般の上への連續を研究せねばならぬ。即ち助動詞は動詞の語尾へ連續するものではあるが、動詞活用の色々の形の何れへも連續するものではない。動詞の未定形へ續くものもあり、終止形へ續くものもある。而して一つの形へ續くべき助動詞は決して其の他の形へは續かず。各一定の規則がある。それは左の表によつて暗記せねばならぬ。

右の如くであつて既定の接續形と命令形とへ續くべき助動詞は一つも無いのである。又こゝに注意すべき事は(1)右の表にりの無い事である。此の語は勝てり行けり、せり等の如く四段活と佐變活とに限りて連續し、他の活用の動詞へは連ることがない。又上へ續く時の法則も四段活の場合に於いては勝て行けの如く接續形へ續くが、佐變に於いては其の未定形せへつゞく。即ち右の表に示して見ると未定形と接續形との二ケ所に示さねばならぬのであるから之れを省いたのである。

る。且つ此のりの由來を尋ね見るに、もと勝ちあり爲あり等のちあしあの熟合して更に旋韻と稱する音韻の變轉によりて勝てり、せりとなつた其のりだけを取つたものであるから、此のりが四段活の勝て(接續形)佐變のせ(未定形)に續くと説明するは實際は當たらぬのである。(2)被相のるとらるとも同じく意味に別がない。又役相のす、さす、しむの三者も同樣であるが上への連續に於いて別があるのである。即ち被相る勢相る役相すは四段活、奈變活、良變活(即ち語根にア、イ、ウ、エの四母韻の配當せらるゝもの)の動詞に連り、被相のらる勢相のらる役相のさすは其の他の活用の動詞に連る。又役相のしむは一般の助動詞同樣にあらゆる活用の動詞に連る事。(3)終止形に連るべき助動詞はすべて良變活の動詞へ連る時に限つて其の連體形に連る事。これはあらゆる動詞の終止はウの韻なるに良變獨りイ韻に終はるといふ變則があるが、其の變則が助動詞との連續の場合に消失したるものと見れば差支がない。今一の注意は(4)終止形へ連るべきらむらし、べしの三語は上一段活に限りて其の未定形へも連る。例へば見べし、見らし、見らむ等の如きである、古今の歌に、

春立てば花とや見らむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく。

また土佐日記の中の歌に、

白妙の浪路を遠くゆきかひてわれに似べきは誰ならなくに。

この他未定形へ續けた用例は古へには多くあるけれども、今日の文法に於いては從ふべき規則ではないのである。

助動詞が上に動詞を承けて連續するには以上の法則に從ふものであるが、今度は上に助動詞を受けてそれへ連續する場合には如何なる規則に從ふものであるかといふと、それは全く右の規定と同樣で有つて異なる所は無い。唯だ上の助動詞を動詞の一種だと思へば差支ないのである。前回動詞の研究にて說いた如く動詞に助動詞の添はつたる知らず行かしむ斬らる等は皆一の複體動詞であるから助動詞が其等へ連るには其の複體動詞の未定形なり連用形なり各〻規定通りにすれば宜しいのである。さて其の複體動詞の法形は何に由つて定むるかというと各〻其語の末にある助動詞の法形によるので、これは次ぎに來たる下への連續に於いて研究すべき事項である。

第三、下への連續。　此の項に於いて研究すべきは謂はゆる助動詞の法で、一口に言へば先づ動詞の法と同樣である。即ち下に來たるべき詞の品性に從つて助動詞の語形が種々に變ずべき一定の法則を知る事である。動詞の場合に於いては未定、連用、終止、連體、接續、命令、中止の七法を立て、其の各用法に對する規定の語形を一覽の表に作つて動詞の法形表と名づけ、之れを諳記して下への連續の法則を學んだのである。助動詞に於いても此の方法に從ふのが最も便利である。

助動詞法形表

中止形	未定形	連用形	終止形	連體形	接續形	命令形
本						
る	れ	れ	る	るゝ	るれ	れよ
らる	らるれ	らるれ	らる	らるゝ	らるれ	らるれよ
被相						
る	れ	れ	る	るゝ	るれ	れよ
らる	らるれ	らるれ	らる	らるゝ	らるれ	らるれよ
勢相						
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
役相						

	完了				過去		未來	打消			推量					可當	
しむ	つ	ぬ	たり	り	き	けり	む	ず	じ	まじ	らむ	らし	めり	まし	けむ	べし	
しめ	て	な	たら	ら		けら		ず		まじく				ませ		べく	
しめ	て	に	たり	り		けり		ず		まじく						べく	
しむ	つ	ぬ	たり	り	き	けり	む	ず	じ	まじ	らむ	らし	めり	まし	けむ	べし	
しむる	つる	ぬる	たる	る	し	ける	む	ぬ	じ	まじき	らむ	らし	める	まし	けむ	べき	
しむれ	つれ	ぬれ	たれ	れ	しか	けれ	め	ね	じ	まじけれ	らめ	らし	めれ	ましか	けめ	べけれ	
しめよ	てよ	ね															

比況	指定		詠歎	
本形	ごとし	たり	けり	なり
未定形	ごとく	たら		なら
中止形 連用形	ごとく	たり		なり
終止形	ごとし	たり	けり	なり
連體形	ごとき	たる	ける	なる
接續形		たれ	けれ	なれ
命令形		たれ		

此の表は何れの文典にも掲げられてあつて特に示す迄は無い事であるが、動詞の法との差異を説くに當たつて目前に置く必要があるから載せたのである。今左に動詞法形表との差異の點を指摘して見れば、

(1) 表中所々に空位ある事。　これは其の助動詞に特種の法形の備はつて居らぬ事を示すので、これ各語の性質上必要が無いからである。

(2) 助動詞への連續に於いて取除けある事。　先づ未定形の一段につきていはば動詞に於いては(イ)ばといふ接續助詞に連つて行かば、落ちば、捨てば等の如く未

定の接續を示し、(ロ)るらる(以上被相る、らる、一個の助動詞の何れにも連つてそれぞれ固有の意義を示す。此の二つの内、助動詞の場合に於いては(イ)の方の未定接續に就いては差異はないが(ロ)の方に於いて取除けがある。即ちずの一例を取つて見ると、れず、られず、せず、させず、しめずならず、たらず等は凡べて未定形からず へ續けたものであるが同筆法でつぬ、まじ、べし、でとし等の未定形からず へ續けてずなず、まじくず、べくず、でとくずなどは決していはないのである。此の續くものと續かぬものとの差別は實用上決して誤る者ではない。試みに一つ一つの助動詞を取つて續けて見られたらば、意味を成すものと成さぬものとの區別が出來る、其の意味を成すもののみを拾うて表に作ると、助動詞と助動詞との連續表が出來る。此處にはわざと示さないから既に研究して上への連續と下への連續とを實地に應用して自から作つて見られたならば有益なる練習である。元來連用といふ名稱は用言即ち動詞へ連る所から來た名であるが助動詞の場合に於いては中には用言へ續かぬものもある。而し續くべきものは必ず此の形から

ら連るからして表にかく示してある。中止形は動詞に於けると同じく助動詞に於いても連用形と共通であつて文章中に現はるゝ用例は却つて連用としよりも多數である。終止連體接續の三形に就いては動詞に異なる所は無い。表を見ても空位のあるのは比況のごとしの接續形のみである。これもごとけれといふ形を用ゐても差支あるまい、現に花の如けれと、斯くの如けれどなど往々用ゐられる樣で將來には一つの形として成り立つであらうけるとも文法家は未だ許して居ない。終はりに命令形に就いては、助動詞の多數は命令を表はすべき性質で無いのだから此の段に空位が多い。表に就いて命令形を備へて居るものの活用の性質を考へて見ても皆動詞同樣の活用で、助動詞に特有とも いふべき不規則の活用をするものが一つも無いのである。

以上に於いて、助動詞の研究事項は指摘し盡くした考である。なほこれに就きて犯し易き誤謬は後に述べませう。

世界的賞與を得たる五名士

ダイナマイトの發見者として世界に有名なる瑞典人アルフレッド、ノーベル氏が八百万弗の利子をもつて物理學化學生物學藥物學に關する重要發明をなしたる人、理想的傾向を有する顯著なる文學的著作者、世界平和の福利に貢獻したる記臆すべき人々に年々與ふべく遺言されたる結果に關して、一月廿一日の毎日新聞は下の一項を記載せり。『物理學上の最大なる功勳として賞與の「ラジユム」發見者キユリー夫妻に頒たれたるは、何人も首肯する所なるへし、此二人に繼いでベックレル氏また賞與を得たり、蓋し氏が「ウラニウム」の性質に關する研究はラジユム發見の實驗と推理との聯線と見るべき者にして、學界に於ける貢獻頗る偉大なる者あれば也。化學界の授賞者は從來世人に多く知られざりし瑞典人にして名をアルヘニウスと云ふ、電氣學に關する大著述家として、又（イオン電氣分解に依つて生ずる原子）の性理に關する著述家として現はるゝ生物學に於てはコツペンハアゲンのドクトルフイレセン氏選に入り、氏は電氣より發する光線の中に、人躰の醫療に大なる利益ある者の存するを發見し、之に依て人躰衛生に貢獻する所頗る多かりし人也。文學上の功績を以て授賞したるは那威の老詩人として政治家として夙とに盛名を噪したるビヨルンソン其人也。選任の當を得たるは誰人も之を拒む者なかるべし。最後に世界平和の增進に功勳ありとして賞與を得たるは多年萬國仲裁同盟會の主幹たりしクレーマア氏なり、他の授賞者は皆歐洲大陸の人にして、僅かに氏一人のみ英國に生を享けたり、而して猶ほ一の注目すべきことは、氏の遺言賞與がスカンヂナビア人の手に入りたるは昨年を以て始めとすると是也、蓋しノーベル氏は瑞典、那威、丁抹三國人に關して特に興味を有すると深かりし也。而して是等五名士の受けたる懸賞金は頗る多額なるは勿論なれど、吾人は賞金其者は素より問ふに及ばず、只斯る賞與を提り得たる五名士の材幹を高しとして彼等を產みたる國民の文化を羨望し措かざる者也、

國語漢文

漢學研究法

文學士　久保得二

さきに讀書力の涵養に就いて話し、それから、支那人文の基礎ともいふべき先秦の學術に就いて、その一斑を述べて置いたので、これから專門的研究の口開ともいふべきものを略說し、それで、愈〻御仕舞と致さうといふ考である。如何なる學科を研究するにしても、必要なのは、辭書である。支那の字書は、漢代以後、歷世その典據となつたものがあるが、今日では、矢張り『康熙字典』が第一である。和刻のも數種あるが、卷帙浩瀚で、役に立たないから、舶載の石印縮刷本が好い。これにも、數種あるから、中で最上の者を選ぶが宜しい。その外『字彙』『正字通』なども好い。漢英のもあれば、猶更よいがジャイルスのは、五十圓もして、一寸求め惡いから、せめては『五車韻府』でも備へ付けて置くが好い。

それから、人名辭書は『萬姓統譜』『二十四史姓氏韻編』『尙友錄』の類、英文では、ジャイル

スの "Chinese Biographical Dictionary"。近ごろは支那人名辭書としよいものも出來た。

次きに地名辭書は、李兆洛の『地理韻編』とプレイヤーの "Geographical Dictionary of China" といふものがある。

その又次きに、目錄解題は、むかしから隨分多いが、一番善いのが『四庫全書總目提要』これを節略したのが『四庫全書簡明目錄』この簡明目錄は、近ごろ、石印縮刷本があつて、張之洞の『書目答問』と合して、一帙に成つて居る。これから、進めば『八史經籍志』でも備へて置く。

如上の辭書類は、座右に缺くべからざる備付品であつて、この外故事などを調べるには『佩文韻府』『太平御覽』『淵鑑類函』『事類統編』『事文類聚』などがある。この類の書は研究用としては、排列編纂、その當を得ないこともあるが、物は使ひ樣によつてどうにでもなる。その上、大抵は、石印縮刷本があつて、今では、容易に求められる。

扨てこれから專門的研究に亘るのであるが、諸種補助學科の事は、各〻專門の先生方が扣へて居られるからこゝに私見を述ぶるまでもなく、且つこゝに專門的研究といふも、その根本的方法を述ぶるよりも、普遍的に簡易なる方法を述ぶるが至當

であると信ずるから、先づ今日世上に流布する參考書の紹介より始め、その後、更に一步を進めたところに及ぶことに致しませう。

第一、東洋哲學　之れに關する參考書の主要なるものは、

東洋倫理學史　木村鷹太郎著
東洋倫理學史　全　上
支那哲學史　文學士　遠藤隆吉著
支那哲學史　文學士　中內義一著
支那哲學史　文學博士　松本文三郎著
支那哲學史(早稻田大學講義錄)　文學士　高瀨武次郎著
揚墨哲學　小柳司氣太著
宋學概論　荻原裕著
諸子大意　狩野良知著
支那教學史略　西脇玉峰著
孟亞聖　文學博士　建部遯吾著
陸象山

王陽明
孟子の學說
孔子の學說
東洋倫理史略

それから更に進んで、詳しい處を遣つて見ようといふのならば、先秦の諸子を自分で研究するのだが、その對象となるべきは第一に四書、五經殊に詩・書・易の三經、ともに『十三經注疏』と朱註とを對照して研究するが善い。清朝の考證家や、邦人の注釋類は、隨分多いが、あまり長くなるから、話を端折ることにする。次ぎに諸子は單行して居るが、十子全書などがまとまつて居て、且つ便利である。十子とは、老子・莊子・荀子・列子・管子・韓非子・淮南子・揚子法言、文中子、鶡冠子であつて、諸子の重要なるものは、大抵備はつて居るといつても善いのみならず、いづれも、註解附である。しかし老子は、河上公の僞注であるから、外に王弼注及び蘇轍の評注などを見なければならぬ。莊子は郭象の注であるが、なほ他に林世仲の莊子因、陸樹芝の莊子雪、宇津木某の解莊などを見るが善からう。林希逸は、老莊列三子の注を作つたが、ともに

文學博士　三宅雄次郎著
松村正一著
全　上
文學士　久保得二著

參考の價値がある。韓非子は、普通世に行はれて居る解詁全書でも先づ善い。次ぎに物徂徠の讀荀子・讀韓非子は、ともに是非讀まねばならぬ。

宋より以下には、宋元學案・明儒學案・國朝學案小識の三書がある。これは、支那近世哲學史資料とでも名づくべきもので、支那に於ける有數の大撰述である。その體裁といへば、哲學者の傳記を第一に掲げ、その著書中重要なる文句を節略して載せ、最後に學者の批評を附記したので、これだけ讀めば十分、もう一層詳しい處といへば、各人の著作全體に就いて研究する外はない。

次ぎに支那宋明の後を承けて發達した日本哲學に關する參考書は、

日本倫理史稿　湯本・石川二氏共著
日本陽明學派之哲學　文學博士　井上哲次郎著
日本古學派之哲學　全　上
日本哲學要論　文學士　有馬祐政著
日本倫理要論　全　上
近世德育史傳　足立栗園著

心學史要　山崎闇齋之學說　武士道發達史

これ等を取り合はせて讀めば、大略は分かる。その次ぎに研究の資料を集めたものは、井上、蟹江兩博士の編に係る『日本倫理彙編』といふものがある。

第二東洋文學――その中、特に價値あるは、言ふまでもなく、支那文學である、が之れを論究したる今人の著述は、

先秦文學　文學士　藤田豐八著
支那小說戲曲小史　文學士　笹川種郎著
支那文學史　古城貞吉著
支那文學史　文學士　笹川種郎著
支那文學史(早稻田大學講義錄)　文學士　久保得二著
支那文學史　仝　上
支那文學史(英文)　ジャイルス著

支那文學大綱

藤田●笹川諸氏合著

支那文學の中、漢魏六朝間のものは一部の『文選』さへあれば、大抵分かる。それからの處、文では『唐宋八家文』及『文粹』の類、陳龍川・方正學・宋景濂・劉誠意・唐荊川・陳白沙・王陽明・歸震川・劉蕺山・汪蓼峰・朱竹垞・袁隨園・孫忠靖などいづれも邦人の選に係る文粹がある)を通覽すれば、宋、明より近清に至るまでの間、散文沿革の概略が知れる。

詩では、沈德潛の古詩源、五朝別裁集があれば、上は堯舜時代より、下は康熙乾隆の間に至るまで之れを一貫して、この大略を知ることが出來る。

それから、今少し詳しい處といへば、隋以前は、古詩錄・古詩歸・古詩紀・唐では唐詩歸・唐詩正聲・唐詩選・唐賢三昧集の類を取り交ぜて讀むが善いし、宋には宋詩鈔あり、元には元詩選あり、明には明詩綜あり、清には湖海詩傳・江西詩徵・國朝詩人徵略あり、これで澤山。

この上は、全く專門的で、漢魏六朝百三名家集・全唐詩・全唐文の三書があれば、唐までの詩文、大抵悉く備はる。それより後は、詩文ともに各人の全集を繙くより外はない。

普通謂はゆる詩の姉妹であつて、且つ元の雜劇傳奇の母ともいふべき者が詞（一名塡詞・詩餘）である。その研究に就いて、初歩の處が、田能村竹田の塡詞圖譜で作法を調べ、夏秉衡の清綺軒詞選で其の例を見る。少し進めば、萬紅友の詞律を朱竹垞の三朝詞綜とがある。その上は、專門的で、花間集・草堂詞選、絕妙好詞箋を始めとし、あとは各人の集に就いて研究する。

小說の中、一番讀み易いのが三國誌、それから水滸傳、西遊記、紅樓夢、これが支那の四大小說、少し骨が折れるが、はしり讀にも讀めば一層好い。近人の作は、一々擧げるも煩はしい。次ぎに美文の標本としては、燕山外史、この二書は邦刻本もあるし注釋もある。それから、狐妖鬼跡を記したのが聊齋志異、これも注釋附の新刊石印舶載本がある。次ぎに小說の歷史的研究をしようといへば、漢魏叢書に收めたる數種の次ぎに、唐代叢書・五朝小說などちやんと纏まつたものもある。戲曲では西廂記、實の處は、六つかしいのだが、邦人の注釋も、一二種はあるから、先づ第一食つて懸かるに都合が善い。この後には琵琶記、牡丹亭、笠翁十種曲、紅雪樓九種曲などがある。

朝鮮の詩文も、多少傳ふべきものがあるに相違ないが、書物が、なか〳〵得られないから、仕方がない。予は、かつて、鄭夢周・李舜臣等、諸名臣の集を一寸見たことがあるが、なか〳〵馬鹿にならないと感じた。朝鮮文學の研究など、一寸變はつたところが面白からう。

次ぎが日本人の詩文、こいつ甚だ慨むべきもので、今日の處、全く閑却されて居る勿論堂々たる大國民が自國語でなく、他國の古文學を擬作するといふので、根本から間違つたものであるが、その影響感化の偉大なるを、なか〳〵馬鹿にならない。吉田松陰など、その幼時、田間に於いて、賴山陽の「東海大魚振鬣尾」だの「文政之元十一月」だのを高吟して東方を睨んだものだ。今日でも「鞭聲肅々」の吟聲でも聞けば、チエストウと言ひたくなる。漢詩は、日本人に親近であるが、本邦人の作に係る眞正の詩文は極々近ごろである。王朝時代の懷風藻、文章秀麗集、さては本朝文粹の類一二枚讀めば、欠伸が出る。日本人の漢文は、德川時代に於いて、始めて觀るべきであるが、適當の選本が無いから、各人の集に就いて見る外はない。即ち徂徠・栗山・山陽・艮齋・笛浦・宕陰・節齋・拙堂、これ位で十分である。今度は詩、林羅山の子・向陽林子の

本朝一、人一首と、江村北海の日本詩史、この二書があれば、上は弘文天皇より、下は元祿時代まで、詩の大略が分かる。之れに次いでは、俞曲園の東瀛詩選で、上は林羅山より、下は明治時代、就中現存せる南摩綱紀、跡見花蹊などまでである。且つ各人に關する評論の如きも、往々にして、取るべきものがある。たゞ惜しい事には材料がまだ十分でないので、五山の大詩人たる絕海の如き、雪村の如き、その一首をだに載せず、元祿の名家たる梁田蛻巖の如き、選者自身後篇しか見ないといつて居る。秋山玉山の如きも、何かの選本から取つたものと見え、鴻門高の如き、鬪髏杯歌の如き、ともに載つて居ない。しかし、何にしろ、便利な本で、藤水晶の日本詩選の如き、間に合せものとは丸るで位が違ふ。

これより進めば、又ぞろ專門的で、面倒でも、王朝時代の諸集を讀み、次いで五山の文學、それから德川時代諸家の全集に及ぶので、日本詩文の研究も、なか〳〵興味がある。遠からぬ內、小生は之れに關する自己の撰述を公にしよう。

第三東洋史學――これは、今日の時勢から言つても、極めて必要なものであるが、その撰述は割合に少ない。勿論敎科書などは隨分あるが、あんまりあつさりし過ぎて居る。辛うじて、二三を擧ぐれば、

支那通史　文學博士　那珂通世著
支那東洋小史　仝　上
中等東洋史　文學士　桑原隲藏著
東洋通史　文學士　久保得二著
又朝鮮の歷史は
朝鮮史　林泰輔著
朝鮮史綱　西村豐著
朝鮮開化史　恒屋盛服著
日韓古史斷　吉田東伍著

安南、暹羅、それから、ずつと懸け離れて、蒙古、西域に關する邦人の著述は、猶ほ絕無である。

それから歐人の著に係る支那歷史の主要なるは、

Boulger, D.C.――― The History of China.

Williams. S and F. Wells ——A History of China.

Will iams——Middle Kingdom.

その他一々擧げない。

次ぎに通史として推稱すべきものゝ中で、最も簡明なるは、御批通鑑輯覽、それより詳しいのは資治通鑑と宋元通鑑もしくは續資治通鑑である。

又略史、繹史、尙史などを續けて見ても、更に多少詳しいところが分かる。

この上ならば、二十四史(史紀、前漢書、後漢書、三國志、晉書、宋書、南齊書、梁書、陳書、魏書北齊書、周書、隋書、南史、北史、唐書、舊唐書、五代史、舊五代史、宋史、遼史、金史、元史、明史)及び清朝の歷史材料たる東華全錄と九通(文獻通考、續文獻通考、皇朝文獻通考、通典、續通典、皇朝通典、通志、續通志、皇朝通志)とがあれば、先づ澤山。これだけの本を買ひ揃へるに舊刻本ならば、少なくとも六七百金したが、今はいづれも石印本があるから、百五十金乃至二百金で濟む。この上の處は、如上諸書の根本資料たる歷代の史料雜書に就いて調べる外はない。

第四東洋言語學——といつて見たところで未開の學問で、こゝに述べることも

出來ない。この中、一寸話して置くべきは、支那文典であつて、これに關する歐人の著書は、隨分あるが、邦人の手に成つたものは寥々晨星も啻ならずといふ有樣、強ひて言へば、僅かに二三、

漢文典

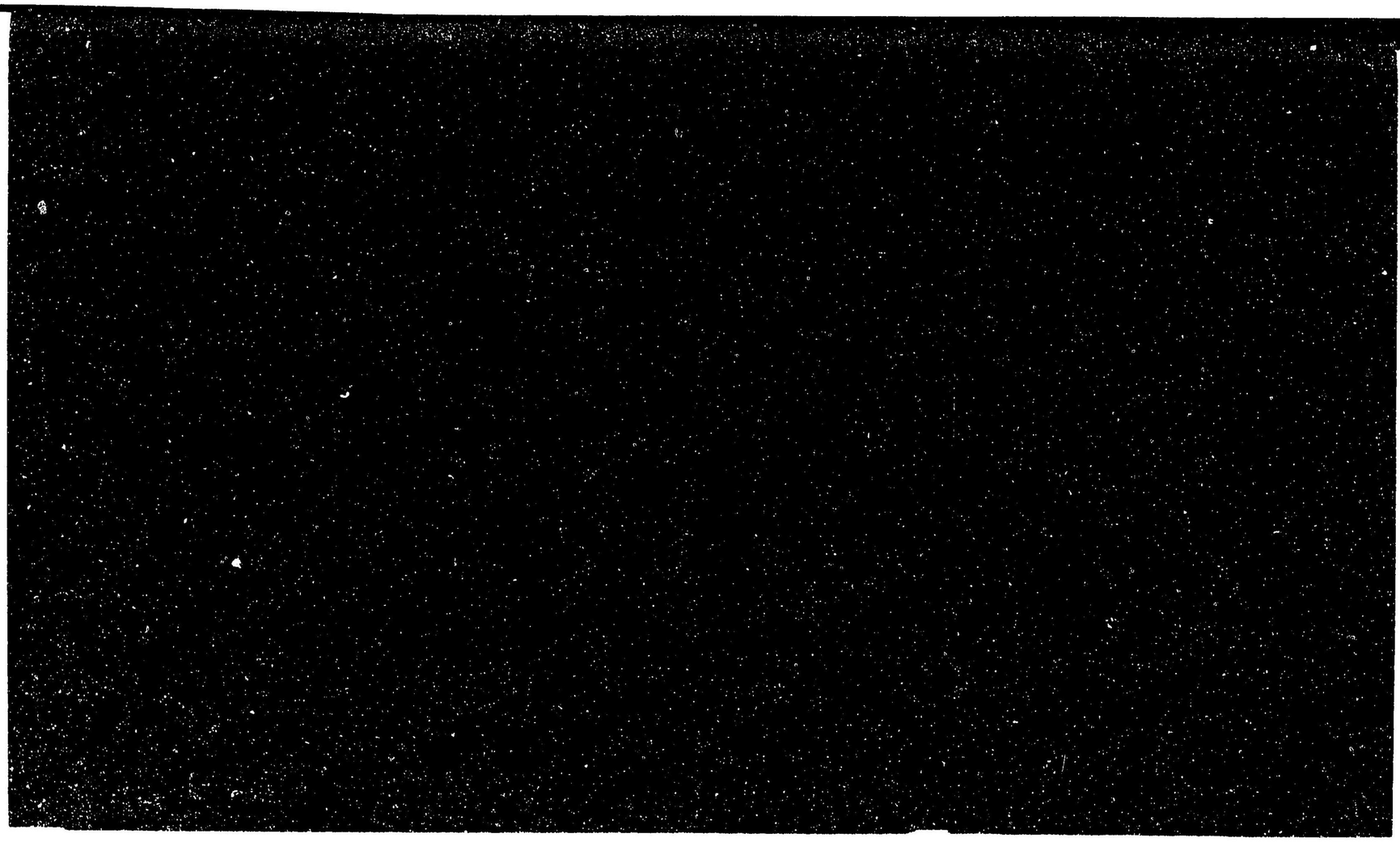
漢文典

支那では、馬獻忠の、作に係る馬氏文通がある。馬獻忠は、明治十五六年の頃朝鮮事件の時、大院君を引つかまへて、支那へ還つたこともあつて、歷史上、一寸覺えて居ても善い人だが、かつて久しく佛國に駐在し、そこで歐西の智識を得、やがて、この著を出したといふことである。

之れに次いで、支那語及び時文の研究講習に就いても、これぞと思ふ樣な適當なものはなく、殆んど二十年前の出版に係る亞細亞言語集が、今でも行はれて居るといふ次第。時文には、伊藤松雄氏の清國時文類聚及び注釋といつたやうなものがあつたと記憶する、この頃又、二三種、出版されたようである。

之れを要するに、東亞文獻學の範圍、頗る廣濶にして、且つ必要と興味と、兩つながら存在することは、誰れでも直ちに推測し得べきことであるが、その日尚は淺くして典據となるべき大撰述は、東西を通じて、未だ十指を屈し盡くすに足らぬといふ次第、まことに情ない事である。これに就けても、吾々は自己の重任を自覺し、天の冥寵を垂れ玉ひしを感謝し、一肌ぬいで、奮發しなければならぬ。吾々にして、起たずんば、東亞の文獻、悉く其の傳を失ひ、數世紀を出でずして、悉く幽渺に埋沒し、吾人の誇りとする種族的特色も、やがて煙と成つて消えて仕舞ふのである。

なほ終りに臨んで一言しよう漢學！漢學は、いかにも陳套極まれる骨董的學問に相違ないが、東亞文獻學は出來たてのほやほやどころか、これからやつと出來よういふ、極めて斬新なる學問である。憐れむべし、二三の諸老先生、詞名重望、なほ存すと雖も、塚中の朽骨、すでに謀るに足らず、馬に倚つて待つべきものは、青年の學者である。而して予は、その爲めに鞭を執つて先驅するを辭さないといふことを公言し、これで、愈々御仕舞と致します、ハイ左樣なら。



グリーレー家郷を辞する圖

作文

「富貴と貧賤」と題した本誌第二期第二回募集の懸賞文に對して應募者八十餘名、其の中九篇を選んで當選とした。今度の應募文章は、各〻自分の境遇、或は實際の感情を書かれた爲めか、例に比して餘ほど佳作が多かつたが、悉く載せ得ぬのは遺憾である。當選九篇の外吉岡孫二、岡田丈之助、一井益二郎、永野英行、平田貞、越川助作、長瀬定市、高梨寒碧、寺田四十二等諸氏のはいづれも佳作であつた。

六月　審査者しるす

貧賤と富貴と

第一等　二八

貧賤と富貴と

處世の方針

越後國三島　九山精四郎

嗚呼我れは富者とならうか、貧者とならうか。識者は所謂成功の祕訣を說いて何でもかでも富者になれと勸める。しかしながら一度人生の目的といふ大問題に想ひ到れば、我れは富者たることが今の青年が想像して居るように樂しい勇ましい生涯であらうとは思はれない。

見よ、釋迦基督はどうであるか。家財名譽を擲つて衆生濟度の爲めに身命を犧牲に供したではないか。若し今人の思想から云へば、彼等は正しく大なる失敗者と云はれねばならぬ。然れども二聖の偉大なる人格が千歲の下猶は赫々として世を照らして居る所は、綺羅錦繡を纏ひ、山海の美味を食し、煩惱の奴となり、果ては死屍に鞭つ古河市兵衛等と迚も比較のつくものではない。かく觀じ來たれば、眞の成功は萬代を通じての成功でなければならぬと共に、物質の富を以ては到底精神の

慰安を求め得ないことが明らかに知らるゝ。

かくいへばとて余は決して物質的富者たることを拒む者ではない。若し世に渇しても盗泉の水を飲まぬといふような君子で同時に富豪たるものがあらば、余はその人を師表として仰がざるを得ぬ。けれども、世に見る所、多くは萬民の膏血を絞つて自家の利己心を満足せしめむとする富豪のみである。見よ今日富の壓制の如何に烈しきかを。然らば吾等が處世の方針をば如何に定むべきか。余は元來物質精神の兩者に高下の差なしと信ずるが故に、露骨にいへば余が究竟の目的は兩者の調和を期圖し、兩者の富者になることである。固より基督の聖訓は知らぬではないが、余の決心は兩者に事へむとするにある。嚴格なる意味から云へば今日の如き過度時代に於いては道徳に權威がないから、純然たる道徳的生活をしようとすれば、到底餓死を免れないが、斯くの如き主義目的より余は處世の方針として、何事業たりとも、熱心に忠實に働いて相當の利益を得、樂しく勇ましく暮らさゞらざる理想的生涯を送らうといふ考を定めた。若し標準が貧富の問題以上にあらば、何とて富者たることと貧者たることとに齷齪する必要があらう。

（註、思想も文章も確かりして居る）

貧富の四辻

名古屋市　堀江兼治郎

商賣は大事だ、衣食住の種だからと、今日も正午過ぎから車を引ッぱッて商繩を出掛けたうどんの白玉アー、うどんの白玉アー僕の得意先は江川端上宿邊にあるのだ。昨日は日曜で好く賣れたが今日は賣れないか知らん」など考へながら、例の白玉々々とふれて行くと不知々々大幸橋の四辻へ來た。ドンの水は二六時中倦まず流れて誠に勉強家だ。吾々怠惰者には宜い鞭撻である。仰げば金の鯱は相變はらず輝いて居る。オヽ早や三時が學校の生徒等が歸つて來る。中學校、商業學校、

工業學校の生徒等の中には以前の學友もあるが、「君」とも「堀江」とも聲を掛けて呉れない。却つて意氣地なしと誹謗して居るように見える。情ない事だ。けれども氣落はせぬぞ。僕も中等教育會員だ、第一期十五號に掲げてあらう、古河翁の幼時は豆腐屋だ。淺野氏はれでんやではないか。學問も大切だが、商賣も肝要だ。太陽が西へ廻らしたドレ早く歸つて中等教育の復習でも仕よう。

評、文章がよく氣象をあらはして居る

第二等　三人

工女

岐阜縣　山川太六

隣りの婆アさんが、手紙を持つて來て、「毎度御厄介ですが、又一つ」と、出したのを見れば、覺束なき筆の跡で、「○○紡績會社にて○○ェリ」とある、これは○○紡績に雇はれて行つて居る婆アさんの娘から來たのだ。封を切つて半ばほど迄行くと僕は躊躇した。何も知らぬ婆アさんは、もどかしそうに、「どうで御ざいます、お金でも入つては居りませんか」と問ふ。

「お金でも」の語が、僕の胸には正宗の刀よりも、鋭くこたへる。お金どころではない、ほんに可哀相なのはあの娘、氣の毒なは此の老婆である。何故か？、次ぎを見よ。「……毎日牛が馬の樣に追ひつかはれて泣いてばかり居り候。飯はナンキン米のできそこなひで、とても喰へる物ではなく、それさへ腹一ぱいは食はせられず候。今のようなつらい事ばつかりならいつそ死んでしまひたく候。それで、まあどんな事にもよう居りませんから、此の手紙のつき次第迎へに來て下され度候。もし來てもらへないなら、ぜひなく候間くびでもくゝつて死ぬつもりで御座候間……」

あゝ何たる悲慘な事だらう、今これを婆アさんに話したら、どんなに！、あゝどんなに悲しがるだらう！、あゝ僕は何と云はう。婆アさんに話した所で、其の力では迚も旅費の出ようがない。さればと云うて此の儘で置けばあの娘が!!

＊　＊　＊

あゝ情ない世の中ではないか。鬼の樣な奴が可憐な少女が血汗を絞り取りつゝあるを見て、知らず顔して居るではないか。人民を保護すべき官吏がそれを見て默つて居るではないか。彼の最も同情に富むと自慢する詩人ばらも、下らない戀は歌ふが、これ等憐命の小女が爲めには、一句をも出すを惜しむではないか。あゝ頼み難き哉今の世である。

評、情ある心、情ある筆。

貧と富と

熊本縣　高田友一

貧者は能く貧の意味を説明することが出來ない　富者も亦能く富の意味を説明することが出來ない、貧富の兩面を解し得る者唯だ貧富の兩境遇を超えたる人のみであらう。近頃名高い米國の富豪アンドリユー、カネギー氏の如きは、盡し現時貧富の兩面を解し得る資格を有つて居る一人であらうと思はれる。氏は一貧家に生まれて一弗半錢のゆづりをも受けず、絲捲小僧、汽鑵火夫、電信配達等の卑しい仕事から身を起こして八億の富を積むに至つた。其の一代の經歷已に人なみでない、而して其の平素人に向かつて説くところは、貧者を奮起せしめ富者を驚醒するに足るのである。世の人多くは貧に安んじて自ら高く標置するだけて未だ貧を以て人生の至寶とし、之れなくんば偉人を出だすに由なく、之れなくんば社會の發達を望むべからずと説くものが無い。然るに、獨りカーネギー氏は「世人は皆貧苦を絶滅せよと云ふ。余は之れに反して安逸を絶滅せよといふ」といつて居る。

世に幸福なるは貧家に生まれた青年に若くものなく、又最も憫むべきは生まれて銀の匙を口にする少年に過ぎたるはない。青年の爲めに最も貴重なる遺産は貧窶である。貧窶は青年を鍛練して有用の人物となすけれども、富は青年を墮落せしめて無能の徒輩たらしむる。それゆえ青年の始めて世の實務に就かむと欲するものは、先づ丁稚小僧、年期奉公、門番、掃除番等より始むるのがよい。若し余にして學資に餘裕があつたならば、余は一代の大學者であつたらうに、余に十分の資本さへあつたならば當今の一大事業家になれるものを、曰く何、曰く何、と。貧者が自家の無能を貧の罪に歸するもの、滔々皆然りといふ有樣である。然るに今やカーネギー氏ありて其の實行に於いて又其の持論に於いて、世のあらゆる貧者の口實を奪ひ去つた。何等の快事ぞ。

姉上を慰めて

兵庫縣　北垣青蘆

昨日お出しになつたお父さんのお手紙に、どう云ふことがあつたか知りませんが、私にはどうしてもお父さんやお母さんの心がわかりません。貧乏したから歸れと申されるのなら、あなたは金の爲めに賣られたも同樣ではありませんか。あなたは富貴貧賤の爲めに心を動かすようなお方でなくば、決してお父さんやお母さんの言に服從してはならんのです。たとひ兄さんが失敗されたとはいへ、あれは一時の商業上の失敗です。商業は決して利益ばがりあるものではありません。失敗は成功の基です。殊にあの可愛らしい金坊を殘して、どうして歸られませうか。私は何時も

姉さんのことを聞くたびに泣きます。まだ五つや六つのあどけない神樣のようなものを孤にし、親子にすることがどうして出來ませうか。

「貞女二夫に見えず」とも申します。あの深切な兄さんを、あの愛くるしい金ちやんを、あのいとしい老父母をどうして金のために見捨てゝ歸られませうか。

富貴貧賤は浮世の習ひで、富者が貴く、貧者が賤しいと云ふことは決してありません。眞正なる情愛は最も神聖で最も尊いのです。アゝ姉さん、わが親愛なる姉さん、慥細く人定まれる時、徐ろに洗思默考して下さい。

父母の命に隨ふのみが決して親孝行ではありません。私は身を碎いても姉さんが歸らずに操を守つて天分を御盡くしになることを祈ります。

第三等　四八

貧の悲しさ

安房國　石井錦治郎

「今夜もまた大風か」と、氣も落ち付かず心配して床に就いたが、あまりの大風で家が毀れはしないかとばかり思つて眠らうと思つても眠られず、色々の物音を聞くにつれて心の中は搔き亂され、如何ほど靜めよう氣を引つ立てようとあせつても、唯益〻思ひ寢るに許りだ。吁自分はどうして斯んなに臆甲斐ないのであらうか。大風が吹けば家はこはれる、雨が降れば車は曳かれぬ、冬になると着るに衣はなく、夏になれば蚊を防ぐに蚊帳もない。それに夜を照らす油さへ充分に買ふことが出來ないではないか。吁貧程つらいものはないと許りに悲しんで居ると、小學時代には自分より學才の遙かに劣つて居た學友が近日中學校や師範學校に入學するとの事だに、自分は空しく涙を呑み、年が年中眞黒助になつて、顏からは汗を流して車を曳いて居る馬鹿々々しさ。おまけにその者には嘲笑される、友達には賤しめられる、三度の食事も思ふ儘ならず、學校は勿論、讀みたい書物も買はれず謂まれず、ほんに自分の樣なものは息が通つて脈が打つて居るといふ許りで實は死んだも同然だ。それに只ツた一人の姉樣が、數年前家出して今に行衛知れず、跡には五十路の坂を數年前に過ごした父母と我れ許りだ。悲嘆の中にも父母は唯だ我が行末を案じんで居られる。此の樣な日夜見て居る我が心はどんなであらう。幾ら叫んだとて聲には限りがある、泣いたとて涙が涸れて泣くことが出來ぬ。死んだも同然の自分は何時迄斯うして人に賤しみ笑はれて居るのであらうか。

評、志ある所必ず道ありといふ古言を知らずや。

貧賤と富貴と